
導乎草子～草子シリーズ2～

空野妃紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

導乎草子〜草子シリーズ2〜

【Nコード】

N4761D

【作者名】

空野妃紫

【あらすじ】

草子シリーズ第二段。紅葉の師匠&姉さま登場。紅葉を育てた二人に昴摩は気に入られるのか

序章

赤い地平のもと一方的な約束の証にとほうにくれる。

友は自分の信念のためにわが子をたくしていったのだ。

わが子を殺すかもしれない相手の手のもとへ。

そんな友に「殺す」とつげても友は「あなた達なら、大丈夫」と微笑むだけだった。

絶大な信頼をよせられることがこれほどつらかったことはなかった。そのあと友は罪人としてこの世からいなくなった。わが子の成長をみることもなく。

たくされた赤子の名は紅葉^{くれな}。世界から忌みきらわれてうまれてきた者。

この子さえいなければ、友をうしなうことはなかった。というおもいは時のうつりとともにやわらぎうすれて友の言葉が頭によぎる。

愛で育ててあげて、愛という至上の幸せをかんじさせてあげて。愛をしない者には愛をあたえることはできないから。道をふみはずすことのないように、愛という光りの筋をあたえてあげて。

もう私にはできないから

赤い空、赤い地平が語りかける。友の願いをかなえてやれと。

ときに強く、ときにささやくように。

そして、時のながれは友の願いを愛へとかえる。

友が命をかけた愛児に身をていして愛をかたりはじめる。

愛児の魂を守り導く番人となる。

それは、友が信じたもののその者になる。

覚悟のすえ、未来にあるものが友の信念であつたと信じながら。

1 天敵

春爛漫。色とりどりの花たちがところかまわず咲き乱れる春の野。例外なく紅葉の屋敷にも花々が我が一番だといわんばかりに誇らしげに咲いている。黄色や薄桃色、若葉のみめ鮮やかな息吹はさらに春めかしく眩い光をはなっていた。すべての植物が主役のような顔をしている春の野山。鳥も煌びやかな花たちにのせられて陽気に歌うは春の歌。

雪どけ水に船をうかべ紅葉は水面にふれる。春の陽射しは紅葉をゆったりとした気持ちにさせる。流れてきた赤い椿は紅葉の手にしばしとどまりふたたび流れていく。

紅葉は水面から手をはなすと船のうえにあおむけになった。紅葉の目にうつるのは春の陽射しをうける桜の枝。空に網目状に広がる枝は春の主役になるときをまつているのかもしれない。

陽射しに誘われ紅葉は目をとじる。まどろむには四季のなかではやはり春が一番だ。ゆったりと流れていく紅葉は春の贅沢を堪能していた。このまま寝てもべつになんの支障もない。

崇高な術者と誉れ高い紅葉はけっして何者にもつかず何者にも流されはしない。そのことが権力者たちにはときに畏怖として感じるときに頼らざるおえないことになる。都は神仏や術者によってその形をとどめているのだ。

都にいる陰陽師に紅葉のかわりができないことは半年前におこった事件で証明されている。紅葉の評判もかなりその事件によってかわっている。鬼を従えた妖かしのような術者と恐れられていたが、いまは何人たりともならぶことはできない崇高な術者と称えられている。都の女たちにいたっては“紅葉様”と熱心な恋文がとどくほどだ。

昴摩は船をあやつりながら春を堪能している紅葉をみる。目をつぶる紅葉の姿はいい譬えることができない花のようだった。どんなに

春の花々が自分たちの優美さを競い自慢してもけっして紅葉には勝つことはできないだろう。

本来なにもにも縛られることのない鬼の妖かしであり、その鬼族の長の子供である昴摩だが紅葉に使役されている。紅葉に出会い。紅葉に魅せられて妖かしの本能をすて紅葉につかえることを望んだ。紅葉があのと受け入れてくれたからこそ自分はこうしてそばにいられる。そのときにはそれで満足した紅葉へのおもいは年々時をかさねるほどにつよくなるばかりで際限はない。そう欲するのは妖かしであるからか。それとも生きている者の性なのだろうか。紅葉はなにもわからないような無邪気な顔をして春の陽射しに祝福されている。どんなものたちの祝福をうけるよりも独占したいものがここにあった。これ以上の立場を望むことは許されないとしりながら。

船を操る水面の音が鳥の奏でる音と調和してのどかに流れていく。そのまま雪どけの川をくだっていくといつのまにか紅葉は眠ってしまった。おだやかに眠る紅葉の姿には年相応の少女の顔があった。この姿をみたものはこれがあの噂にきく者とは誰もおもわないだろう。

昴摩は船をとめると紅葉を抱きあげる。紅葉はそれでもすやすやと眠りつつけていた。紅葉が眠るのは信頼の証である。他人の前であっても眠ることはあるが、警戒をしていてこんなふうに穏やかにただ眠っていることはない。いまだに思い出すと飛び跳ねるほど嬉しい。

あのかきはあまりの感激にいつまでもいつまでもおだやかになんの警戒もせず眠る紅葉の顔をあきずにみていた。いまでは毎夜、紅葉のそばで眠ることを許されている。それはものすごく幸運なことであるのだが、それだけでは足りないとおもうのはやはり妖かしの本能なのだろうか。

紅葉の信頼を得、いかなるときも紅葉のそばにいられることは昴摩にとって星や月をつかむことよりも困難なことであった。この世に

あるどんな宝よりもすばらしいものを手にいれたとゆうのに、ときがたてば、そばにちかづくほど欲はどんどんと深くなっていく。

紅葉を抱いたまま桜の木のしたにすわった。春の陽射しはほんとうにおだやかで眠りをさそう。自分がこんなおだやかな時間を愛するようになるとはおもってもいなかった。

もともと昴摩は妖かしである。こんなおだやかな世界とは無縁の生活をおくってきたのだ。欲望のまま殺戮をくりかえし、血に染まる夜の闇が昴摩の生きてきた世界だった。紅葉に出会うまで自分が自分の最高の舞台だと信じて疑わなかった。

腕のなかの紅葉からはなんの警戒も感じない。自分のすべてを昴摩にゆだねているということがわかる。そのことが昴摩にはなによりも重大なことのようを感じる。どんな幸福よりも満たされる瞬間。でも、もっともつと紅葉のそばにいたい。紅葉に求めて欲しい。誰よりも自分だけがちかくにいたい。

こんなふうにそばにいるようになってわかったこと。それは紅葉がよく眠るとゆうこと。はじめて逢ったときには紅葉はまったく寝なかったのである。

どうせ今日もこのまま時がすぎるのも忘れてきがすむまで眠りつづけてしまうのだろう。陽のでているあいだならそれもいい。昴摩はそんなことをかんがえながら紅葉の寝顔をみているのだった。

紅葉の力のいきわたったこの山では不用意に許しなき者がふみいることはない。それでも、まれではあるが認められない訪問者が訪れることがある。理由はそれぞれであるが、訪れる者すべてが紅葉を目あててくるのである。

紅葉を有害な者たちから守ることそれが昴摩の一番の役目である。それ以外にもしばし紅葉のもとをはなれて紅葉に依頼された仕事をかわりにこなす。紅葉がすすんでこの地からはなれることはあまりなかった。

（ああ、それにしても春の陽射しが美しい）

春のあいだはひたすら眠い。花々を愛するのも大好きだがそれ以上にまどろむことが紅葉には最高の幸せだ。花を愛で陽射しをうけて空をみる。春を体中で感じたままそのまままどろむのはどんなに癒されるか。

春に一年間の鋭気を養うことは大切なことだ。木々たちが浮かれば紅葉の気持ちも自然と浮かれてしまう。浮かれ、陽気な春の雰囲気に誘われ、飲む酒もこの季節の楽しみのひとつだ。

「柏、酒がないぞ」

紅葉は杯をかけて柏にいった。しかし、あらわれた柏は酒をもつてはいない。

「もう、おやめなさい。飲みすぎですよ。毎晩、毎晩、毎晩」

紅葉はぶうとふくれた顔になるとまだ杯にはいったままになっている。昴摩の酒に目をつける。梅見酒だといって連日のみつづけている。

「昴摩、それちょうだい」

甘えた声で昴摩の名をよび、無邪気をお願いをする。それだけで昴摩はくらくらきってしまった。そして、つつい杯をわたしてしまふ。

「うん、うまい」

紅葉は唇をぺろりと舐めると満足そうにいう。紅葉のもとにあつめられるものはすべてが高級品だ。紅葉に謝礼としてわたされるものや貢がれているものもある。蒼はとくに貢いでくれている。いま飲んでる酒だって大陸の名酒だそうだ。蒼がよこしたものだつた。（ああ、でももっと飲みたい）

円融がいればこんなおもしろくないですんだ。円融は仕事にいつている。なんでも家に物の怪がすみついて夜な夜なわるさをするらしい。はなしに聞くだけでも簡単そうな仕事だったので円融がいくことになった。いつもは昴摩がいくのだが円融がいきたいといったのだ。

陰陽師をしのぐ力があり帝よりも神にちかいとされた一族の生き

のこりである紅葉のもとには国中からこうして依頼がくる。大半を
昴摩や円融、柏が処理し主である紅葉はほとんどこの屋敷からでる
ことはない。

（こんなことなら柏をいかせばよかった）

紅葉は自分の浅はかさを呪うように心のなかでつぶやく。べつに
円融と柏の二人がいつてもよかったのだ。

「なにかいいましたか？紅葉様」

心のなかでおもっていたただけなのに柏にすかさずつこまれ紅葉
はつくろうようになんでもない顔をしている。

「なんにもない」

なんでわかるのか不思議だ。

それでもやつぱり物足りない。たおれるまでとはいわないがあと
一升くらいは飲みたい。こんなとき円融がいてくれたら「まあまあ」
といいながらたらふく飲ませてくれるのに。昴摩をちらつとみるが
柏に睨まれてきまずそうな顔をしているだけだった。やはり、柏と
対等にやりあえるのは円融しかない。

「紅葉、もう寝たほうがいいぞ」

柏の圧力に負けた昴摩が紅葉にそういうと抱きあげて退散する。
納得のいかない紅葉は昴摩に目でうったえる。再戦しろと。しかし、
昴摩は目をそらして奥へと退散してしまった。

それから二日たって円融がもどってきた。まちにまった円融の帰
りに紅葉は大喜びで円融をむかいいれた。

「遅かったじゃないか。ずっとまっていたんだぞ」

紅葉の言葉ににこにこ笑いながらいった。

「仕事ははやくおわったんですが、つつい寄り道をしてしまいま
した。ひさしぶりの下界でしたからね」

こういう簡単な仕事にいくのはだいたい昴摩がいくことになつて
いる。移動時間に時間がかからないからだ。柏にいわせると昴摩が
いちばん屋敷のていれや維持に不要だという理由らしい。

「おまえがいらないから寂しかったぞ」

「やれやれ、柏にやられっぱなしだったみたいですね。柏、酒をもってきてください」

円融は楽しそうに笑いながらいった。円融は心得ているように柏に酒をもってくるようにいった。しかし、柏はなにももたずにあらわれて円融にいう。

「だめですよ。昼間から・・・それに紅葉様、昨晚もたくさんお飲みになったでしょう」

紅葉はふくれ面になり柏に無言の抗議をするがこたえるわけがない。こたえるよう相手なら円融がいないあいだも日中に酒を楽しめていた。

「まあいいじゃないですか。私の仕事も無事におわったんですし」
円融は“祝いですよ”とでもいうように柏に酒をもってくるようにいった。柏は円融の顔をみてかるくため息をつくと仕方なさそうに奥へと酒の準備をしにいった。

紅葉は嬉しくてほくほくとした期待を満面にだす。やはり円融がいると生活が別段に豊かになる感じた。このなりゆきをみていた昴摩はやはり円融だけが柏に対抗できるとしみじみおもった。

しばらくして柏が酒を肴とともにもってきた。紅葉の機嫌がぐんぐん上昇していくのを感じながら昴摩も春の陽射しのなかで酒をのむ。たしかに、春の陽気とともに飲む酒は格別な味がする。円融はそんな紅葉を微笑ましくおもいながらおもう。

（いまのうちですからね）

紅葉は式をつかって舞を躍らせ春の景色を舞台におおいに楽しんだ。奏でる楽器の音にふわりふわりと優雅に舞い踊る式。夢のような豪華な春の宴は紅葉のきがすむまでつづいていく。

円融が帰ってきてからというものの毎朝、毎晩、休むまもなく飲んで飲んで飲みまくっている生活をおくっている。朝おきて一杯のみ、昼は白、薄桃、梅色の花びらをもとめて船でながされながら酒をのむ。夜になれば月や星、梅の桜を愛でて飲む。梅はいまが満開の時期だった。

柏ががみがみいつてきても円融がいれば怖くはない。

今日も楽しく酒を飲んでいると一人の使者がきた。使者といっても術者が使役する式で用件を伝えると蝶の形になりぱたりと動かなくなった。用件は村に物の怪があらわれて夜な夜な若い娘をつれさつてしまふから、その物の怪を退治してほしい、というものだった。

「昴摩、おまえいつてこい」

この程度なら昴摩でじゅうぶんだし紅葉としては春のこの宴を手ばなすのはおいしい。梅がおわれれば、桜がまっついていて、桜がすぎれば今度は藤がやってくる。春はいそがしいのだ。

かといって円融にいかせれば柏の勢力がおおきくなって制限されてしまう。昴摩ほどの適任はいないだろう。

「オレが？ そうだな。たいしたことないだろうし。駿河の国なら二日もあれば帰ってこれる」

昴摩はそういつとさっそく準備のために部屋へとさがっていった。紅葉は満足そうに昴摩の背をみおくった。そんな紅葉に柏はいった。「紅葉様もたまにはお仕事をなさいませ」

柏はそういつて紅葉の手から杯をとってしまふ。紅葉は手をのばしてとりかえそうとしたがあと一歩およばない。

「べつにたいした仕事でもないのにわざわざいいだろう。なあ、円融」

「そうですね」

紅葉は円融が加勢してくれるようにはなしをふった。

「たまには体を動かすのもいいですよ。軽い運動は体によいですから」

しかし、円融は裏切ったのだ。

「はい、はい。決まりですね。お支度しましょう」

柏はそういつて紅葉をつれていつてしまふ。紅葉には反論する余裕もあたえられない。目で表情で嫌だ、と円融にうつたえたが円融はにこやかに笑いながら手をふるだけだった。

「昴摩、まちなさい」

柏に呼びとめられて昴摩はふりかえる。今回はすこし遠いので妖獣にのつていこうとおもい召喚したところだった。普段は自分の足でかけるのだが。

赤と黒の獣に羽根のはえた妖獣は紅葉とあつまえから昴摩が飼いなしているものだ。魔界を散歩していたときに卵をひろったものをここまで育てたのだ。普段は魔界を自由に走りまわらせているがこうして主人である昴摩が呼べばすぐにあらわれる。

「なんだ？紅葉もくるのか」

戦うときに好んできている直衣姿をみて昴摩はいった。頭から唐衣をかぶり紅葉はむすつとしている。ひと目で機嫌がわるいとわかった。

「そうですよ。たまには体を動かさないとわるいですからね」

紅葉がこたえないかわりに柏がこたえる。機嫌のわるい紅葉は無防備に妖獣にちかづいていった。いくら、紅葉でも術で使役していない妖獣に不用意にちかづくのは危険である。

「紅葉っ、危ない！玉莉ぎょくりにふれるな」

昴摩はあわてて妖獣の首をおさえつける。そんな昴摩を無視して紅葉は幼獣のまえに無防備にたつとギンツと睨みつけた。紅葉に飛びつこうと態勢を低くしたまま幼獣も紅葉から目をはなそうとはしない。そうして、数分くらいすぎたころだろうか。

幼獣の気配がかわる。体から緊張がとけて殺気もきえる。そして、甘えるように紅葉に顔をすりよせた。

「さ、さすが・・・」

昴摩はそれ以上言葉がでない。本来ならありえない状況を目にしてそれしか言葉がでなかった。使役もせず、犬のように眼力だけで妖獣を馴けてしまった。

それでもこの妖獣の種族は魔界一擲猛で能力的にはたかいが妖かしですらなかなか成獣を馴けることはできない。とくに昴摩が手塩にかけて育てたこの妖獣は何人もの使用人を食い殺していて、しかも、昴摩の父親も指を食い千切られている。

「さあ、いくぞ。昴摩」

いつのまにか妖獣にのりこんでしまった紅葉は昴摩をみおろしていった。

「お、おう」

昴摩はあわてて玉莉にのりこむと柏をのこしてとびたつていった。以前、紅葉の機嫌はわるく。眼下にひろがる山の色はどこまでも春の絢爛さと陽気さをたたえていた。あつとゆうまに柏の姿はみえなくなり屋敷もただの点のようになる。案内役の使役された蝶がひらひらと春の野山のうえを飛びあがる。

空を翔ること一刻たらず。紅葉たちは目的の場所についていた。紅葉がここ駿河の国にきたのはもう何年ぶりのことだろうか。富士のお山をみあげながら紅葉はおもう。はじめこの地にきたときには柏や円融はそんざいしなかった。もう、ずいぶん昔のことのように感じる。

「紅葉、あの村らしいぜ」

案内役の蝶が村の中心におりたつた。昴摩もおなじようにその村におりたつ。いままで自分たちを案内していた蝶は一人の青年の肩に羽根を休めていた。

村人たちは怯えながら離れて空から舞い降りた妖獣をかこんでいる。まあ、とうぜんだろう。普通の人間にとって妖獣は妖かしや物の怪とおなじように自分たちの敵でしかない。こんなふうには怯えと殺気で迎えられることはなれている。

「蝶がつれてきたとゆうことは貴方がかの有名な紅葉殿か」

青年は昴摩にむかつていった。お粗末な力しかもっていないその青年陰陽師はどうやら、昴摩を紅葉と間違っているようだ。まあ、無理もないだろう。紅葉は性別も年齢も人であるかさえもわからない。ただ、助けを求める者たちはなんびとも犯すことは許されない絶対的な紅葉の力をたよるのだ。すぐる者からすれば魔に魂を売るような覚悟といえるかもしれない。

「おまえが依頼者か。残念ながらオレは紅葉じゃない」

そういつて昴摩はまだ妖獣にまたがったままの紅葉に視線をおくった。顔を隠すように頭から唐衣をかぶっていた紅葉はぱらりと顔をだした。春の絢爛さをあらわした錦の衣に隠されていたその顔は錦の衣以上に美しい顔だ。

「さっそく仕事の話をしよう」

自己紹介もなにもせず紅葉はいそいでいるとでもいうようにいった。妖かしに魅入られるように紅葉の美しさに魅入られていた品疎な青年ははっとしたように紅葉に声をかける。

「ではこちらへ」

紅葉はもう機嫌がわるくはないようだったが、邪魔臭いとおもっているのはよくわかる。基本的に自分の関心があること以外で労力を使うことを嫌うふしのある紅葉は今回のこともまったく興味がな

い。

昴摩は妖獣に魔界へ帰るように指示すると紅葉のあとにつづく。自分たちを囲んでいた人の輪は途切れわかれていく。そのあいだを歩きながら昴摩は紅葉に見惚れているやつらの顔を瞬時に覚える。紅葉を恍惚とした表情でみているのはなにも男ばかりではない。

直衣に女人の唐衣をまとった紅葉は男にも女にもつかない。髪は馬の尻尾のようにゆつてあり少年のようでもあるがその表情があまりにも大人っぽい。ただでさえ美しい顔は性別がつきにくいというのに紅葉の格好はそのどちらかひとつにまとめられていない。そのことがよけいに人々を惑わせる。

「とゆうことは夜までなにもすることないじゃねえか」

ぱつといつてぱつと帰ってくるつもりだった昴摩は説明を聞いていった。この品疎な青年陰陽師のはなしでは物の怪は夜になると一人また一人と村の若い娘をさらっていくそうだ。しかも、夜にならな

いとあらわれないらしい。

「今晚が最後というわけだな」

この村にのこっている娘はあと一人。今晚、村にのこるただ一人

の娘をさらいおわつたらもうあらわれないか、最後にこの村を消すかどちらかだろう。

「さらわれた娘はもうあきらめています。ですが彼女までいなくなつたら村にもう子供は望めません」

青年の言葉に昴摩はそんなのほかから調達すればいいだろうと非人道的なおもいながら退屈そうにきいた。所詮、昴摩も妖かしだ。暴れられればそれでいいというところがある。その前後などどうでもいいはなしなのだ。

「昴摩、おまえたちそんなに人を食うのか？」

「いや、人はけつこう腹にくるからな・・・いちどたらふく食うと、そうだな一月ぐらいはもつかな」

紅葉の質問に昴摩は昔人を食ったときのことをおもいだしながらこたえた。妖かしも物の怪も主食は以外にも野山の獣を食べている人間といつても美味しい者と不味い者がある。美味しい人間は数が少ないし、よつぽど腹がへつてないとそのへんの不味い人間など食わない。

「じゃあ、自分の食べる分ではないかもしれないな」

紅葉の呟きにおもいだしたように昴摩はいった。そういえば昔、若い娘を酒で熟成させた肉を食ったことがある。父親に献上されたものだったからどんなやつがどうやってつくるのかは知らないが。

（ああ、あれは美味かった）

「そういえば、若い娘の酒づけを昔、食ったことがある。たしか、あれは食べる直前まで生きてたぜ」

「そうか・・・」

そういつて紅葉はすこしうつむきだまってしまった。すこしふせられた睫毛が顔にかすかに影をおとして儚げな感じがする。

（そういえば、あれは美しい娘であればあるほど美味いと親父がいつてたな）

そんなことをおもいだしながら紅葉をみる。紅葉の酒づけならこの世のものとはおもえぬほどの美味だろう。しかし、そんなもつた

いないことはできないが。

(たしか、酒の名前は……)

「……白^{はくめいしゅ}瞑酒^{めいしゅ}つつたかな」

昴摩は娘をつけていた酒の名前もおもいだした。娘といっしょにそのつけている酒も飲んだのだ。意外と昔のことを長々と細かく覚えていたものである。

「では、もしかしたら娘たちは生きているかもしれないですね」

青年は一縷の望みをつかんだような顔でいった。紅葉はなにかを考えるようにおいていた手をはなすにとりと笑みをこぼした。昴摩はその笑みにいやな予感と冷や汗をかく。こうゆう顔をしたときの紅葉のおもいつきはろくなものはない。

「よし、私が囹になろう」

(やっぱり)

そういつてるんで支度をしにこうとする紅葉の肩をつかんだ。「さて、それはだめだろう。もし魔界なんかにいつてもしものがあつたら」

紅葉が負けるとはおもわないが、魔界はやはり魔の者に有利なようにできている。天が天の者たちにとって心地よいようにできているように。人間のすむこの世はその中間であるから天人のように強く影響をうけるとはおもわないが。人間でも紅葉は天人にもっともちかいからもしかすると力が弱まったり体に変調をきたしたりするかもしれない。

「おまえもついてくればいいだろう」

「オレがいたとしても反対だっ！こっちにきたときに始末してそれで仕事はおわりだろう。いちいち寢床にいく必要はない」

なんでもないようにいうと昴摩の手をふりはらう。紅葉は村娘がきていた小袖を紙で用意するとさつさと服をぬぎすてる。昴摩はあわてて青年の目から紅葉の体をかくす。紅葉はきにすることもなく着がえ終わると、おなじように紙で紅を用意すると唇にひいた。

「だいたい、具合がわるくなつたらどうする！魔界だぞ、紅葉たち

の常識がつつようするところじゃねえ！」

（じつは昔からいちど魔界にいつてみたかったんだ。それに・・・）

艶やかな黒い髪をおろし櫛をとおして村娘のように束ねた。そして、キャンキャンとわめいている昴摩にくるつとふりかえるとにっこり笑っていう。

「どうだ？素朴な感じがいいだろう」

おもわずその顔に昴摩の言葉がきえる。たしかによかった。

（そうじゃなくてッ）

「だめだ。絶対に反対だ！」

「うん？美しくないか？素朴な感じは似合わないのか？」

紅葉は昴摩の言葉の意味をわかっていながらわざと昴摩に見当違いのこたえをかえした。昴摩はそれからあきらめたように肩をおとしていった。

「素朴な感じもいい」

その言葉に満足して紅葉は妖艶にはほ笑むと昴摩の顔をみながらいう。

「いちどいつてみたかったんだ魔界」

その言葉に昴摩は覚悟をきめるしかなかった。なにがあっても紅葉を守らなければならない。うきうきと浮かれている紅葉ときが重そうにうなだれている昴摩を青年は困惑の瞳でみつめていた。

夜。紅葉は村にのこったもう一人の娘といっしょに村のそとにいた。やはりこちらは屋敷とはちがいすこし寒い。肩が夜の冷たさにしたたかにふるえる。

「風邪ひくぞ」

そういつて昴摩は紅葉の体を温めるように腕をまわした。紅葉の背中にじんわりと昴摩のぬくもりがつつたわってくる。いたわるようなその温かさが紅葉は好きでありそして、照れくさい。

「まあ、風邪ひいて殺されるのはおまえだろう」

昴摩は紅葉のその言葉に二本の角をはやして鬼よりも怖い顔をし

て怒っている柏の姿を想像してしまった。そして、寒さではないふるえを感じる。

「紅葉、そんな薄着をするな」

そういつて自分の衣のなかにすっぽりと紅葉をいれてしまう。そんな二人を真つ赤な顔でみているのは村娘と青年陰陽師だ。二人はきまずそうに視線をはずしている。二人にとつては普通なことでも屋敷から一步であれば普通ではなくなる。

昂摩はいつもの服装のうえに紅葉がかぶっていた唐衣をかわりに頭からかぶっている。紅葉がせつかく用意してやった村娘の衣装にけつして袖をとおさなかつた昂摩はせめてそれをかぶることになったのだ。

紅葉としては面白半分で紅をひき女装をした昂摩をみてみたかつたが、本人が断固嫌がるのではしかたない。性格の大半が優しさでできている紅葉には無理をしいるということはできなかった。

（はぁ、残念）

昂摩は妖かしらしくととのつたきれいな顔をしているからきつと女装させたら美女になるだろうとおもうのだが。それにかわいらしく着飾つた昂摩をからかいながら愛でるのは楽しそうだったのにほんとうに残念である。

そんなことをかんがえていると突然、空気がかわつた。闇の色がこくなる。

「きたな」

昂摩の言葉にぐつとまわりの雰囲気緊張したものになる。紅葉は心からわきあがるわくわくとした高揚感がとめられない。昂摩もずっと自分の気配をけして正体を隠すように衣をまとつた。

これでもかという演出であらわれたのは火車に乗つた豚の物の怪。物の怪は地上にいる紅葉たちの姿をちらりとみると目のまえにおりてきた。青年は紅葉たちの前にたち物の怪にむかつていった。

「今宵こそはそなたを退治する」

しかし、物の怪はいともたやすく青年をはねのけてしまった。言

葉と実力がともなっていないのが青年の悲しいところである。物の怪はでぶんとした腹と醜い豚の顔で紅葉たちにせまってきた。

紅葉は怯えたように「きゃー」と悲鳴をあげる。そして、自分の顔を蒼白にそめてあまりの恐怖に気絶する。村娘はあまりの恐ろしさにはぶるぶる震え声もでないようである。かわいそうなほど怯えその目には涙がたまっていた。

「おお、これは美しい。ひさしぶりに上物が味わえる」

豚の物の怪は紅葉の顔をみて呟くとまっさきに紅葉をつかみあげた。そして、大事そうに小脇にかかえる。続けて昴摩を肩に抱え上げ、村娘を荷物をもつようにつかむと車におしこめた。そして、車は天へと駆けあがっていく。

紅葉はわくわく、ときどきがおさまらない。祭りがはじめるまえの子供のような高揚感をつのらせていた。

紅葉たちは鉄格子の檻のなかにいれられた。そこにはたくさんの娘たちがとじこめられていた。目を配ればもうすでに酒につけられてしまっている娘たちもいた。それと白瞑酒もある。

「ここが魔界か。たいしたことなさそうだな」

自分の体になんの異変も感じていない紅葉がいう。

「ここは魔界の門のまえだ。だから、魔界じゃねえ」

昴摩のこたえにがっくりと肩をおとした。しかし、気をおとしてばかりはいられない。もうひとつの目的はなんなくこなせそうだ。でも、慎重にやらないと失敗はゆるされない。

「あの豚、物の怪では上の上だな。まあ、オレには糞みたいなもんだがな」

鉄格子ごしに昴摩は豚の物の怪をみていった。この鉄格子もなくてことはない代物だし、これなら簡単に片付きそうだと算段をたてる。

あたりは魔界随一とうたわれる美酒、白瞑酒のつよい香りがたちこめている。普通の人間ならこの匂いだけで酔ってしまふ。案の定、

この檻にいる娘たちは匂いで完全に酔っ払っていた。いま素面で見られているのは昴摩と紅葉ぐらいだろう。

魔界の門のまえといっても紅葉の体調が心配だ。なんともなさそうにはしているがもしものことがあってからじゃ遅い。昴摩は紅葉の横顔を再三みる。そして、血色のよさそうな顔をみて安心するのだった。紅葉のことがきがきではなくおちつけない。

（一刻もはやくおわらせるぞ）

昴摩がこんな茶番をおわらせようとたちあがろうとしたとき。

「紅葉っ」

紅葉の名をよんで抱きついてきた。

「こんなところで会うなんて」

そいつは紅葉の体をぎゅうと抱きしめてあろうことか紅葉の頬に口づけている。しかも、何回も何回もだ。

昴摩が力ずくでそいつをはがそうとしたが、睨まれて体が動けなくなる。

（なっ、なんだ）

昴摩は困惑をしながらそいつをみる。派手な柄の衣を肌蹴てきていて胸には雲と龍の印がある。その女は昴摩を嘗めまわすように観察するとふんと馬鹿にするようにわらった。

「紅葉、ほんとにこんなので満足なの？」

紅葉の頬にふれながらあやしい眼差しをむけていった。大人の色香をただよわせて紅葉の頬から顎へと指が滑っていく。紅葉はされるがまだ。

（ぎゃー、紅葉がくわれるっ）

声もでないので昴摩は心のなかでできるかぎりさげんだ。そんな昴摩を尻目に紅葉はため息をついていった。

「やめてください。師匠」

そのころ、生野の屋敷では夜の梅を愛でながら柏と円融が散歩をしていた。梅はやはり昼がいいなとおもいながら梅を愛でる。

柏ははあと悩ましくため息をついた。梅の美しさにおもわずため息がでたわけではない。

「心配しすぎですよ」

憂い顔でため息をつく柏に円融はいった。そして、諭すようにいう。

「大丈夫ですよ、心配しなくても。なにも魔の巣窟におくりだしたわけではありませんし」

「でも・・・」

柏は円融の言葉にそういいにごそうとしたが、おもいなおしたように自分にいきかせる。

「そうね。紅葉様に害を及ぼすことはないでしょう」

「そうですよ。あの方が間違ってもそんなことはありません」

柏の言葉に安心させるように円融は言葉をかさねた。そのとき、一人の男があらわれた。その男は柏や円融たちには馴染み深い男だ。人間でこの地に容易にたちいることのできる数少ない男。

「よう、帰ったぜ」

気安くはなしかけてきた男に円融はにつこりとほほ笑む。柏もおなじように親しみぶかい表情をうかべてあらわれた男にいう。

「やっと帰ってきたんですね。このあいだ盛智が唐にいつているとおっしゃっていましたよ」

男は「おう」とこたえて二人に聞いた。

「紅葉はどこにいる？土産がたくさんあるんだ」

そういつて懷から一枚の紙をだす。紙には『袋』とかかかれている。紅葉からわたされたもののひとつだ。紅葉特製のその紙をぺらぺらさせながら楽しそうにわらう。

「蒼殿、残念ですけど紅葉様はいませんよ」

円融の言葉に意外そうに蒼はこたえる。紅葉がこの敷地からであることはめったにない。だから、いつでもここにくると紅葉にあえるのだが。

「めずらしい。どこいったんだ？」

「仕事ですよ。たまには体を動かせないと飲んでばかりですからね」
柏の言葉に蒼はおかしそうにはっはっはと笑う。あいかわらずらしい。しかし、せっかくの帰還なのだ紅葉の顔をみないで去るのはなごりおいしい。それにでかけているあいだに紅葉が飼った鬼もみてみたい。

「そりや残念。翁がいつてた紅葉の飼い魔もみてみたかったんだ。いるだろう？」

蒼がいった『翁』とは盛智のことである。ここにくるまえに盛智のところへよってきたのだ。ほんとうは紅葉の屋敷にこずまたどこかへふつらといくつもりだったが、盛智に鬼のことをきいて興味がわいたのだ。

「昴摩のことですか？ いっしょにいつていますよ。紅葉様と」

柏の返答に蒼はふくんと興味ぶかげにいった。その顔をみて円融は（ああ、この人は）とおもう。紅葉に懸想を抱いていることをしっていた。しかし、どんなに紅葉につたえてもそれをうけとってはもらえないことも蒼は知っている。

やはり、ここまできて帰るのは惜しい。どうせ、また旅にでるのだ。紅葉の仕事先にいくのもおもしろいかもしれない。仕事先には紅葉の飼い魔もいるのだ。

「どこいったんだ。紅葉に会わないと帰れないだろう」

（また、めんどろなことに）

蒼のこたえに柏はおもう。ただでさえ、昴摩と蒼の直接対峙はさけたいのにいまはあの方までいる。ややこしいことになるのは必至であった。柏がこたえられずにいると円融がかわりにこたえる。

「いくのはよいですが、駿河国ですよ」

駿河国ときいて蒼の口元がゆがむ。口をびくびくさせていった。

「ま、まさか・・・」

その態度に柏も自分が失念をしていたことにきづく。蒼はけっしていま紅葉がいるところにはいけないのだということに。

「そうです。螢蘭様のところですよ」

円融はさらつといった。蒼はその名をきくだけで体がうずくのを感じた。そして、蒼白な顔になる。

「あのお方のところへ」

そうつぶやいた。蒼がはじめて螢蘭にあつたのは一五のときだった。はじめてあつたあのときから逆らつてはいけないものを感じたが、あの決定的なできごとがおきてから蒼は御方のお名前すら発することができなくなった。聞けばそのときの悪夢がいとたやすくよみがえる。

紅葉は螢蘭をおしかえしてたちあがると情けなくもかたまつたまの昴摩の背中をばしつとたたいた。すると不思議にも体が動くようになる。

「はつう」

紅葉が師匠とよんだ女は不服そうに紅葉のした行動をみていた。昴摩の頭にはただただ困惑しかつかばず、どうしていいのかわからない。

へんな術だった。術をかけた本人の力をまったく感じない。感覚的には自然とそう、ごく自然と体が動かなくなったという感じだった。それに紅葉に師匠がいたなんて初聞きだ。

「それより、師匠はどうしてここに」

いつもとはちがいどこか丁寧な口調の紅葉。おしかえされたというのにめげずに紅葉にひつつきながら螢蘭はくすつと不敵にわらった。そして、視線を瓶にやる。

「もちろん、白瞑酒がめあてにきまつてるじゃない」

そして、豚の物の怪をみてつづけていう。紅葉はべりつと螢蘭を自分からはがした。

「あの豚から白瞑酒のいい匂いがするんだもん。そうじゃなきゃ、あんな醜いものといっしょにいるわけないでしょう。私は醜いものはきらいなの」

螢蘭の言葉になんとなく紅葉とおなじ匂いを感じる。

（でも、なんかもつと似ているやつがいたような）

螢蘭は昴摩をじろじろみてる。昴摩の顎に手をかけてもつかたほうを腰にあてて昴摩の顔をみていていった。

「ぶさいく」

昴摩はその言葉に衝撃をつける。それほど美貌に執着があるわけではないが妖かしである以上、ぶさいくの汚名をつけられることはできない。妖かしにとって美しさは一種の武器なのである。人間をかどわかすのはやはりこの美しさがあつてこそだ。

「な、なんだっ……」

動揺しつつも昴摩はつぶやいた。たしかに螢蘭はうつくしい顔をしている。印象的なおおきな瞳は見る者をすいこんでしまいそうなほど瞳に力があつた。だが、あんなふうにいわれるいわれはない。

「紅葉には似あわないわよ。こんな飼い魔。私がもつといいのを捕まえてきてあげる」

「師匠、あまりいじめないください。それでも私は気にいつてるんですから」

飼い魔あつかいされた昴摩は紅葉の言葉がきこえなかった。飼い魔といえば妖獣につかう言葉で魔界でいちばん位のたかい妖かしにつかう言葉じゃない。あまりの侮蔑に昴摩はぶるぶると体がふるえた。

「だ、だれが……飼い魔……だと」

昴摩の気配が剣呑としたものにかわつたのをいちはやく察知した紅葉は昴摩にむかつていった。

「昴摩もいちいち師匠の言葉に反応するな」

今にも噛みついてしまいそうな昴摩に紅葉はちかよつておさえる。吼えている犬の首輪をおさえるようにしている感覚だ。昴摩はガールルと喉を鳴らしながら紅葉にしがみついている。

「ああ、紅葉の飼い魔がこんなぱーちくりんなんで、師匠かなしい」

「師匠っ」

昴摩を挑発してさらに言葉をかける螢蘭を紅葉はいさめた。

（ああ、この人のこうゆうところはなおしてほしい）

たしかに術者として螢蘭以上の人はいないと紅葉もおもう。自分などまだまだ螢蘭のあしもともにおよばないという自覚があるほどだ。

螢蘭はゆいいつの弟子である紅葉を溺愛しているし、基本的に男は嫌いだ。だからか男とあうといつもこんな感じになる。蒼とあつたときもこんな感じでこの人はつんつんしていた。でも、それ以上のことはしないし、悪い人でもないのだ。

「なに騒いでる、ぶひっ」

豚の物の怪が騒いでいる紅葉たちに鉄格子を蹴っておどした。まあ、三人にとつてはなんともないのだが。

「うるせえ！この豚ッ」

昴摩はとうとうぶちぎれて本性をあらわしてしまう。そして、豚の物の怪がしたように鉄格子を蹴った。結果は豚とはちがい鉄格子がそのままぶつとんでいった。とうぜんのように豚の物の怪のうえにその鉄格子がかぶさる。

「てめえのせいでこんな不機嫌なおもしろいしなきゃなんんだぞ！ええ、わかってんのかッ。ああんッ」

完全に怒りを豚にぶつけている昴摩はさておき、紅葉はつかまっていた娘や酒につけられている娘を助けることに奔走する。うちあわせどおりに外で待機しているだろう村の青年にひきわたしていく。そして、それらがおわると紅葉は使用されていない白瞑酒のはいつた瓶の味見をする。その味は噂に負けず劣らずの美味だった。うつとりとして瓶のなかの液体をみつめていると螢蘭もその瓶の味をみにきた。

「ああ、やっぱり白瞑酒ね。しみわたるわ」

（師匠、飲んだことあるんだ）

「紅葉、準備はいい」

そういつて長方形の紙に『袋』とかかれた札をだした。そして、

その札を瓶のうえにのせる。瓶はあっさりと紙のなかにきえていった。この術は便利だからと一番はじめに教えてもらったものだ。

螢蘭に負けないように紅菜も瓶を回収していく。ふたりは名酒とも美酒とも賛美される魔界の酒を回収することにやっきになる。紅菜の頭のなかでは屋敷に帰って桜のしたこの名酒に月を浮かべて飲むことまで浮かんでいる。もう、すっかりすっかりと豚のことを忘れてしまっている。

二人の頭からすっかりと豚の存在がきえさってしまっていたとき、その忘れさられていた豚が螢蘭の足をつかんだ。みじかくごつごつとした醜い指が螢蘭の白く美しい足にふれる。

「た、たすけて・・・」

螢蘭はそのあまりな光景にぶちぎれた。醜いものと男が大大大嫌いな螢蘭の体に豚のそれも、醜いオス豚の指がふれているのだ。許されるはずもない。

「愚者ごときがなんの許しをえて私にふれる」

「へ？」

豚の物の怪は迫りくる昴摩にたいしての恐怖を一瞬忘れたように螢蘭をみる。螢蘭は昴摩なんてくらべものにならないぐらいの怒りの炎がうずまいている。

「その罪、命だけでは償えないとしての狼藉か」

ドカ！

バキ！

グシャ！

「この雄豚ッ！醜いくせに生きやがって！」

ドスッ！ドスッ！

ガガガッ！

「おまえたちなど食われる以外になんの価値がある！」

グシャッ！

ドンッ！

「だいたい、醜いくせに紅菜にも触れやがってッ！死ね！這いつく

ばって無様に死ね！はははは」

ベシヨッ！

ゴンッ！

昴摩は魔王よりも怖い螢蘭の姿にさつと頭の血がひいていく。そして、このままではいけないと本能がつけて、紅葉に助けを求めるようにいった。

「く、紅葉、おまえの師匠をとめっ」

しかし、紅葉はまったくはなしをきいていなかった。完全にこの美酒のことにとらわれてまったくこの惨事を認識していない。すぐ横では惨事はくりかえされ、ともて音声しかつたえることができない。豚の物の怪はもう死んでいるのとかわらない状態だったがそれでも螢蘭の攻撃は休まることがない。

ミシミシッ！

ドッカン！

かえり血をあびて殺戮のかぎりをつくしている螢蘭をみつめ、もし紅葉にとめられていなかったら自分が豚のたち位置だったことに驚愕を覚える。紅葉がとめてくれなかったらあの豚の苦痛や恐怖が自分の身にふりかかっていたのだ。

「師匠、もう終わった。帰ろう？」

やっと口をひらいた紅葉の言葉にくるつと人が一八〇度かわる。

にこにこ人のやさそうな笑いをうかべていう螢蘭はその身にあびたはずのかえり血すらきれいさっぱりきえている。神業としかいえないような変り身だった。

「ああん、紅葉もうすべて回収しちゃったの？あとで私にもわけてね」

急に人のかわった螢蘭に昴摩はあぜんとするしかなかった。一瞬前、ほんの一瞬前まで残虐、惨殺のかぎりをつくしていた者とはおなじとはおもえない。

「紅葉、あの人……」

そのことを紅葉にいおうとしたら螢蘭のあの殺意にみちた瞳がガ

ンツと昴摩をみすえた。昴摩はこれ以上いったら殺されると感じ口をつぐんだ。

「なんだ？なんかいったか？」

「なんにもない」

たずねてきた紅葉に昴摩はひくひくとひきつりながらこたえた。

紅葉は「そうか」というと螢蘭に肩を抱かれていつてしまう。紅葉は完全に豚の物の怪の存在も忘れていたようだった。

（き、きづいてねえ）

どうやら紅葉は自分の師匠の本性をきづいていないようだった。しかし、ばらすことはできない。ばらそうとすれば、ばらされるまえに確実に殺られる。豚の死骸をみてぶるぶると震えた。

「紅葉、これから私の家にいらっしやいな。積もるはなしもあるし。なによりこんなに愛らしい紅葉をこのまま帰せないわ」

そういつて螢蘭は蹴鞠のような胸に紅葉の顔をおしつけている。

紅葉はなんとかその胸から脱出すると螢蘭にいった。

「そうだな。邪魔します」

「やゝん、そうこなくっちゃ。さあ、いきましょう。いきましょう」
るるるで螢蘭は紅葉の手をひく。出口までくると螢蘭は雲と龍の印に二本の指にふれ唇にあてる。ちゅっとした音が指と唇のあいだで鳴ったと同時に印から龍がでた。比翼の翼をもった龍は主人に甘えるように鼻先をこすりつけている。

「さあ、紅葉のりなさい。久しぶりでしよう花凜にのるのは」

紅葉は態勢をひくくしている花凜にとびのると龍は嬉しそうに鳴いてこたえる。つづて螢蘭も龍にとびのった。そして、紅葉にばれないように昴摩に冷たい視線をむける。

「あんたは走ってきなさい」

ぽかんとしている昴摩に螢蘭はそういうと龍にとぶように首をたいた。そんな師匠に紅葉はあわてていった。妖獣でも花凜に追いつくことはできない。花凜がそのきになれば国の端から端まで一日かからない。修行の終盤になったときには花凜の背にのせられて国

中をみて歩いたくらいだ。

「師匠、そんなこといわないください。はら、はやく昴摩も」

そういつて手をのばしてきた紅葉のまえにとびのると螢蘭とむかいあうようにすわってしまった。目がばっちりとあう。蛙と蛇のよくな構図になってしまった。そんな二人にはきづかず紅葉は自分が落ちないように昴摩に抱きつく。それをみた螢蘭は獲物を捕らえる目から天敵を抹殺するような目つきになる。

紅葉をはさんで睨まれている昴摩はいつものように紅葉の体に手をまわすことができない。まわしてしまったら間違ひなく命がないしかし、紅葉は自分の無事のために昴摩にいう。

「おい、しっかり掴まえろ。おちたらどうする」

天高いところからおとされたら紅葉をかばってくれるのは昴摩しかない。師匠はこういうときには意外とかばってくれないなのだ。こんなふざけた師匠だがやはり師匠である。自分でできることに關しては手をかしてもらえない。よっぱどのことではないかぎり師匠が手をさしのべることはなかった。

「あ、ああ」

戸惑いながら紅葉に手をまわした。殺氣がよりつよくなっている。それでも、螢蘭は紅葉が認めていることでしかたなしに黙認するしかなかった。螢蘭は龍の首をかるくたたく。龍は心得たように翼をひろげて空高くとびあがる。

（何者なんだ）

昴摩は螢蘭に睨まれながらかんがえる。ふつつ自分の体に神獸を飼ったりはできない。もちろんもつと低級な神獸や魔獸なら理解できるが、龍はけっして低級なものではない。その龍を体で飼えるなど常識では考えられなかった。それに、昴摩から自由をうばったあの技。あれはなんだったのか。何者かわからず、ただわかつているのは人であるということだけだ。螢蘭が只者ではないことだけを感じとっていた。

龍は主の足となり天高くそびえるお山へとむかう。体の一部を雲

でおおわれたそのお山は不死の命をあたえるといわれる霊山。駿河
国の霊山は国が誇る最高峰の霊的な場所であつた。その場所を住処
にしている螢蘭はやはり只者ではない。

2 罽

龍のおりたつた場所は国一巨大な靈山だった。霧がたちこめるなか木々たちが生い茂っている姿は異様なものを感じさせる。いや、視覚的なものが原因ではなく、感覚的にもやはりここはちがった。

屋敷といていたが屋敷らしいものはなくただ森がひろがるばかりだ。ほんとうにここに螢蘭けいらんの屋敷があるのだろうか不安である。

それに靈山はよくもわるくもある。治められているのならよくないこれ以上のいい土地はないが、ひとたび穢れると悪しきものはびこってしまう。そうなるとちよつとやそつとじゃ清められない。ここは大丈夫そうだが、それでも不安がよぎる。妖かしだからかの地の移ろいやすさがよくわかる。

昴摩はいつもどんなときでも身につけている“耀鬼神”の柄に手をあてる。昴摩がなにより優先しなければいけないこと。それは紅葉をあらゆる危険から守ることだ。それは、契約や術に縛られたものではなく自発的なものであった。

螢蘭が指をパチンとならずと龍は印とおなじように体をまるめてから胸にある印のへともどつていった。龍には二種類ある。蛇から転じたものと鯉から転じたもの。螢蘭の龍は空を飛べるから鯉から転じたものだ。

「花凜かりんみたいなかわいい龍でもつかまえにいこうかな。こつそり」花凜をみて本気で考えている。しかし昔、螢蘭のように龍を捕まえにいこうとしたら円融や柏に猛反対をうけた。たしかそのとき蒼もいたようなきがしたがどうだったかな。

（そういえば、蒼はいつも師匠の名をきくとどっかいつてしまうな）

螢蘭は昴摩の背をかるくおすと昴摩にいった。

「そこにたつて。まえだけみている」

「え？ ああ」

昴摩はいわれたとおりそこに大人しくたつ。螢蘭は不敵にほほ笑むとすうと息をすいあげる。

「かえったぞ」

そう叫んだ螢蘭におどろいて昴摩はすこしビクつく。それからしばらくして紅葉が昴摩に飛びついた。紅葉は昴摩を寸前のところでたすけたのだ。

「な、な、なん」

昴摩は自分のいたところをみて声にならない声をだす。紅葉はたちあがると昴摩にあきれたような目をむけていった。

「なにをばーとしていたんだ。危うく死ぬところだったぞ」

空から大きな大きな朱色の門が降ってきたのだ。門が地面に落ちたときの砂埃と地響きがもうもうとたちこめ、あたりに響きわたっている。そして、その朱塗りの門がある場所は昴摩がたたされていたところ。

「いやーん、紅葉、大丈夫だった？」

螢蘭は紅葉に抱きつく。螢蘭と昴摩のやりとりをまったく知らずにいる紅葉は螢蘭に注意するようにいう。

「師匠、ちゃんとまわりをたしかめてからにしてください。危うく死ぬところでした」

「ごめん、ごめん。いつも一人だからうつかりしてたの。許して」

「もう、しかたないですね。今度はちゃんと確かめてくださいよ」

「うん、わかった」

昴摩はそんな二人をみながら言葉がでない。そして、なんども門と門がふつてきた空をみる。そうしていると螢蘭と目があつた。螢蘭は昴摩に冷たい視線をおくるとちつと舌打ちしたのだ。しかも、紅葉にはきづかれないように。

その残忍な視線に昴摩はぞつとする。どうしようもない圧倒的なものに命を狙われてしまった獲物が感じる悪寒。

（お、オレ殺される。なにかしたか、あのお方に・・・）

“お方”といっている時点で昴摩は弱者だと認めてしまっている。

そんな昴摩をおいて門はひらいた。いつまでもすわりこんだままであつたことのできない昴摩に紅葉が声をかける。

「昴摩、いつまでそうしている。はやくいくぞ」

「お、おう」

紅葉の言葉に何とか返事をかえすとなんとかたちあがる。足がまだ震えていてがくがくとして歩きにくい。それでも、なんとか紅葉のところまでいった。

考えるだけでも恐ろしい。紅葉が助けられなかったら今頃、自分のはあの門の下敷きになって紙よりもすくなっていたかもしれない。その恐怖に手がふるえている。それにきづいた紅葉が昴摩の手をにぎった。

「怖かったのか？」

そういつて紅葉はほほ笑む。その顔に手からつたわる紅葉の熱に昴摩の震えがおさまり、心にも安堵がやどりはじめる。もつと安心したくて昴摩は紅葉に手をのばそうとしたとき凍りつく。

(ひっ)

螢蘭がものすごい形相で昴摩たちを睨みつけているのだった。昴摩はのばそうとした手をゆっくりとひっこめる。それをみて螢蘭の表情が紅葉にむけるものへもどつていく。螢蘭は紅葉の手をひっぱるという。

「ずるい。私とも手つないで」

螢蘭はそういつて紅葉を昴摩からはなしていつてしまう。紅葉は螢蘭にひっぱられるように門をくぐった。

昴摩はある確信をいだく。まちがない。あのお方の行動の中心は紅葉だ。紅葉にちよつかいをだすやつ(とくに男)を標的にしているのだ。つまり、紅葉のそばにいる昴摩は螢蘭にとって憎悪の対象でしかない。

ひらいた門のなかは白くかすんでいるだけでその先がないようにもおもえた。そんななかに螢蘭と紅葉はいつていく。二人が門のなかにはいつていつたのを確認するように門がゆっくりとしまりは

じめる。昴摩はあわてて門のなかに飛びこんでいった。

門のなかは派手だった。

金銀、朱塗りの建物。屋敷へと白くまっすぐのびる道には二〇〇人も女官が道をはさむように頭をさげてたっている。そして、女たちは頭を上げたままいつせいに主人を迎える言葉をいう。

「旦那様、お帰りなさいませ」

螢蘭はそのなかをすすんでいく。紅葉もなにごともないかのようになすすんでいった。派手なもの大好きな螢蘭は何をするにもど派手でここでも過ごしたことがある紅葉はもう慣れている。一方、昴摩はその光景にあっけにとられる。紅葉の屋敷も贅沢で大きいものだがここまでではない。ここにくらべれば紅葉の屋敷がただの民間のようにおもえる。

「紅葉様、おかえりなさいませ」

そういつて一人の女官がでてきた。螢蘭はその女官に命令する。さっきまでのふざけた雰囲気はどこかへいつて『旦那様』と呼ばれるにふさわしい雰囲気をかもしだしている。

「紅葉に召し物を」

螢蘭は紅葉にむきなおると紅葉の顎をくいつとあげていう。

「このままじゃ、紅葉の可憐さが半減してしまうじゃない」

なれている紅葉はい、はい、という感じで螢蘭からはなれると女官にいった。この屋敷にすすんでいるのは螢蘭だけじゃない。

「姉様はどこにいる？」

紅葉が姉としたっている菜稚琉なちるもいるのだ。

「菜稚琉様は奥の間でお休みになられていますよ。さあ、まずはお召し物を」

そういつて女官は昴摩をみると昴摩にも召し物をかえるようにいう。

「そちらのお方もこちらへどうぞ。お召し物をご用意いたします」
女官にうながされて二人は召し物をかえにいく。それについていこうとした螢蘭に紅葉はいった。

「昴摩の着替えでも手伝うのですか？」

「まさか、紅葉の着替えを手伝うにきまつてるじゃない」

「師匠はいいんです。はやく、師匠ももともどったほうがいいんじゃないですか？ 姉様がおきたらどうするんです？」

螢蘭は菜稚琉の名前にあつさり退散する。昴摩は用意された直衣に着がえながらきいた。几帳ごしに紅葉の衣がすれる音がする。

「あのお方は何者なんだ」

昴摩の言葉をききながら紅葉は裳の小腰をむすんだ。髪をとこうとした女官に紅葉はかるく手で拒否する。そして、そのまま。

「師匠は桜雅の守り神のような人だ。といつても人ではないらしいけど、私もあまり詳しくは知らない。一族が滅んだあと私はここに運ばれて術もなにもかもここで教わった。師匠は兄上のような人かな」

（兄上？ 姉上じゃなくて？）

そんな疑問を感じながらいると紅葉がはいってきた。紅葉は昴摩に櫛をわたすとすわる。わたされた昴摩も紅葉の髪にふれながらすわった。紅葉の髪に櫛をとおしていく。とぐ必要がないようにおもえるほどなめらかに櫛が滑っていく。

「人間みたいだぞ。天人にはみえないし」

男に髪をとがせる行為はその男のものになった証。紅葉にはそのつもりがないのかもしれないが昴摩はどうしても意識してしまう。はじめ紅葉の髪にふれたときのようにもう胸がうるさく鳴ることはないが、それでも、いまだに特別な感情がわいてくる。独占欲が満たされる独特の高揚感。

「私もよくわからん……でも、師匠とは仲良くしてくれ。私の大切な家族なんだ」

紅葉の言葉に昴摩は「ああ」とこたえた。紅葉の大事な家族なら好かれないし仲良くしていきたい。嫌われているけどなんとかいい関係になるように努力してみよう。それに、自分には家族と呼べるものはなかった。紅葉の家族に自分もいれてほしい。

蒼は紅葉のいない屋敷で円融を相手に酒に舌ずつみをうっていた。春の夜、この屋敷でのむ酒は絶品だ。紅葉のためにもってきたものには手をつけずに紅葉がのみのこしていった酒をのむ。

杯にうかぶ桜はまだまだかたくとした蕾のままだ。それでも他の草花が煌びやかせいかにきにならない。もともと蒼は花より団子派だから、桜がさいてなくて残念だというきもちにならない。

紅葉と出会うまで自分がこんな時間をすごすようになれるとはおもいもしなかった。春の夜酒は贅沢で優雅だけれど紅葉がいないとやはりものたりない。

「菜稚琉様に会いにいったのか？」

紅葉がわざわざでむいたとはおもえない。ああみえて紅葉は意外と出不精だから理由がないとこの屋敷からでていくことはない。屋敷からでるとすれば仕事か個人的な用事があるのかだ。しかし、菜稚琉に会うためならわざわざでむくこともある。

「いえ。今回は螢蘭様にたのまれたんですよ。仕事かえりに会いましてね」

円融の言葉に蒼はふくとたえる。そして、さきをうながすように視線をおくった。螢蘭は紅葉を溺愛していて、紅葉に悪影響をおよぼすものは容赦なく排除する人だ。

「あつたのはたまたまというよりも待ち伏せされていたというほうがたやすいですね。紅葉様をここからだすのに協力してほしいとたのまれましたね。あの人にたのまれると断わるのが大変ですから」

円融の言葉にははたと愛想笑いをかえした。性が男であるいじょう螢蘭に逆らうことは死を意味する。螢蘭は死ぬほど男が嫌いだ。そのかわりのように無類の女好きでとくに美女は好物なのだ。そして、菜稚琉と紅葉をこよなく愛している。菜稚琉も紅葉に負けず劣らずの美人で螢蘭が唯一頭があがらない人なのだ。

「だから螢蘭様のいうとおり紅葉様に無理やり仕事をおしつけて外にだしたんです。もちろんそれだけでは昴摩殿にまかせて自分はの

んびりしているでしょうから、白瞑酒を餌にして仕事場にひきずりだすことになっていくんですけど、うまくいっているかどうか」

円融はあいかわらずよめない顔で笑っている。白瞑酒のことは蒼も紅葉からきいたことがあり、紅葉が死ぬまでにのみたいといっていた。妖かしののむ名酒らしいが、いくら紅葉のためとはいえ、ただの人間の蒼が魔の巣窟へいくことは自殺行為である。

「紅葉がそんなものなんで大丈夫なのか？腹壊したりしないのか？」はじめてきいたときにもおもった疑問を円融にぶつける。あのときはあまりにも紅葉がうつとりと夢現のようにはなすから突っこめなかったのだ。

「大丈夫でしょう。なにより体にわるいものをあの人たちがのませるとはおもいませんし」

「まあ、それもそうだな」

円融の言葉に蒼はそうこたえると蕾のうかぶ杯に欠けた月もうかべた。今日の宴にはかけた月がよくにあう。主賓のいない宴には欠けた月をうかべてのむのがちょうどいい。

あの方がなにをかんがえているのかとうていわからないが、紅葉のためにならないことはけっしてしない。これだけはたしかなことだった。彼らは紅葉のためにいると円融からきいたことがある。あまり詳しいことははなしでもらえなかったが、はじめてあの二人がこの屋敷にきたときにそういつていた。

（しかし、紅葉の飼い魔。いまごろ死んでるかもな）

自分のかんがえにあのときの恐怖をおもいだして蒼は身震いした。けっして他人の心配ばかりしてはいられない。とくにあの人のまえでは自分のように紅葉に懸想を抱くものは細心の注意をはらって紅葉にせっししなければならぬ。もし、一瞬でも間違えると……そんなことをかんがえているときだった。突然、胸にしまっていた紅葉の札がその力をうしなった。『袋』と書かれたその札からは物を収めきれなくなり、すべてはきだしてしまう。ほかの札をみればただの紙切れになっている。

「どうゆうことだ？」

蒼は円融にきいた。こんなこと今までなかった。紅葉のわたしてくれる札や術のかかったものは“開”“封”の言葉で力を発揮したり治めたりできる。

「紅葉様の力がなくなっただんでしょね。私たちも紅葉様の力がいきとどかなくなっていますから」

「とゆうことは紅葉の身になにかおこったのか？でも、菜稚琉様のところにいるんだろう？」

「まあ、お二人のかんがえには我々は理解できないこともありますし。紅葉様に害をおよぼしているのなら昴摩殿もいますしね」

昴摩は紅葉を守ることを重視する。そのことについては円融も柏も絶対の信頼をおいている。きつと自分の命をなげうってでも紅葉の命を身の安全を優先するに違いない。

（しかし、今回は・・・）

蒼は不意に螢蘭の姿をおもいうかべた。蒼がみた最後の螢蘭の姿は螢蘭の本来の姿だ。あの姿をみた男はすべてもうこの世にいないはずである。自分がこうして生きていられるのは菜稚琉が助けにはいつてくれたおかげである。蒼にとっては命の恩人である。しかし、菜稚琉に会いに行くことはできない。菜稚琉に会うにはもれなく、

（これ以上はやめよう・・・）

「柏、もつと強い酒もってきてくれるか」

となりですわっていた柏がはい、はい、というようにしかたなしに腰をあげた。みんなよくのむので柏はわかっていてもあきれるしかなかった。紅葉たちのなかで酒をのめないのは柏しかない。だからどうしても柏が世話役にまわらなくてはいけない。

蒼は酔わなくてはいけないようなきがして大量に酒をのんだ。円融とともに春の陽気にのせられてのめるだけの酒をのんでいく。

春は陽気におだやかにゆったりゆったりとすぎていく。人や動物、鳥や虫も春の陽気には勝てず、浮かれ騒いで日々をすごす。そんな春の宵を酔いながらすごすのは至極の幸せにもかかわらず、紅葉の

不在が物足りない。贅沢病だと自分を笑いながら酔いつぶれていく。

舞台のような一枚岩。その眼前には白い煙をはきながら流れる滝。垂直に落ちたところには池がひろがり、川となって森のなかに流れていく。池のまわりには幾本もの木々がたち青々と茂る木々のなか一本だけおおぶりの桜が狂い咲いていた。まだ桜の咲く時期じゃない。

桜は池の水面に散りおちてはながされて、ふたたび花を咲かせる。桜だけじゃない。ここには紅葉も何本かまじっていて秋には紅い紅い葉を水面におとして流れていく。春は薄桃に、夏は生き生きとした緑に、秋には紅く、冬には白く染まる水面は飽きがこないようになっている。

「師匠、こんなところにつれてきて稽古でもするつもりですか？」
着替えをすませた螢蘭はいつものように風変りな服を着ていた。

ながい布を首からかけその両端を腹で交差させ腰にまきつけたような衣で、腕は手の甲から二の腕の半分だけを覆っているような袖で足も膝までの布をまき腰にあまり長くない腰巻をまいている。腹部を覆うように板のような六角のあつい布がまきついていて、そこには龍がいた。

紅葉は螢蘭にさそわれてここまできた。もちろん昴摩もいつしよだ。昴摩は自分の身の安全のため紅葉からなるべくはなれるように歩いている。螢蘭の視線が怖いからだ。

「いい思い出のつまった場所にきて、そんな顔しちゃだめ」

紅葉のおでこをぴんと弾いていた。派手な螢蘭の領土のなかでここだけがなにも飾りたてられてなく質素だ。ここは紅葉にとって稽古をする場所。戦い方を力の使い方をおしえられた場所。

「いい思い出・・・滝に流されたり火のうえを歩かされたりましてやあの桜に挟りこまれそうになったりしたのが、いい思い出ですか」

紅葉の言葉に昴摩は意外におもった。紅葉がそんなふうに修行していたなんてまったく想像できない。もっと自然に子馬がうまれて

すぐにたてるようにごく自然に術を使えるようにおもっていた。ほかの者たちとおなじように鍛錬の成果だとはおもってもいなかったことがおかしい。

「いい思い出じゃない」

笑いながらいう螢蘭にあきれたような目をむける。そして、紅葉は背をむけてあのときの桜をみていた。ひととき大きなその桜は一本だけあり春になると美しい花びらを咲かせつづける。池の水面に散らす花びらの量は一本の桜としては尋常ではなく、散っては咲き、咲いては散るをくりかえす。

「はあ」

紅葉は滝をみながらため息がでる。里がなくなり紅葉があずけられた六年間の半分をここですごした。豪華絢爛なあの本宅にはじめて足をふみ入れたのは四年目のことだった。紅葉はあの滝の裏側の洞穴で三年をすごした。洞穴といっても板がひかれ普通の民家のようになつていたが、屋敷にはじめていったときにはほんとうに驚いた。ここで暮らしていたときはあんなものがあるなんてきづきもしなかったからである。

螢蘭は岩の先端にたっている紅葉にちかづく。なんの警戒もみせずになだ、池をみている紅葉をかわいとおもいながらその背に手をのばした。

ドン。

「紅葉！」

荒々しく自分の名を呼ぶ昴摩の声に驚きふりかえろうとしたときには紅葉の体はもう宙をういていた。そして、そのままおちていく（やはり油断してはだめだな。師匠はなにをするのかわからない）紅葉がきづいたときにはもう遅くて池のなかにすいこまれるようにおちていった。いくつもの白い気泡が紅葉をおきざりにしてうえへとあがつていく。冷たい池の水に浸かりながら紅葉はこの池にも突き落されたことがあったことを思いだす。

紅葉をおいかけるように飛びこもつとした昴摩の足をなにかがま

きついてそれを阻止した。たかく飛びあがっていた昴摩はそのまま地面に激突する。

「図々しく追っかけようとしてんじゃねえよ」

紅葉のときとはちがう殺気のこもった言葉に昴摩は反射的に起きあがり態勢をととのえ耀鬼神に手をかける。螢蘭の手にはいつのまにか鞭がにぎられていた。パッシっという無情な音をさせる。

「おまえのような下賤な者が紅葉のそばにいれるはずないだろう」

螢蘭の姿に昴摩は驚きをかくせない。豊満な女の体であったはずの螢蘭の体は鍛えられた男の体になっていた。合理性を求めて鍛えられたその体が衣からのぞく。胸がなくなったことで衣がゆったりと着崩れている。それに腹部にいた龍の刺繍がなくなっていた。

「なんで」

昴摩が変貌した姿に戸惑いながらつぶやく。螢蘭は血走った目で昴摩をみつめて容赦のない表情をうかべていった。

「本気でおまえを殺すためにきまってんだろう」

その殺気に昴摩はおもわずあどずさる。あまりにも実力がちがすぎる。紅葉がいなくなつてその力と凶暴性があらわになったかのようにだ。いや、本来の姿にもどつたせいなのかもしれない。昴摩にはその判断がつかないが、ただ逃げなくてはいけないことだけはわかる。

背後には池と谷。昴摩の退路はそこしかない。目のまえには一切の退路はなく、幾千、幾万もの刃がむけられている感じがする。戦うことは懸命ではない。

（戦えない・・・退路は・・・）

一瞬、視線が後方をみる。螢蘭はそれをみのがさない。昴摩が逃げようと動こうとした瞬間、なにがおこったのかわからなかった。きがついたときにはもう遅かった。手足を岩の戒めでしばられて動けない。たおれることすら許されない状態になってしまった。

（しまった）

戦いのなかで自分の行動を予測させるなんて初歩中の初歩の失敗

だ。行動するまえに視線なんぞおくってしまった自分がうらめしい。しかも、動きをふうじられて自分の運命が相手にゆだねられてしまったもどげんだった。きつと拷問よりも地獄よりもひどくあつかわれて殺される。

「一目みたときからきにいらなかったんだ。紅葉におまえの匂いが染みついている。私の大切なあの子をおまえのような下世話なものが触れることすら許されはしないというのにだ」

ふりあげられた鞭がしなる。鞭がいきているかのように昴摩に容赦なく襲いかかる。わざと加減したその力が苦痛をながびかせることをものがたっていた。

（なんとか、いきて紅葉に・・・ッ）

振りあげられる鞭に悲鳴をあげるような無様なまねだけはしない。それは長年、戦いのなかに身をおいてきた自分の誇りだった。それに、紅葉のそばにいる自分が無様な姿をさらすわけにはいかない。紅葉の沾券にかかわる。唇を噛みしめて声がもれないように必死だった。

「余裕があるじゃん。悲鳴のひとつもあげないなんて・・・生意気なんだよ」

噛みしめた唇から血がながれでる。鞭がたかくあげる。

「うわあああああ」

容赦ない拷問に昴摩は叫び声をあげさせられる。血で視界が赤く染まり力のなくなった足はたおれることも許されず、岩の戒めに体重がかかり圧迫感と痛みがあつた。しかし、それをうわまわる螢蘭のあたえる苦痛にきがとびそうになる。

「そう、もっと苦しめよ。そうじゃないと罪の重さもわからないだろう」

昴摩の喉は悲鳴でもう声がかすんでいた。それでも、生理的に反応するかのように声がでる。昴摩は気絶した。なんどもなんども攻められ罵声をあびせられても、最後まで紅葉のもとへもどることだけをかんがえて意識をなくさないようにふんばったのだが。

「一刻ももたないくせに紅葉を守ろうなんておこがましいんだよ」

昴摩はうすれゆく意識のなかで螢蘭の最後の言葉をきいた。完全に意識をなくした昴摩の体の戒めをとく。その額に印をやどらす。それは咎人の証を刻みつけるように。耀鬼神は姿をかえる。

昴摩の体を回収するために鬼の物の怪がきた。鬼には馬に昴魔をのせるとそのまま本来あるべき場所にかえっていった。

ほんとうに殺してやりたかった。しかし、これがやつとの取引だった。昴摩にかけられている紅葉の呪縛をとり妖かしとしてかえす。そのかわりに未来永劫、紅葉にはちがづかないこと。

「もしものがあれば、やつら一族を滅ぼしてやる」

螢蘭は昴摩がながした血をみながらつぶやいた。昴摩のながした血は結晶になる。紅葉の呪縛が形になったものだ。螢蘭はそれを拾いあげるとそつと口づける。昴摩にほどこされた印とおなじものが浮かび結晶の真ん中に刻みこまれる。

その頃、紅葉は池のなかにいた。池に体が沈んだ瞬間、体の力が奪われていった。浮上するための手足の力すら奪われて紅葉は池にしずんでいるしかなかった。池に術がかけてあることに落ちてしまいうまできづかなかった。きづいていればこんなふうにならずに水に触れるようなことはしなかったのに。

（はねかえせない）

紅葉はなんとかその術をはねかえそうと必死になったが、必死になればなるほど術は紅葉から力をうばっていく。そして、それと同時に進行のように紅葉の細い首に水があつまり結晶になった。意識を保つ力も奪われ、口から気泡をはきだして意識をうしなった。

「まったく人が寝ていたら・・・」

ふわりとした髪をした女性はそう呟くと筒笛を口にあてる。ピイと甲高いみじかい音に髪飾りから管狐があらわれた。管狐は主の意思にしたがい、池のなかにはいると紅葉の体を池のなかからひきずりあげた。

特別な水だから溺れるようなことはないが、それでも、池に力を

奪われて紅葉は消耗していた。そして、首には青い水面のような石が輝いている。その石は完全に紅葉の力を封じてしまっている。

「螢蘭にはあきれるわ」

そういつて、紅葉の頬にふれた。私たちのかわいい大切な紅葉にここまでしてまであの妖かしの坊やをひきはがしたかったということなのだろうけど。

「う、こうま」

無意識にでも紅葉が妖かしの坊やの名を呟いたことに優しくほほ笑んでそつと髪をなでた。紅葉の回復を助けるようにすこしだけ気をわけてあげる。すると青ざめた肌が血の気を取りもどし、紅葉の呼吸が穏やかなものになる。

ひんやりと寒い。背中硬くてごつごつとしている感触をつたえた。いきているのか確認するようにかすかに一指し指を動かす。そして、自分の意志どおりに動いたことにほつと安心する。息を吸えば吐くこともままならないような痛みが体の中心からひろがり、それでも、生きるために呼吸を吐いては吸い、吸っては吐いた。

その痛みに奇跡を感じながら、昴摩は生きていることを実感する。確実に殺されるとわかっていながら最後まで心は生にしがみついた。そして、その生がまだ自分の心臓に宿っていることはどんな奇跡よりもすごいことのようにおもえる。なにがどうなって生きているのかわからないが、いまこうして呼吸ができていることがすべてだ。

（耀鬼神・・・耀鬼神、ちかくにないのか）

なんとか愛刀の名をよぶ。そばにいてくれるのなら返事がかえってくるはずだが、返事はなかった。やはり、武器をちかくにおいておくような間抜けはいないということだ。武器はない。体は動かない。

（足音・・・）

自分にちかづいてくる足音にきづき昴摩は目をあける。左目は腫れあがってかすかにしかあけられない。いまなら生まれたての人の

子でもとどめをさせるだろう。もしかしたら自分は一生このままなぶりつづけられて地獄のような拷問をうけるのだろうか。それでも死ぬよりはましだとおもっている自分にふつと笑いがこぼれる。

生きていれば死にさえしなれば紅葉のもとへかえる機会がおとずれるはずだ。そんなおもいがどんな状況でもいい、自分の命をながびかせてくれと祈りすらささげている。妖かしは輪廻の輪からはずれている。死ねばもう会えない。

首を足音がするほうにむけたいがそれもできない。首が動かないかわりに激痛で声がもれた。

「くっ」

「派手にやられたな、夜叉よ」

頭上からふってきた太い男の声に昴摩は嫌気がさす。そうゆうことか、というすべてをみきったおもいと納得。これは仕組まれたことだったようだ。親父と昴摩をよくおもっていない螢蘭の策略にまんまとひっかかり、ひきはがされてしまった。

「おっ・・・っ」

（くそッ、声もでねえ）

昴摩はただ必死に呼吸をするしか許されない自分の体の状況に苛立つ。“夜叉”その名は自分が妖かしであったときの名だ。紅葉に出会い、紅葉に使役されると決めたそのときに捨てた名。もう、二度と呼ばれることのないはずだった名だ。

「夜叉、わが息子よ。そこでゆっくりと自分の立場とほんとうの姿をおもいだせ。おまえはこの鬼族の王になる男だとゆうことをしっかりと自覚しろ」

“夜叉”その名をあたえられるのは鬼族時期王の証。

頭上から偉そうな親父の声がふってくる。けったくそわるいその言葉にいいかえすこともできないことが悔しい。

親父の存在にもつときを配るべきだった。昴摩は妖かしの三大貴族の一派、鬼族の王子だ。といつても一六番目で本来なら王子といつてもあまり権限はもたない。しかし、妖かしは力がすべてだ。昴

摩は一〇八人いる兄弟のなかでも格別に強かった。いま目のまえにいる鬼族の王である親父ですらかなわれないほどの潜在能力を秘めている。そのため、昴摩は幼い頃から母からの期待を受け修行や戦いの日々にあけて一〇も過ぎないうちに戦いの最前線で戦いつづけた。母親恋しいそのときを血の戦場ですごした。

そんな昴摩が人間の女に使役され心ごと奪われてその女に一生をささげるなど許されるはずもなかった。たった五〇年たらずの人の使役なら一時の火遊びと許されるだろうが、昴摩は未来永劫の契約をむすんでしまっている。つまり、紅葉が生まれ変わるたび昴摩はそのそばに仕えなくてはいけないのだ。

（オレはその名を捨てたんだよ）

そう心のなかでいいかえすしかなかった。そして、これから自分がどうすればいいのか考える。なんとか紅葉のもとへ帰らなければならぬ。二、三日で歩けるようになるはずだ。一瞬でもはやく体が治るように動かないほうが賢い。昴摩はそこまでかんがえて意識を手ばなした。すう、すうと寝息をたてる。

それでも大事な跡取り息子だ。命の危険がなくなったことに昴摩は怪我を治すことだけに集中することにきめた。なにもかも、体が治らないことにはどうしようもない。動くのはそれからでもいい。

紅葉の命に至急かわることではないなら、あたえられた時間を有効に使わなくてはならない。紅葉のもとへもどることで殺されるとしてもそれでも、昴摩は紅葉のもとにもどりたかった。

唐の珍しい陶器が懸盤のうえにおかれている。唐らしい文様がかかれたその陶器は茶をのむためのものだ。唐でも上流階級の者しか口にするのできないその茶とゆう飲みもの。この国ではまったく馴染みのないものだった。

「いつまでもそんな顔をしていないで。さあ、唐菓子といっしょにどうぞ」

そういつて菜稚琉は紅葉にお茶とともに唐菓子（唐の揚げ菓子）

をすすめる。紅葉はむすつとした顔のままお茶に口をつける。お茶はあまりにも貴重なものでここでき口にできず、はじめてこの茶というものを口にしてから紅葉はこの茶という飲みものが大好きだった。

「螢蘭、あなたもいつまでもそんなふざけた格好をしてないで、ともにもどりなさい」

菜稚琉にいわれて螢蘭は豊満な肉体を本来の男の体にもどす。女のなりを好んでしているが本来の性は螢蘭が大嫌いな男なのである。女のなりをしているとどうしても戦いのときには劣ってしまう。だから、こうして菜稚琉のまえに殺すと決めた相手のまえでしかこの姿にならない。

「女の私もなかなかいいだろう？もちろん、菜稚琉や紅葉には適わないけどな」

螢蘭は徹底していて男のときには男の話し方、女ときには女の話し方をする。だからか、どちらの螢蘭であっても違和感を覚えることはない。

「あまり力を無駄につかうのはどうかとおもうのよ。紅葉にもこんな術をしかけて、可哀想じゃない」

螢蘭が菜稚琉の手の甲に口づけているのをきにもせず、菜稚琉はちくりちくりと釘をさす。しかし、螢蘭も長年のことだ。こたえているわけでもなければ悪びれた様子もない。それどころか機嫌のわるい紅葉をもろともせず紅葉の手にも口づける。

「紅葉なら私の気持ちかわかってくれるだろう？」

紅葉は無言のまま螢蘭に口づけられた手の甲をふきとる。螢蘭はそんな紅葉の姿に衝撃をうけたように菜稚琉の胸にとびこんでいった。

「菜稚琉よ。私たちの可愛い紅葉があんなことをするようになってしまった。きつとあいつの悪い影響を受けてるせいだ」

「あなたが紅葉にあんなことするからでしょう。冷たくされて後悔しているのなら今からでも紅葉のお気に入りを取り戻さってはいか

が」

螢蘭は菜稚琉の膝のうえに寝ころがるとふんという顔をしている。「やだね。残念なことに後悔していないからな。だいたい菜稚琉だって紅葉をあんなどこの馬の骨かもわからない者にやれないだろう？あいつも紅葉とのこと認めて欲しかったら命かけてむかつてくるのが筋だろう」

（ほんとうに殺してしまうくせに・・・）

そんな螢蘭に菜稚琉は溜息しかでてこない。紅葉にはおくりかえしたとしか説明していないから紅葉自体はあまりこまかい彼の状態がわかっていない。しかし、菜稚琉はちがう。螢蘭が彼にどんなことをしたのかわかっている。昔、紅葉の屋敷にいったとき蒼という少年にしたことも菜稚琉はしっていた。

しかも、今回は丁寧に紅葉にも鬼の坊やにも術までかけてひき離している。紅葉は自分にかけられた術が靈力を抑えるものだとおもっているようだが、その他にも鬼の坊やとひきはがす力も秘めている。

「だからといって紅葉にあんな術をかけるのは反対です。力まで封じてもしものことがあればどうするつもり？紅葉は私の大切な子なのよ」

わざと“私の”を強調して菜稚琉は自分だけが大切にしているようにいった。螢蘭にたいしての強烈な皮肉である。しかし、そんな皮肉も螢蘭の面の皮の厚さに弾き飛ばされてしまう。

「大事な娘を他の男にとられる父の気持ちはどうして、菜稚琉にはわからないんだ。俺は俺は悲しいんだよー！！」

そういつてわざとらしく菜稚琉の膝にしがみついておん、おんと泣いてみせる。もちろん、この場にいる誰もが嘔泣きだとわかつている。紅葉はそんな螢蘭の姿をみてはじめて口をひらいた。昂摩とひき離されたとしてから紅葉はいつさい話しをしようとはしなかった。

「・・・師匠」

「紅葉・・・」

螢蘭はそういつて手をのばしてきた紅葉の手をにぎると娘がやつと父の心がわかり和解したときのように紅葉の名をよぶ。この場面だけならすこし感動するかもしれない。

「昴摩をどこにやっただんです」

その言葉に途端に螢蘭は紅葉にそっぽをむける。それでも、紅葉は螢蘭にとう。

「どこにいったんです」

「・・・」

「私のものを勝手にどこにやっただんです」

「・・・」

「師匠っ！」

「・・・」

紅葉がなにをいっても無言である。こうなつてくると言葉は不毛なものになつてしまふ。菜稚琉は螢蘭と紅葉をみてらちがあかないことを悟る。紅葉も本気なら螢蘭も本気なのだ。

「はあ、人が寝ているあいだに・・・」

菜稚琉はそう呟くと二人をみているしかなかった。菜稚琉自身も鬼の坊やとのことをよくおもつてはいない。しかし、紅葉が悲しむ姿は極力みたくなかつた。たのまれて紅葉をあずかつたあの日からずっとずっと大切に愛情をかけてきたのだ。

その紅葉の相手がまさか妖かしのそれも鬼の時期王だとはおもつてもいながつた。鬼は紅葉の一族を滅ぼした者たちだ。あのときの悲惨な姿をした紅葉をみた菜稚琉には紅葉が妖かしと相容れるとは想像もしていながつた。あの日の紅葉は悲惨なものだった。だから安心していたというのに。やはり、紅葉のなかに眠るもうひとつの部分があるを求めるのかもしれない。紅葉はなにも知らないし、それでいいというのが二人の考えだった。

（けれど・・・）

菜稚琉はそこまで考えると冷めてしまったお茶に口をつける。冷

たくてもそれなりにおいしいとおもう。螢蘭と紅葉はいまだに不毛ないあいをしていて、それを聞きながら菜稚琉は紅葉の身をあんじた。

紅葉はあれから機嫌のわるいまま。いつもなら螢蘭が菜稚琉のそばで眠るのにそれもしない。幼い頃から力の強かった紅葉は守ってくれる者のそばでないと眠ることができなかった。いまはそんな必要はないのだが、それでも安心できる者のそばで眠るのは癖になっている。つまり、安心して眠れないのである。

「紅葉、お茶でものんで落ち着きなさい」

ぼろぼろの紅葉にいつもどおりお茶をさしだす。術もつかえない、無力な赤子のような状態で紅葉は屋敷から脱走しようとする。しかも毎日、毎日だ。しかし、螢蘭に捕まりこっぴどくやられては菜稚琉のもとへもどってくる。

今日もそうだった。

紅葉は自分の首についた水の色をした石を忌々しくおもう。これさえなければ霊力を駆使して螢蘭をまき今すぐにでも昇摩のもとへとんでいくのに。だいたい、こんな物までつけられる意味がわからない。横暴だ、変態だと螢蘭をなじってはこっぴどくやられるのだった。

「こんなにぼろぼろになって、せっかく綺麗で可愛い顔が台無しよ」
菜稚琉はそういつて紅葉の髪についている葉をとる。優しい眼差しをふいとよけると紅葉はぶすつとしたままお茶に手をのばした。葉の甘い香りがたちこめる。すっきりとした渋みが口のなかをとおると追いかけるように香りが鼻からぬける。

菜稚琉は紅葉をみながら螢蘭に感心する。服には泥がついたり破れてしまったりと表面的にはぼろぼろだが、紅葉自身には傷ひとつついていない。まあ、さすがにところどころちいさな痣ができてしまっているが、こんなものすぐに治ってしまう。それだけきをつけて螢蘭は紅葉を相手しているということだった。

そんな紅葉の様子に菜稚琉は子をあやす母のように優しく髪をすきながら話しかける。紅葉が大好きなお茶をのみながら大人しくしていることが菜稚琉にはおかしい。菜稚琉の目につる紅葉は甘えん坊で意地っ張りで負けず嫌いでも、弱くて優しい。

「お茶はね。万病の薬なのよ。炎帝神農っていう医術の神が人におしえてくださったもののなの。眠たいときには眠気をとり、しなければいけないことを助けてくれる。怪我をすれば怪我で熱がでるのをおさえてくれる。熱がでて熱をさげてくれるし、心も落ちつかせてくれる」

紅葉に“ね、そうでしょう”というように笑いかけた。紅葉はしかたなく口をひらく。

「どうして閉じこめられなきゃいいい。霊術がつかえられなくても体術も剣術もできる・・・霊術がなくてもそのへんのやつに負けるわけない」

「でも、上には上がいるのよ。もしものことがあつたら心配だから私は紅葉が螢蘭の術を破れるまでそばにいてほしいわ」

「・・・姉様が教えてくれたから大丈夫だ」

いじけながらいう紅葉に菜稚琉は困った顔になる。負けず嫌いで無力な紅葉に体術を教えたのは菜稚琉本人だ。きちんと教えこんでいるだけあつて紅葉の右にでるものはそうそういない。けれど・・・

「でも、私に勝てますか？私だけではない、螢蘭にも勝てないあなたがどうやって妖術も体術もある妖かしに勝つんです？」

菜稚琉の鋭い指摘に紅葉はふたたび黙りこむ。そんな紅葉に助け舟をだすように条件をつけた。

「紅葉、あなたが私を膝まつかせることができれば脱出に手をかしてあげます」

その条件に紅葉は思案するような目で菜稚琉をみる。その顔に菜稚琉は“さあ、どうする？”と挑発的な目でみつめる。紅葉は負けず嫌いで単純なところがあるからきつとこの挑発からは逃げられない。「私が勝つたら師匠もとめてくれる？」

紅葉は菜稚琉のようすをうかがうようにいった。

「螢蘭に紅葉が捕まらないように邪魔してあげる」

「首のもっとってくれる？」

菜稚琉はにつこりと笑いながら紅葉の質問にこたえる。

「ええ、もちろん。そのかわり私に“参った”といわせるのが条件ですよ」

その言葉に紅葉は「やる」とみじかくいった。菜稚琉はそんな紅葉の頭をいい子、いい子、となでる。やっぱり可愛い紅葉の反応に菜稚琉は満足だった。

しかし、螢蘭との組み手のときの紅葉の身のこなしをみてみるとそうとう鍛錬をさぼっていたのがわかる。ここにいたときのほうが身のこなしがいろいろいい。まずは昔の勘をとりもどしてもらわないといけない。

螢蘭が都の事件をみにいったときにいつていたが、紅葉は自分の霊力だけにたよった戦い方をしていてそのほかが疎かになっている。鍛錬をしていなくても普段の戦いのなかで霊術、体術を駆使した戦い方をしていればここまで腕がなまることはなかったのに。

（これは、剣術から体術まで一から鍛えなおさないといけないかな）
紅葉をみながらこれからの算段をたてる。剣術はまだ戦いのなかでつかっているからいいかもしれない。けれど、直接的な攻防をさけ力にたよった戦い方をしていたらいっしょである。

霊力は精神力、体力ともによく消費する。それだけにたよった戦い方は不利なのである。よって、体術、剣術の技術も戦いのなかでは大きな役割をもつ。なるべくそれで倒せる相手なら力の消費をさげる意味でも大切なのである。

しかし、紅葉には力が尽きるという感覚があまりよくわからないのだろう。そのため紅葉は生まれもつての強い力を惜しみなくつかう戦い方をしていた。一瞬でおわるような戦いならそれでもいい。しかし、長期戦になればそうはいかない。力が尽きることもあるのだ。霊力だけではない。体力や精神力にも限りはある。紅葉が限界を感

じるとすれば霊力や精神力よりも体力のほうがだろう。だから、よけいに霊力にたよる戦いをするのかもしれないが。やはり、雑魚は剣術、体術だけでなるべく倒すべきである。

実際、昴の事件のときには体力がつきてしまい柚羅乃に助けてもらっている。もし、柚羅乃がでていかなければ螢蘭が始末をつけていた。しかし、そうなると柚羅乃のように穏便にはおわっていなかっただろう。昴摩を嫌うように螢蘭は昴のことも殺したいくらい大大大嫌いなのである。

（それと螢蘭のように力の無駄つかいをなおさないと）

紅葉は唐菓子が無邪気な顔でたべている。きつと、勝てたらでられることにきをよくしているのだろうが、そう簡単にいくだろうか。「姉様、お茶なくなつた」

紅葉のお茶を催促する言葉に菜穂琉は「はい、はい」といってお茶をいれる。お茶をうけとつた紅葉は幸せそうな和やかな顔をしてお茶をすすっている。紅葉には自信があつた。ここをでてから五年ずっと困難な戦場の最前線にいたのだ。あのころよりずっとずっと強くなっているにきまっている。まして、昴の事件は天もからんでいたというのになんとか乗りきつたのだ。経験値もあがつているし剣術ではここをでてから誰にも負けていない。円融にも柏にもひけをとらないのだから大丈夫だというへんな自信があつた。螢蘭のように力をつかわれればかなわないが、菜穂琉のように力をまったくつかわない人なら勝機があるにきまっている。

昴摩は五日間の眠りから目覚めた。目をあけると眠る前にみた天井がはつきりとみえる。腫れあがつていた左目はすっきりと治つていて視界も良好だ。息をおもいっきり吸つてはいても肺を中心にひるがっていた激痛はもうない。

（骨もくつついたかな）

そうおもいながら手ですこし強めに肋骨や肩、腕に腿や骨盤をお

さえつける。痛みはない。念のためさらに強くおさえる。大丈夫だった。昴摩はそれにきをよくする。

「よっと」

勢いよく飛び起きる。五日間も寝つづけていたせいで体がかた違和感を覚える。体の筋を意識しながら体をねじったり曲げたりして伸ばしたりほぐしたりをくりかえしていく。そうして、いい感じにほぐれたら、今度は体術の型をたしかめはじめる。突きや蹴りを交互にして不備がないかたしかめる。良好だ。

「さてと・・・」

自分が閉じこめられている牢の柵をみる。柵の前には鬼が二匹たっていた。見張りの鬼自体は昴摩の敵ではない。問題なのはこの牢の柵だ。昴摩がいた頃はこんな牢にこんな石がはめられていなかった。力があるのもを嫌う石

無蝕限

それだけじゃない。もうひとつきになることがある。紅葉との契約がなくなっている。昴摩の体は紅葉と会うまえにもどってしまった。つまり、このままでは紅葉のそばにはいられない。

いろいろと問題はあがあるがなんとか紅葉にあいにいかなければいけない。今の昴摩は高い高いそれも難攻不落の塔のうえにいる愛しい姫君を助けにいく王子の気分だ。

「夜叉」

無蝕限をどうするか悩んでいると自分を呼ぶ声がした。顔をあげると母がいた。

「母上・・・」

昴摩にとつて幼いときから絶対的な存在だった人。そして、それはいまでも。

母は鬼族の王、黒鬼妖王こくきようおうの九八番目の側室として嫁いだ。すでに一五人の王子がいて、夜叉候補が五人もいるなかに王家とのつながりのためだけに嫁いできたのだった。力の弱い家の者が子を産んでも王になる確率はほぼ皆無。何も求められず、なんの価値もない存在。

そんななか夜叉が生まれた。なんの祝いの言葉もなく王からあたえられた名は“捨棄”いてもいなくてもいいという意味だった。“鬼”の字すらあたえられない。そんなわが子を抱くことも声をかけることもましてや乳をやることもなかった。しかし、昴摩が二歳のとき、昴摩を虐めていた一〇番目の兄を瀕死状態にまでおいやつた事件があつた。一〇番目の兄は夜叉候補の一人だった。

それを機会に昴摩への目がかわる。母は昴摩に声をかけるようになった。大きな期待をかけて王としての教育に熱心になった。負けることは許さず、勝つことだけを教えこんだ。そして、昴摩はそれから三年、五歳という幼さで王から“夜叉”の称号をあたえられるという栄誉をえた。昴摩は歴代最少年の夜叉となった。

昴摩が夜叉となつてから母の生活も大きくかわつた。時期王の母として正室とおなじ扱いをうけた。今まで自分を蔑んでいた者たちは皆そろつて頭をさげる。自分の子をはじめて呼んだのは“夜叉”の称号をもらつてからのことだった。

「夜叉、あなたは私に失望させたいのですか。なんのために私があなたを産んだとおもっているの・・・母を失望させてはいけません。あなたならわかるでしょう」

自分のほんとうの名を呼んだこともない母親の言葉。それでも、昴摩はこの母のもとで母の人形として育つた。そういえば、四歳のときの初陣も母がおくりだしたものだつた。

「夜叉あなたはいずれ黒鬼の名を受け継ぐ者なのです。人の娘が欲しければ母がいくらでも用意してあげます。自覚をもちなさい。いいですね、夜叉」

それだけをいいのこして母はたちさつた。昴摩はなににもいえなかった。いまでもあの人の呪縛は有効のようだった。母にふりむいてもらいたい一心で戦場の最前列、血の海をかけていった。しかし、望んだものはあたえられなかった。それでも、夜叉の称号をえれば母にふりむいてもらえると信じた。

結果はおなじだった。表面的には母は自分をみてくれるようにな

ったが、それはできないいい人形にむける目だった。きっとこのさきもあの人の目が自分にむくことはない。紅葉のように自分を満たしてくれる眼差しはここにはないのだ。値踏みする目、妬み嫉妬の目、媚びる目、試される目、そんなものしかここにはない。

いつまでも成長しない自分にあきれて昴摩は目をつぶる。久しぶりの母子の対面に予想以上に疲れた。目をつぶれば紅葉に出会うまでの生活が走馬燈のようにおもいだされる。

人形のように意志がなく、いわれたとおりに動き、成果をみせては褒美の言葉をもらう。妬む者には命を脅かされて何度も毒を盛られた。そのたびに自覚がないと母に罵られてきづいたときには体が毒に馴染んでいた。毒が効きにくい体になっていた。

力を試されるように値踏みされるようにだされる戦場で生きて帰るなら勝利をつかまなければいけなかった。負けることは死ぬことよりも許されはしない。昴摩が勝てば勝つだけ母の身は華やかなものになりその顔に“優越”という笑顔がうかんだ。

つぶされそうな闇のなかに紅葉の温もりを感じる。他の誰でもない。紅葉だけが自分を昴摩単品としてみってくれた。値踏みするわけでも殺意をむけるわけでもなく、ただ、自分という存在をみていた。(紅葉、そばにいてくれ……)

地獄のようなこの場所で一縷の希望を望むように昴摩は何度も何度も紅葉をもとめた。小さい子供が救いをもとめるように昴摩は紅葉に救いをもとめたのだった。

はじめてだった。自分に暖かい名をあたえてくれたのは。“こつま”と発せられたその言葉の意味を問うと紅葉は「もつとも私に触れ合える名だ」と自分をまつすぐにみた。

いままで自分が誰かと触れ合うことを望んでもあたえられなかったもの叶わなかったものそのすべてをあたえられたようなその名の前に昴摩はすべての自分の名を捨てたのだ。もう、“捨棄”とも“夜叉”とも呼ばれることを好まないとその名を捨てた。

「だれでもいい、名をよんでくれ……」

昴摩は弱々しく呟いた。ここにいるかぎりその名を呼ばれることはない。誰よりも紅葉に触れ合える者、ちかい者へあたえられる名。昴摩がはじめてあたえられた温もりの名。

紅葉はあれから脱出をやめ、もつと堅実的な菜稚琉との体術、剣術勝負に精をだしている。しかし、自分の考えが甘かったことを剣を交えれば交えるほど、拳を交えれば交えるほどおもしろされる。「それではがら空気になるわ」

菜稚琉はおもいつきり突きをだした紅葉の腕のなかに瞬時にはいりこむ。突きだされた腕をそつと掴むと自分の方にまきあげるようにして放り投げた。

「くっ」

紅葉は空中で無理やり体勢を整えようとしたが、投げられた反動が大きすぎてうまくいかなかった。腕と肩をぶつけて地面に落ちてしまう。普通にそのまま抵抗しないほうが衝撃はすくなかった。「見誤ってはだめよ。そのまま流れにまかせたほうがいい場合もある」

菜稚琉が紅葉の胴体めがけて蹴りをとばす。紅葉は体がつさに逃げてしまう瞬間にまえにでて菜稚琉の側面にはいるとした。しかし、死角から菜稚琉の拳がとんでくる。見事に命中してしまう。

「くはっ」

胃に直接的な攻撃をうけてその場にしゃがみこむ。大人と子供だった。何をしても何を真似ても一撃もいれられない。はいったとしてもそれははいったようにみせかけているだけですぐに次の攻撃が紅葉をおそった。

「体術や剣術は勘や発想力よ。攻撃と守り、それを駆使しておこなう攻防は基本と応用でいくらかでもかわせたり攻撃に転じたりできる」これまでのおさらいをしながら菜稚琉は紅葉に説明もまぜて戦う。勝負のほずが、稽古になっっていることが紅葉はきにいらぬ。菜稚琉に教わったのは基本だけ、あとは柏と円融に教わった。自分の式

に教わるというのはへんにおもつだろうが。円融も柏も父と母の体の一部を核としている式で、その人間の能力を受け継いでいるから紅葉よりも勝るところがあつてもしかたないことだ。

「剣術、体術にとつてもつとも大事なのは力の流れをみること。これがみえないと無理をして体を痛めてしまつと同時にできることとできないことがわからない」

いやというほど幼いときに聞かされたその言葉に紅葉はむっとする。わかつていてもできていない自分がはがゆかつた。いままで完全にできているとおもつていたことがまったく菜稚琉にはつうじない。つまり、紅葉の技術はある一定の程度をすぎるとまったく通用しないことをまざまざと感じさせられているという現状だ。

「はい、やめ」

ずつとみていた螢蘭がそういつて二人のあいだにはいつていく。

紅葉は涙目になつて自分の目をぬぐいながらまだ、まだこれからとやる気をみせているところだった。

「師匠、邪魔しないでください」

「もう、無理だろ」

螢蘭にいわれてはじめて自分の体が悲鳴をあげていたことにきづく。きづけはたつことも不可能と体はくずれていった。そして、たとつともうたてない。

「紅葉、おまえずつと体の壺をやられてたことにきづかなかつたらう？ だいたい、五発に一回くらいは壺にいれられてたぞ」

そういつて螢蘭は紅葉の体を抱きあげる。紅葉の体はぶるぶると震えていて自分ではおもうように動かせない。動かない体では相手にならない。それにもう日が暮れてきていた。朝からいままで攻防のしどおしでもう体力的につらくもあつた。

「一生、菜稚琉に勝てないんじゃないか？」

螢蘭の意地悪な言葉に紅葉はむっとむくれる。しかし、それがあながち冗談ではないような状態だ。菜稚琉は体力的にもまったくなんの負荷も感じていないようにみえるからだ。いや、みえるだけじ

やないほんとうになにも負荷を感じていないのだ。

「姉様も師匠も化け物だ」

紅葉は負け惜しみをいうとそれをきいた二人は笑いあった。そんな二人の態度にも納得いかず、それでも、これ以上の抵抗もできずただ、むくれているしかなかった。

紅葉の体が自由に動くようになったのはそれから半刻もたつてからだった。菜稚琉との攻防で汚れてしまった戦闘着を脱ぐと風呂にはいった。頭から爪先まで埃だらけで汚れてしまっている。

菜稚琉の戦闘着は肩や腹部が露出していて隠しているのは胸だけだ。そこに衣を羽織、腰で縛ってある。足の形にそってつくられた衣をはいている。戦うときはその羽織っている衣をひき上げてはだけてしまう。すると螢蘭とおなじように手の甲から二の腕の半分を巻きつけたような袖がでてくる。

紅葉が戦いるときに好んできる直衣は身動きができやすいからだ。しかし、螢蘭や菜稚琉のきている戦闘着はもっともっと動きやすい。それと同時に露出も激しかった。妖かしもそうだが、螢蘭や菜稚琉の着ている物も風変わりなものだった。

「師匠、これって無蝕限」

風呂にはいり食事をおえほっこりとしている紅葉は自分の首にあるものを触りながら螢蘭にきいた。紅葉は実際にみたことがないが、話にだけはきいたことはある。無蝕限は力を食らう石だときいた。なら、自分の力はこの石に食われていると考えるのが自然だ。

「いや、それはただの水」

その言葉に紅葉は怪訝な顔をする。そんな紅葉につけたしたようにいう。

「でも、あの池の水だから特別といえば特別だがな」

「無蝕限は霊力だけを食べるわけではなく、霊力や妖力といっしょに体力も食ってしまうから、力のあるものは体力ごと食われてとても動きまわるのは無理よ」

親切に菜稚琉は無蝕限のことを説明する。そして、紅葉に黒砂糖

の塊をさしだした。それとともにお茶もだされる。

「じゃあ姉様たちも無蝕限をみたことはないのか？」

「いや、あるよ。私も菜稚琉も」

紅葉に螢蘭はそういうと黒い石をもってきた。木の実みたいなその石を紅葉にさしだす。紅葉は無条件にその石を手でうけとめる。石にふれた瞬間、ぞわっとした。そして、体の力が奪われる。どうして、これを螢蘭がもっていられたのか理解できない。

「これが、無蝕限。どうだ？首についてるのは全然ちがうだろう」石をとつさに離れた紅葉におかしそうに螢蘭がいった。菜稚琉はそんな螢蘭をかくくしかりながら無蝕限をひろう。やはり菜稚琉もなんともないようだつた。

「もう、こんなことして・・・紅葉はただでさえ疲れているのに」「どうして姉様も師匠もなんともないんだ？」

紅葉の疑問に菜稚琉はにつこり笑って説明をはじめめる。二人は自分たちのもっている技術をおしみなく紅葉に教えこんでいる。

「どんなものにも気の流れがあるわ。その流れに自分の気を絡めとられなければ無害なものになるの。逆に自分の方から相手の気を狂わせると・・・」

そういうと菜稚琉の掌にあつた無蝕限は塵になり、吹き飛んでしまった。菜稚琉の手を何度もみるけどどうなっているのかわからない。力をつかつたようにはおもえない。

「こういう風になるの」

わかつた？というように紅葉の目を覗きこむ。そんな紅葉に菜稚琉はさらに説明をはじめめる。紅葉は必死にその説明をきき理解しようとする。力がまつたく使えない今の状態を打開するとかかりになるかもしれない。

「体もそう。気の流れを狂わされたり支配されたりすると自分の意志どおりにならなくなる。紅葉は自然の気を感じたり、妖気を感じたりできるでしょう？それよりもっと細かい気の流れを感じるようになるればできるわ。あとは簡単、ちよつと狂わせれば・・・」

「菜稚琉が紅菜の背中にふれると紅菜の腕が動かなくなる。」

「ほらね」

（これはつかえる）

そういつてほほ笑んでくる菜稚琉に紅菜はおもった。剣術や体術だけではいまのままではとても勝てそうにない。この気を狂わす方法を覚えれば菜稚琉にかなうようになるかもしれない。

今からおもえば螢蘭はこの方法で昴摩の体の自由をうばったのだ。いままできづかなかったのは何をするにも力に頼りきっていたから。靈力にたよるとどうしても体力に限界があつた。でも、この方法なら消費しているものはほとんどない。しいていえば集中するための精神力。

しかし、螢蘭や菜稚琉は呼吸をすうかのようにごく自然にやつてのけた。ということは骨さえつかめば紅菜だって精神力もつかわずにできるということだ。

活路をみいだせたことに紅菜はきをよくして黒砂糖の塊を口にほりこむ。口にひろがる甘さが今日の疲れをとりはらってくれるようだった。

（まってる！昴摩。すぐに助けだしてやる）

姫を助けにいく王子のような気分で不敵に笑う紅菜を菜稚琉と螢蘭は可愛いとおもいながら目をほそめてみていた。なんて可愛いんだろうと二人はおもう。二人にとってはどんなに大きくなつてもいつまでも幼いときの紅菜のようにおもえる。それと同時に明日の紅菜の戦い方に期待しよう。

3 奔走

紅葉は息をきらして木の陰に隠れている。左手を胸におき、右手には太刀がにぎられている。神経をたかぶらせて狩人の行動を把握しようとする。

追いつめられて紅葉はあわてて逃げてきたのだ。逃げることも戦術のひとつだが、なんとも無様。

あれから十日。紅葉は毎日、毎日、寝るまえに二刻ほど意識を集中させ些細な極々微量の気の流れを意識する鍛錬をこそそとつんできたのだ。そして、昨日の夜。螢蘭たちの目を盗んでひろつてきた霊石をかるくふれるだけで粉々にできたのだ。

菜稚琉のしたように塵とまではいえなかったがそれでも砕くことができた。だから、これを実践でつかうことに決めて望んだ対戦だったにもかかわらずこのありさまだ。

気をちよつと操作する術を体術でつかおうとしたが、かなわないとおもうやいなや紅葉はそのまま武器庫に突っこんで太刀を一本つかみとると菜稚琉に襲いかかった。菜稚琉が武器をもつまえにかたをつけようとしたが、あつさりと側面をつかれ柄を押さえられる。

菜稚琉はそのまま紅葉を跳びこえていき武器がたてかけられている場所へととんでいった。菜稚琉の手には着地とほぼ同時に帯刀がにぎられて、鞘ごと攻撃してきたのだ。

それでもなんとかかわしてきたが、あつというまに稽古場の岩の先端に追いつめられた。これ以上の防御は無理だと潔く逃げることをきめる。そのまま池のなかに跳びこんでいった。そして、いまにいたる。

（姉様はただの帯刀。だけど・・・）

紅葉のつかんだ太刀は霊刀だ。紅葉がいつもつかっている“爛王”とくらべるとかなり見劣りするが、普通にかんがえても霊刀とただの太刀では霊刀のほうが有利だ。

「！！」

紅葉はとつさに右にとぶ。紅葉の体をすっぱりとかくすほどの大木だったにもかかわらず、きれいにきりたおされる。大木は地響きをならしながらその大きな体をゆっくりとよこたわる。木がよこたわった衝撃で羽根を休めていた鳥たちがいつせいに飛びたった。

「紅葉、だんだんいい反応するようになってきたわね……それではもうすこし速度をあげましょう」

たおれた木の背後からあらわれた菜稚琉は紅葉にそういうと紅葉にきりかかった。紅葉はちかくにあった木にあわててかくれる。

（冗談じゃない！いまでもついていくだけで大変なのにつ）

紅葉はたちむかうことよりも逃げることをあつさり選ぶ。余裕がいつさいない紅葉とはちがい、菜稚琉はたのしそうに紅葉をおいかけてくる。紅葉はできるだけ木を利用して逃げているため次々と木が箸をたおすようにたおれていく。

遠目に紅葉と菜稚琉の稽古をみていた螢蘭は紅葉のようすをこまかく観察する。真剣な目で紅葉の動きをひとつひとつなぞるようにみた。

ぎりぎりのところで攻められているせいで紅葉の動きは回をおうごとに鋭利なものにかわっていく。でも、それでもまだまだ菜稚琉の足もとにもおよばなかった。

「紅葉のやつかなりいい動きするようになってきたな。でも、まだまだ、まだまだ、まだまだ、菜稚琉をたおせないけどな」

怠け者の紅葉のために螢蘭の計画を利用しているのは菜稚琉のほうだ。稽古をつけてあげるといっても紅葉はかならず逃げてしまう。おいかけて無理やり稽古させてもいいがそれでは上達がまいちわるい。だから、菜稚琉は昴摩を餌に紅葉をきたえている。

紅葉は自分の実力が菜稚琉をとらえるまで後一步だとおもって試合をつけたのだろうが、菜稚琉はいままで紅葉にそうおもわせていただけで本来の実力はあんなものじゃない。いまでさえ紅葉のほうは息も絶え絶えという感じだが、菜稚琉は息ひとつ乱していない。

そして、なによりおもしろいのが、紅葉の表情である。自分のみが甘かったこと、こんなもてあそばれてしまうような試合をうけてしまったことを後悔している、と顔にかいてある。

（おもっていることが顔にできるようじゃ、まだまだ未熟だな）

円融と柏は紅葉に手をやいているようなところもあるようだが、菜稚琉や螢蘭からすれば赤子をあやすように簡単なことだ。ましてや紅葉のことはずっとずっとちいさいときから見守ってきたのだ。わが子のようにわかりやすかった。

「しかし、菜稚琉はやりすぎだろう。今日も紅葉は痣と怪我だらけで帰ってくるな」

幼いころ、稽古をつけてやると螢蘭に紅葉は鬼、悪魔、鬼畜といつてわめきちらしたが、ほんとうの鬼、悪魔、鬼畜は菜稚琉のほうである。いくら紅葉のためとはいえっても螢蘭に紅葉をあそこまでおいつめていくことはできない。なんだかんだいって究極のところでは紅葉に甘いのだ。

「そろそろ食事の時間なんだけどな」

真上にあがったお日様をみて螢蘭はつぶやいた。

紅葉の顔には寝不足ですとでもいうように隈ができている。紅葉の隈をみると螢蘭は睡眠とれないなら意地はらずにそばに寝にくればいいのにおもいながら、そんな些細なことで意地をはっている。まだまだ幼さのこの紅葉が可愛いのだった。

結局、今日も日が暮れるまでふたりの攻防はつづいた。いぜん優勢なのは菜稚琉のほうで紅葉にはついている隙すら菜稚琉はあたえるつもりはなかった。紅葉の体力をみて螢蘭がとめにはいると紅葉はたっているのもつらいだろう足でひとり屋敷にかえっていった。

ふたりはそんな紅葉をみおくる。ほんとうはおぶってほしいだろうに意地をはって無理をしているのが手にとるようにわかる。いつもなら「師匠、つかれた」と甘えてくるのにまったくほんとうに可愛いものである。

「やりすぎじゃないか？紅葉ついていくのがやっとなえか」

螢蘭の言葉に菜稚琉は紅葉の性格を指摘するようにいう。

「あれくらいじゃないと紅葉はすぐに手をぬくようになるでしょう」でも、納得いかない螢蘭は菜稚琉にくいさがる。たしかに紅葉はなまけ癖があるがあとまでしなくても。きつと螢蘭がとめにはいらないときを失うまで紅葉をおいかけまわしてしまうにちがいない。「力がつかえないんだ。おまけしてやつてもいいだろう」

「では、首についた宝珠をとってさしあげればいいでしょう？」

「きがついてやらないっていいかねないぞ」

「うまくやります」

菜稚琉の言葉に螢蘭は押し黙ってしまい。そして、すねた子供のよな表情をして菜稚琉から視線をはずした。そんな螢蘭に菜稚琉はくすくすとたのしそうにわらった。

その日の晩も紅葉は食事をおえると気の鍛錬のために自室にこもった。ちいさな石を右手の掌にのせて左手でそれをつつみこむ。そして、しずかに目をつぶり集中する。そのまま数分すぎると左手をあげる。右手にのこされているのは砂になった石。

「うーん、ここまでではなんとかなるんだが・・・」

掌の砂をはらいながら紅葉は今日の反省をいれながらいった。

鍛錬の成果か気をつかみ気の流れを狂わすところまではなんとかできるようになった。もちろんこれだけができるようになったからといって実戦で使用することをきめたわけではない。

べつの石をとるとそれを宙になげだした。落下してくる石に人さし指でふれる。石は内外から崩壊するように砂となって散っていった。

「こつはわかってるんだけどなあ」

今日、実戦で使用してみてわかったこと。それは石と人では気の流れがちがうこと。人のほうが回路が複雑でそして、一定に流れる方向がきまっていないということだ。

菜稚琉の気をつかみ完全にそれにふれることができたはずなのに菜稚琉の動きはとまることも鈍ることもなかった。予想外のことに驚

き、乱したはずの気の流れをさぐる。するとその気の流れはかわつていたのだ。

石を五つつかみあげて宙に投げる。紅葉の掌に着地しようとした瞬間、石は塵と化して紅葉の掌にちいさな山をつくる。

「石とはちがうなにかがあるということか・・・」

紅葉は手のうえの山をおとすとあきらめたように布団のうえにころがる。目をとじるとまわりの気配を無意識にさぐる。そして、そのまま眠る。

ゆっくりと眠れない日々がつづいている。そのため肉体の疲れは完全にとれることはく、体が悲鳴をあげだしているのを紅葉は感じていた。あさい眠りでもとらないよりはましで紅葉は神経をとがらせたまま眠りにつく。

ぼろぼろになつて食卓につく紅葉は満身相異という感じた。昼飯に手をつけながらぶつぶつと文句をいつている。紅葉は完全にはめられたとおもっていた。螢蘭にはめられている自覚はとうにあったが、菜稚琉にまではめられていたとはおもっていなかったのだ。

「共謀してたんだ！はじめから修行させるために姉様と師匠は手を組んでたんだ！」

怒りを食事にぶつけている紅葉を尻目に菜稚琉と螢は食事をおえてゆっくりとお茶をすすっている。そんな二人のまったりとした雰囲気がいよいよ紅葉のきにさわる。

「姉様の卑怯者！ずっと実力をかくしていて勝てるとおもいこませるなんて卑怯だっ」

わめきながら乱暴に飯を口にほうりこむ。菜稚琉はすずしい顔をしたままおもわず本気をだして紅葉を攻撃してしまったことを反省する。じわりじわりと実力をだしながら紅葉のやるきをそらさず稽古をつづけるつもりが、予想外な一瞬のできごとについ本気をだして紅葉の攻撃を防御し弾きかえしてそのまま攻撃してしまったのだ。きづいたときには後の祭り。

（まいりましたね）

そして、紅菜のほうはその防御から攻撃をうけるまで菜稚琉をみうしなってしまうていた。戦いで敵をみうしなうことは実力の差があまりにもおおきいことをものがたっていた。

「姉様の化け物。非道、鬼畜。姉様、はじめから私との約束なんて守るつもりなかったんだ。もう一生自由がないんだ」

あまりの実力の差に紅菜はやるきをなくしてしまったようだ。勝てるみこみがまったくに完全にきづいた。

そりゃ、二〇年や三〇年もしくは四〇年たてば勝てるみこみがすこしはあるかもしれないが、それでは二〇年から四〇年も昂摩にあえないことになってしまう。人の寿命なんてたかだか五〇年だ。するとこのままだと一生あえないことになる。

螢蘭がそんな紅菜のようすにみかねて菜稚琉に（どうすんだよ）と視線をおくる。菜稚琉はその視線に（どうしましょう？）とかえした。

このままでは修行をせず、はじめのころのように逃亡をはかるにちがいない。なんとか、条件をかえてでも稽古をさせないといけない。いまのままほうりだせるほど世の中は甘くないのだが。それを紅菜にこんこんといいきかせても無駄だろう。

菜稚琉は湯のみをおく。とうとう「もうやらない」とまでいいだした紅菜になだめるように言葉をかける。ちがう条件を提示してでもこちらの思惑どおり納得してもらわないといけない。だいいちあの一瞬みせた攻撃のすばやさと鋭利さを伸ばさないのはもったいないではないか。

「紅菜」

しずかに名前をよばれて紅菜はむっすつとした目で菜稚琉をみる。菜稚琉はそんな紅菜にやさしくほほえむとつづけて言葉をかける。

「では、条件をかえましょう・・・紅菜が気をつかう術をすべて会得できれば鬼の坊やを助けに行くことをみとめてあげます」

紅菜はそのなしを疑いのまなざしできいている。菜稚琉はその

紅葉にほがらかにほほ笑みながらさらに条件をたしていく。

「もちろん、螢蘭にも鬼の坊やに手をださないと約束させます」

菜稚琉の言葉に螢蘭はえっとおもったが、紅葉の目があるのでそのことは億尾にもださず、自分からも条件を提示する。このままじや、一生でがだせないと理解されてしまう。

「紅葉があいつを助けにいくことについては目をつぶってやる」

紅葉は思案する。気をつかう術は独学でもだいぶん完成している。菜稚琉から一本をとるのはかぎりなく不可能にちかいが、しかし、気をあつかうこの術はさがみえているような気がする。可能性だけのなしをするのなら後者のほうがだんぜんいいにきまっている。しかし……

「紅葉、もしあなたが約束をまもらず逃亡するようなまねをするというのなら。螢蘭だけでなく私もあなたをとらえることになるでしょうね」

疑心と警戒をいろこくやどした瞳をなげかけたまま思案している紅葉に菜稚琉はいった。

紅葉の頭に瞬時に二匹の狼にちいさな白い兎がおわれる映像がうかぶ。もちろん、狼は螢蘭と菜稚琉、兎は紅葉だ。そうなるここからの逃走はどんな可能性をひいても不可能になる。主が帰ってこないことに心配して柏や円融がさがしにきても、菜稚琉と螢蘭においかえされておわりだ。

（これ以上の最善の道はないというのに悩んだりして、なんてかわいいのかしら）

目もまわすようないきおいでなにかいい案はないか思案している紅葉に菜稚琉はそうおもいながらみる。しばらく、思案に思案をかさねたのだろう。やっと紅葉が口をひらいた。

「姉様と師匠が気について細かくおしえてくれるのか？」

菜稚琉がみるかぎり紅葉が体得しているのは基本の“き”くらいのものでまだ実戦でつかうには無謀もいいところ。しかし、細かく説明をしながら鍛錬していけば紅葉ならあつというまに基本を体得

するだろう。

「もちろんですよ。私も螢蘭もきちんとおしえてあげます」

「師匠は絶対じゃましない？」

紅葉の言葉に人のいい顔をうかべて螢蘭は「ああ」とこたえた。紅葉からしたらこのことがなによりあやしい。ふたたび疑心暗鬼にとられる。

菜稚琉はそんな紅葉の態度をみて、よけいなことをした螢蘭の尻を紅葉にきづかれないようにおもいきりつねる。

「くっ」

螢蘭はその痛みにおもわず声がでそうになったがこらえる。そして、菜稚琉をみると（なにしてるのよ）と目が語っている。螢蘭はあわてて紅葉にいった。

「まあ、紅葉が気を体得するまでに二〇年はかかるだろうけどな」
意地悪なことをいって紅葉を挑発すれば、紅葉のまけず嫌いに火がつく。さつきまでのむっとした目とはまたちがう種類のむっとした目を螢蘭にむけると紅葉は宣言する。

「師匠にできることが私にできないわけない。いいです。うけてたとうじゃないですか」

高々に“うける”といった紅葉に微笑がもれる。もちろん紅葉にきづかれないようにだ。ことがうまくいったことに満足すると菜稚琉は食事を食べおえた紅葉にお茶をわたす。

お茶をすすっている紅葉はほんとうに可愛かった。春の息吹きが頬にあたりなでていく、うつとりと眠気を誘う春の精たちはほほ笑みながらながれていく。そんな春を感じながら菜稚琉もお茶をすすった。

（今日もおいしいですね）

昴摩はあれから二週間たってから牢からだされた。一分、一秒でもはやく傷をなおして牢をぶち破り腹いせにひと暴れしてから紅葉のもとへもどるつもりでいたが、母上がきたことによりなにもでき

なくなっていた。

暴れると予想されていた昴摩が暴れもせず大人しくしていることに黒鬼妖王は改心したとおもい。昴摩を牢からだしてやつのだ。もちろん無条件の自由をあたえてやるわけにはいかない。牢から昴摩の自室へ監禁場所がかわっただけだ。しかし、牢のほうは何倍も安全であることにはかわりない。

昴摩は長椅子に横たわりながら王の次に高いところにあるこの部屋の窓から外をみていた。部屋の高さはそのまま自分の地位の高さへとつながっている。

王がいちばんたくく、その次に夜叉、夜叉の母親、さらにその下には正室と正室の子、有望な王の子がすみ、あとは家柄、実力によってさがっていく。そして、地にちかづくにしたがって部屋も質素なものへとなり広さもなくなる。

二歳までいちばん下の使用人とおなじ階でねむっていた。昴摩に乳をあたえてくれたのは母親ではなかった。黒鬼妖王が自分の食事ようにとらえてきた人間の女だった。そう、乳がいらなくなるまで人間の乳を飲んでそだったのだ。そういえば、あの人間の女だけがこの城でゆいいつ自分を抱きしめて、声をかけてくれた相手だった。それも、昴摩の乳離れとともに黒鬼妖王に喰われてしまったが。

二歳。いつものように兄弟姉妹に虐められていたときだった。この日はとくに酷くていつものように黙って耐えていてもいつまでもいつまでもおわりがなかった。そして、兄の言葉になにかがめざめた。

「解剖してみようぜ」

生命の危機に眠っていた本能的がこたえた。きがついたときにはたくさんのかえり血をあびていて、足元にははいつくばって微かな息をしている兄と兄の取り巻きが死んでいた。その事件の翌日、部屋は上から三番目。夜叉候補たちとおなじ位の部屋にかわっていた。しかし、ここですごした思い出はあまりない。夜叉となるまでの三年間。戦いにあけくれこの部屋に帰ってくることはほとんどなか

った。夜叉になってもそれはかわらなかった。いや、戦いのなかを求めていたのは昴摩自身だった。夜叉がでむかなくてもいい戦いにまででむいていった。

勝利をおさめ血に染まって帰ってくる息子に母はあたたかくむかえいれてくれた。そして、手柄の度合いによって母との時間ができた。敵だらけのこの場所でせめて母には自分をきちんとみてほしかった。声をかけてほしかったのである。

（なんて子供じみたかんがえ・・・）

紅葉と会い自分はかわったとおもっていた。母上からの呪縛からもとかれ自分を縛る者は紅葉以外にないとおもっていた。あの紅葉にむけるあたたかな想いに縛られて自分は動いているのだと。しかし、現実には母上の呪縛はつよく。解けるどころか紅葉がそばにいないことでよけいに深く深く縛られて身動きすらとれない。

「情けない・・・」

呟けばほんとうに自分がなによりも情けない存在におもえた。こんなにも自分は情けない。紅葉がいまの自分をみたらどうおもうだろうか。手をさしのべてくれるのだろうか。自信がなくなっていた。螢蘭がいったとおり強くなくては、だれよりも強さがなければ、紅葉のそばにいられない。いまの自分はあまりにもよわかった。

“紅葉を守ろうなんておこがましい”

意識がうすれていくなかきいた螢蘭の言葉が頭からはなれない。まさにそのとおりだ。こうして縛られて動けないなんて。紅葉を守ることもできなければそばにすることすら許されない。

扉がひらくそれとともに自分を呼ぶ声がした。

「夜叉様」

ふりかえると昴摩にとって一番目の弟がいた。兄弟姉妹はたくさんいるが親しくすることはない。他人よりも他人らしいそれが昴摩にとっての兄妹姉妹だった。昴摩はなにもいわずにいた。

「すわってもよろしいですか」

昴摩は肯定の意味で長椅子にきちんとすわりなおす。それをみた

一番目の弟はむかいあうように椅子にすわった。昴摩はこの弟がなにをにきたのかわからない。まったく興味もなかったが。

「夜叉様をお迎えにいくとき私もいっしょにいきました。夜叉様は気絶なさっていてしらなかったでしょうが」

なにがしたいのかと顔をあげる。この弟自体に興味はなかったが、この城のなかでわざわざ自分と楽しく雑談しにくるような奇特やつがいるとはおもえない。

「そこで夜叉様の蝶をみましてね」

もったいぶってなかなか本題にはいろうとしない弟に昴摩はさきをうながすようにいった。昴摩自体も兄妹姉妹、親父であっても会話を楽しもうとはおもわない。他の者と会話を楽しむなどここにいたときには想像すらできなかったくらいだ。

「なにがしたい」

「いえ、あまりにも美しい蝶だったのでつい手をだしてしまいたくなった夜叉様の気持ちが変わるというだけのはなしですよ」

昴摩は奥歯がぎりつとなるのを感じた。なにをかんがえているのかわからないが、こいつはいちばん厄介なやつだと昴摩は評価している。力だけじゃなく姑息なのだ。かわいくなつてきたとおもえば命にかかわるほどの毒をのまされたことがある。これ以後、昴摩はいっそうだれも信頼しないようになった。好意をむけてちかづいてくる者ほどきをつけなければいけないと、いう教訓をおしえてくれたのはこいつである。

「蝶か・・・花から花へうつる蝶におまえにはみえたのか？」

昴摩の言葉に視線で肯定する。それが昴摩にはきにいらなかった。花から花へうつるいやすい蝶のように昴摩から紅葉を奪うことはたやすいといっているようだった。

この弟は昴摩がいるかぎりけつして夜叉にはなれない。母親の身分がひくいのだ。しかし、力だけなら文句なしに昴摩の次につよかった。しかし、一位と二位の差にはおおきな溝があった。

実力主義の世界ではあるが、母親の身分も実力のひとつとなる。

あまりにも母親の身分がひどいと力があるだけでは夜叉とは認められない。ましてや人間の血をもった母親から生まれたこいつにはよりいっそう昴摩以上の実力がもとめられる。すべてにおいて秀でていることが条件になる。

「あれは蝶ではない。地に根をはり蝶すらよせつけない気高い大輪の花だ」

昴摩は蝶と揶揄しておまえでは触れることもできないと警告をほした。しかし、弟はあざわらうように昴摩にいう。

「人は弱くうつろいやすい蝶ですよ。離れてしまえば人の心はすぐにゆらいでしまう、私はそんなものだとおもっています」

につこり笑っていうと席からたつ、戸に手をかけたままこちらをふりむくとつけたすようにいった。

「立場にしばられない私はどんな蝶をとらえてもかまわない」

挑戦的なその言葉に以外にも昴摩の心はおちついていった。いつもなら惱気を焼きいらいらするが、それは紅葉に色目をつかうやつらをまじかにみるから生理的におこるもので紅葉自体を信用していないわけではない。いや、これ以上に紅葉が自分へのあてつけにちかづいてくる者に心を許すとはおもえないのだ。

生理的にいらいらといらつくのは自分に自信がないからだ。そばにすることを許されているだけ、自分は紅葉に酷いことをしてしまった。紅葉の大切なものをすべて奪ってしまった。

「だれもみてんじゃねえよ」

でも、助けてほしくて紅葉の手がさしのべられるのをまっとう。あさましく欲深い自分の本性を恥じているのにそれでも求めずにはいられない。紅葉が手をさしのべてくれるだけでそれだけで人形ではないと、生き物であるとおもえた。

ここにいてどうしても自分が人形であることを自覚する。母親の父親のおもいどおりになる人形。自分の意志などは認められず、いわれたとおり生きていけばいいだけの人形。

人形にもどってしまった自分にはどうやってここからでていけばい

いのかわからない。求めるものがあってもここから動くすべをしないのだ。ただ、まつしかなかった。紅葉がふたたび手をさしのべてくれるのを。

あの日、紅葉がしてくれたように。

食事をおえて早々に気の勉強をはじめようと菜稚琉にむかいあうように背筋をのばしてあらたまつてすわった。螢蘭はどこかへいつてしまつていまはこの部屋にいない。

「では、紅葉お昼寝をしましょう」

その言葉にえっ？という目をむける。そんな紅葉の目をきにもせず菜稚琉はよこになった。そこに、螢蘭が掛け布をもってきた。

「はい、これ」

螢蘭はそういつて紅葉のかたに掛け布をかけてくる。とまどつて紅葉は視線を菜稚琉にむけると菜稚琉は欠伸をしながら床をたたくと紅葉にいう。

「なにしてるの？はやく紅葉もお昼寝しなさい。気のあつかいの修行をはじめるのに自分の気が充実していないとできないんですよ」

納得いかないもの紅葉はいわれたとおりよこになる。一刻もはやく修行をはじめたいのだが。

頭を菜稚琉とおなじように螢蘭の腕にのせると、三人で川の字になつてよこになった。ほんとうに眠つてしまつていいのか？と自問自答していると螢蘭が紅葉の額に口づけていう。

「おやすみ。よく眠れよ」

菜稚琉はもうすう、すう、と寝息をたてている。教えてくれる者がもう寝てしまつていてはしかたない。

紅葉はなんだか拍子ぬけして「おやすみなさい」というとそのまま眠った。最近、きちんと眠れていなかったせいもあり眠りは深く、きづいたときにはもう菜稚琉はおきていて、ふたりは寝ている紅葉をおいて夕食を食べていた。

紅葉はあたりが真っ暗で菜稚琉たちが夕飯を食べていることにお

どろいた。紅葉からすれば目をつぶってあけたら夜になっていたという感じた。それほど、紅葉は熟睡してしまっていた。

「ごはんを食べたら修行をはじめますよ」

その言葉におきたても紅葉は食卓についた。はやく稽古をつけてほしくて紅葉はあわててたべる。ふたりはもう食事をおえてしまっている。あわてて食べている紅葉の口元には米粒がひとつついてしまっている。菜稚琉はその米粒をとると口にいれながら紅葉にいった。

「あわてて食べては体に毒ですよ」

「だって姉様、時間を無駄にしまいました」

紅葉の言葉に菜稚琉はにこやかにわらうと紅葉にいきかせるようにいった。普段は怠け者でのんびりしているというのに目的をあたえた瞬間、無理をしてまでがんばってしまう。

「無駄？疲れた体で稽古をするほうがずっと時間の無駄ですよ。昔からいつてるでしょう。健全な肉体には最高の力がやどる、と」

そして、菜稚琉は紅葉にあついお茶をさします。

「ゆっくり食べなさい。無駄な時間など人にはありませんよ」

紅葉の食事がおわり菜稚琉は紅葉に気の説明をはじめめる。お茶をかたてに勉強会がはじまった。もちろん、螢蘭も同席している。

桜雅族もそうだが、菜稚琉や螢蘭も口で術をつたえ。けっして巻物や書物で術をつたえることはない。紅葉は幼いとき母上に「どうして、便利なのに巻物にしないの？」ときいたことがある。母上は「紙が術の重さにたえられなくて燃えてしまうのよ」といつていたのをおぼえている。実際、紙にのこそうとしたが書きおえたとたんに燃えてしまった。

そして、それとおなじように使う術者の器のおおきさによって覚えることのできる術とできない術がある。そのため、すべての術を継承する長はひとりで治めきれなければ二人になったり三人になったりする。ひどいときには二〇人の長がいたことが記されている。

「些細な気の流れをつかさどるこの術の名は魄氣はくきといひます。魂魄こんぱく

「についてはおぼえていますか？」

「魂^{たましい}が精神であり輪廻の輪にはいるもので滅びることのないもの。魄^{はく}は魂の器であり肉体で滅びのあるものです」

菜稚琉の問いに紅葉はなんなくこたえる。肉体と魂の基本のようなはなしだ。

「よくできました。魂^{こん}は陽で魄^{はく}は陰になり、陽の性質のちがいで人間であつたり天人であつたりまた妖かしや物の怪になつたりします。魂にあつた器に宿るのですから自然とみためにちがいがあるのは理解できますね。そして、普段紅葉がつかっている力は陽、魂^{こん}気です。」

紅葉はうなずく。そんな紅葉のようすにし満足そうにほほえむとさらに菜稚琉は説明をつづける。

「気とひとことにいつても前者に述べたような魂と魄があります。魂^{こん}気は自分で意識することが求められ、そのため精神力と体力両方ともがいちじるしく消耗します。一方、魄気は意識することなく常に動いています。心臓が意識しなくても動いているのとおなじで、魄気は体力も精神力もあまり消耗しません。そしてなにより無意識でつかうことができます」

無意識という不適切な言葉に紅葉は首をかしげる。紅葉が魄気をつかおうとするとどうしても気を感じて意識しなければならない。「意識がいらないというのは怪我をしたとき、病にかかったとき、肉体に異常をきたしたときに勝手に体が治ろうとすること。いままで紅葉はこの気の流れを感じてきましたか？」

その言葉に紅葉は首をふる。体がもつ自然治癒力を感じるのは傷がふさがつたり病気が自然と治つたりと目にみえる現象だけだ。気そのもののながれを感じることはない。

「なかなか自分のなかの魄気を感じることはできません。ですから、こうして触れられただけで体が動かなくなつたと誤解してしまうのです」

菜稚琉はそういいながら紅葉の体にふれた。とたんに紅葉の体が

ピクリとも動かなくなる。そして、声すらでなかった。ふたたび、菜稚琉が紅葉にふれると体の自由がもどっていく。

「魂にあたえられる公然とした技とはちがい、自分でも感じることはない魄の隠然とした技は一筋縄では解くことができない。魄は肉体。性質のきまつている魂とちがって魄はきまつていないため、気が流れていてさえいれば異常とは認めず気の流れを修正しようとはしないのです。それは無意識的なものです」

菜稚琉はそういわずかに目をとじる。紅葉はなにをしようとしているのか注意深くみる。ここでの注意深くはもちろん魄気をさぐることだ。すると菜稚琉の気の流れがかわる。波立つこともなくいつでもかわらずその場にいつづける水面のようになってしまった。「まずはこうして自分の魄をおもいどおりに操れるようになりことが第一歩。紅葉はこの基礎を無視しているから実戦ではまったく役に立たないのです。わかりましたか？」

すべてお見通しですよという感じでいわれた紅葉はすこしきまずそうに「はい」とこたえた。

一本の大きな桜の木は照らされているわけでもないのに自らゆらりと妖しい光をはなっている。はらはらと散つては水面にもその妖しさを感染させている。幼いころ紅葉をのみこんだその木の表面にはそのときの名残がのこっている。

螢蘭はその傷に愛おしげにふれると珍しくこの時間におきてきている菜稚琉の気配にきづく。そして、声をかけた。いつもなら日が沈みきると寝てしまっているのだが。

「紅葉がおきてしまうぞ」

紅葉は昔から命を狙われる生活をおくってきたせいで保護してくれる者がいないと眠れない体質だった。一族が滅びたあと、菜稚琉と螢蘭は紅葉の安眠剤になった。それは、紅葉が柏と円融を誕生させるまでつづいた。螢蘭は自分の言葉に幼い日、紅葉がだれもいないことにきづいて泣いて自分たちをさがしていたことをおもいだす。

「紅葉が起きるまえにもどりますよ」

菜稚琉もおなじことをおもいだしたのか揶揄するようにいった。菜稚琉はいつまでも螢蘭のなかでの紅葉は幼いときのままなのだろうとおもう。そして、すぐに自分もおなじだとおもいなおしくすりと心のなかで笑う。

「後悔しているのですか？」

菜稚琉は螢蘭にといかけた。愛おしそうに桜の傷をふれながら苦しそうに目を細めている。紅葉の力をうけて狂い咲く桜から手をはなして螢蘭は「いや」とかえした。そして、言葉をつづける。

「紅葉には必要だった」

桜も今回のことも螢蘭はそうおもっている。酷な役回りを自ら選び、憎まれ役をかってでるのはそれほど紅葉にむける愛情が深いことをあらわしている。けど、螢蘭はそれをしられるのが照れくさいのかいつもふざけたふりをしてその愛情を霞ませてしまっている。

そんな螢蘭を菜稚琉は愛おしくもじれったくおもうときがあるのだ。「紅葉は筋がいいからもうほとんど習得しかけてるだろう」

菜稚琉には螢蘭が過去のはなしから逃げるように現在のはなしをしたのがわかったが、それでも過去のはなしにひきとめることはない。過去は過去でどんな望んでもかえってもやりなおしこともできないのだ。

「そうね。あと一歩というかんじかしら」

菜稚琉の言葉に螢蘭はこまったように溜息をつく。嬉しいやら悲しいやら複雑な気持ち体が中からでていた。菜稚琉はくすくす笑うと螢蘭を励ますように言葉をかける。

「暴走したらまた私たちがとめればいいだけです。いつもとおなじことです」

「そうだが、まえにも基本だけ習得して外へ飛びだしていったらう。きつとまた飛びだすとおもうぞ」

螢蘭はそのときのことをおもいだす。あのときは不意をつかれて大変な目にあつた。遙か昔のことだが、いまでも鮮明に覚えている。

紅葉のやんちゃな性格はどんなにときがたってもかわらないのだ。

「しかたないでしょう？こらえ性があるように育ててはないんですもの。あなたの汚点ですよ」

その言葉に螢蘭は納得いかないように菜稚琉に目をむけると批判するようにいった。

「菜稚琉もなんだかんだで甘いからだろう。俺ばかりわるいんじゃないぜ」

「では私たちの汚点ですね。もう修正はきかないのだから、あきらめましょう」

菜稚琉の言葉に何度目かの溜息をつく。今回は魔界までいくにきまっている。絶対だ、絶対。昴摩がこちらにくることはない。そういう風にしむけてある。そうなると菜稚琉は行動を制限されてしまう。魔界には菜稚琉はいけないのだ。

「俺ひとりがかんばるのかよ」

「しかたないでしょう。私はいつでも役に立たないんですから。外でまってますよ」

菜稚琉の言葉に螢蘭は「そうだよな」と呟く。そして、おもいつめた表情をする。

「あの体はそうながくはもたない」

螢蘭はそういつて桜から手をはなす。人の血が濃いあの体には昴の妖かしの血と柚羅乃の天上人の血があまりにもうすくなってしまう。っている。

「魄が使いこなせるようになればその期間もまたながくなるわ。大丈夫よ。螢蘭、私たちが恐れていることはなにもおこらない。そうでしょう？」

それでも螢蘭の気持ちが慰められないのはわかっている。菜稚琉は気休めだと自分でもおもう。こたえない螢蘭に菜稚琉は微笑む力もなくなりそうだった。

最悪の場合をかんがえ、ながいあいだ準備してきたもの。それをつかうことは躊躇われた。紅葉には魔界へいくことが必要だった。紅

菜のかかっている術を破るため、眠っているもうひとりの紅葉を覚めさせるため。

螢蘭は菜稚琉の顔が一瞬くもったことを感じとるとそうだなというように「大丈夫だ」と呟いた。菜稚琉も「そうよ」と呟く。そして、螢蘭は歌うようにいった。言霊をのせて。

「天がおとした光明。光と闇の生をうけ、また天地に愛され育まれた愛児は光を燈し永久の幸を承る運命」

未来への願いをこめた言葉に菜稚琉は「いい言霊ね」といって桜にふれた。桜はらはらと薄い花びらを散らせている。

紅葉は満面の笑みをうかべていた。その笑みには達成感すらうかんでいる。昨日つかみかけていた基本的な魄の流れを習得したのだ。自分の魄を操作できるようになるとあとは乾いた地面に水がしみこんでいくかのようにはやかった。そして、その日にうちに菜稚琉がかけた魄気を破れるようにまどなった。これが基本編の試験をうける資格として提示されていたものだ。つまり、受験資格をえたことになる。

「紅葉、ではこれを砂に変えてください」

菜稚琉はそういつて石をわたした。掌につつまれるほどちいさな石は無蝕限だった。ふれた瞬間、力が抜ける。紅葉は体がたおれきってしまうまえに魄気を抑制して石の波動にあわせる。するとたんに体の力がもどってきた。すこしまえまでこれをもつこともできなかった。その成果にやはり笑みがうまれる。

「紅葉、もてるだけじゃだめだぜ」

「わかってます」

螢蘭の言葉にそうかえすとしずかに息をつく。そして、じーと石をみつめると無蝕限はさらさらと砂になってしまった。砂の山になつてしまった無蝕限に螢蘭はふれる。無防備にふれたのにもかかわらず力を奪われることはない。いちおうここまでできるとおおむね術を使いこなしていることになる。

螢蘭は期待満々で自分の顔をみている紅葉に心のなかで絶望にも
にた溜息をついてから、紅葉の望む言葉をいつてやる。

「合格だ。完全に無効化になっている」

しかし、悪あがきを忘れないのが螢蘭のしぶところだ。基本
の試験のレベルをさらにあげた。応用編に足がかかっているような
ことをいう。

「今度はこれが無蝕限にもどしてみろ。それができたら文句なしの
基本合格。戦闘につかってもいいぜ」

壊すことは意外と簡単だが作りあげることは困難だった。魄を正
確に構成しなければならぬ。紅葉は自分の手にのこっている砂も
床におくとそのうえに自分の手をおく。そして、おなじようにじー
とみつめたがおもいどおりにいかない。目をとじて再度挑む。
「不合格だな」

数分たつても変化はなかった。意地悪な螢蘭の言葉にプツンと集
中力がとぎれる。とたんに紅葉の表情がぶううと不機嫌なものにな
る。そして、非難がましく螢蘭にいった。

「師匠が口をださなかったらあとちよつとできたんです」

紅葉は怒りながら手を払う。螢蘭は紅葉を挑発するようにさつき
まで紅葉の手があつたところに右手をのせる。一瞬だった。あつと
いう間に無蝕限はもとにもどってしまう。

「実戦では一瞬が勝負なんだよ」

紅葉は悔しそくに螢蘭をみる。床にはころんとした無蝕限の石が
あつた。螢蘭は「ああ、簡単だな」といいながら悔しそうな顔を
してる紅葉に目をむけた。

（まったくあの人は困った人なんだから）

菜稚琉はそんな螢蘭と紅葉を微笑ましくみている。螢蘭が基本を
習得したときいた紅葉が早々に実戦へとむかわないように紅葉のま
けず嫌いな性格を利用して抑制したことはお見通しだ。でも、こん
な憎まれてしまうようなやり方をしなくてももおもつがこれが螢
蘭なのだ。

（今晚あたりかなあ）

螢蘭の計略も悲しく、紅葉は今晚にでもこの屋敷を脱出して魔界へ王子様を助けに行くのだろう。そうおもいながらキィキィわめいている紅葉と勝ってみるよと挑発している螢蘭をみて暖かい気持ちになった。

そして、この日の晩。菜稚琉の予想どおり紅葉は動きだした。こっそりおきだすと菜稚琉をおこさないようにそっと部屋をぬけだしていった。

螢蘭の挑戦は心残りだが、螢蘭との勝負はいましなくても充分に機会はあつた。しかし、昴摩はなにがどうかわるかかわらない。いつも追いかけてきているものがないとけっこう寂しいものだ。そして、寂しがりやなところがある紅葉はその寂しさが嫌だった。

紅葉がいなくなつてしばらくすると菜稚琉はもういいだろうとおもいきりあがる。すると螢蘭が部屋にはいつてきた。そして、紅葉がいないことを確認すると「はあ」とながい溜息をつきながらしゃがみこんで頭をおさえている。

「しかたないですよ。負けず嫌いの虫より寂しがりやな虫が騒いだんでしょう」

うなだれている螢蘭にそう声をかける。その言葉をうけて螢蘭は菜稚琉に背をむけて紅葉を捕獲しにいこうとした。しかし、そんな螢蘭の足を管狐二匹がくいとめる。菜稚琉のいくなという命令だった。

「いまからだつたら余裕でつかまえられる。まだ、あいつにははやい。ましてや魔界だぞ」

「落ち着きなさい。紅葉をつかまえて閉じこめてもしかたないことでしょう。それより、紅葉が自分でどこまでできるか見守ったほうが収穫はおおきいです。それはあなたもわかつているでしょう？ 螢蘭」

菜稚琉の言葉を理解していないわけではない。たしかに菜稚琉のいうことは一理あつた。だが、心配が先立つときだつてある。いつ

もそうだが。意外と物凄く過保護なのだ。

「そうだな。でもっ」

それでも、口ごたえしようとする螢蘭に菜稚琉は悪戯ばくほほ笑むという。

「甘やかしすぎですよ」

螢蘭はその微笑に疲れたように横になる。菜稚琉は満足げに螢蘭の頭をなでるとよしよし、とねぎらう。螢蘭は目をつぶり菜稚琉の手をにぎりしめてすこしいらだつ声でいう。

「明日は朝、はやいからな」

菜稚琉は「はい、はい」と返事をするそのまま眠りにつこうとする螢蘭の体を管狐をつかって布団まで運んだ。そして、明日は忙しくなりだとおもいながら、秒殺で眠りにつく。菜稚琉の眠りは瞬殺で深いものへとかわっていった。となりで目をつぶっているだけの螢蘭はそれを感じしながらも溜息をつく。もう何度ため息をついたことだろう。

紅葉がからむといつもそうだ。心配とあきらめて我慢の溜息をつかなくてはならない。

菜稚琉が自分に紅葉の動きがわかりにくいようにしていたのはわかっている。今日、紅葉を逃がすつもりでいたのだ。魔界へいけるのは螢蘭だけだ。菜稚琉はある一定の線からはいれない。

もやもや、くしゃくしゃしながら螢蘭は眠りにつく。眠って体力をためなければいけない。今回の機動部隊は自分の役目なのだ。

4 頓作

紅葉がでていつてからはや一ヶ月がたとうとしていた。春の主役は梅から桜にかわりつつあった。ほとけのぎ、すすしろ、つつじ、やまぶきにすずなとまだまだ春の草花は春をおおかしている。そのおかげで豪華絢爛、春爛漫といった風情にかげりはない。そして桜の登場はどんなに煌びやかなものになるだろう。

「平和ですね」

円融ののんびりした声が釣殿からきこえてくる。柏もとなりにざしていて円融のそのつぶやきに「そうですね」とこたえている。我侂な主がいなくてこの屋敷はおそろしくしずかだった。紅葉がいたらいまごろ「桜見酒だ」といって酒と肴をと共に桜をみにいているにちがいない。

春は紅葉のもともよく活動する季節だ。暑い夏は暑さにだらけて寒い冬は寒さにこもる。秋は美味しいものや読書にふけりまだ活動的だが、春とくらべるとやはりくらべものにならない。

春は温かくおだやかで陽気なせいか、紅葉は好んで遊びにふけてしまふ。寝ても心地よく、遊びにふければ陽気だ。つまりしたい放題なのである。

そのたびに柏や円融はふりまわされる。酒の飲みすぎはたんに体にわるいだけではなく、紅葉の酔い癖がわるいことがなによりも困ったところだ。飲みすぎるとなにをするかわからない。屋敷をこわしたり、物の怪をよびよせてえらいことになったりすることはたびたびだった。

ほろ酔いから泥酔三步手前ならなんとかいい範囲だが。しかし、それ以上いくと屋敷が危険にさらされる。屋敷だけならまだよいが、屋敷からでて外に被害をおよぼすこともしばしば。そんなことだから「妖かしだ」「物の怪だ」と騒がれるのである。

しかし、まだ夏や冬なら暑さと寒さという障害がありあまり外にで

ていくことはない。秋になると哀愁のおかげかほろ酔いくらいですむ。春はちがった。春は特別なのだ。

陽気につられるせい、紅葉は泥酔になるまで飲みだがり心地よい温かさにつられて外へでていってしまう。暴走することたびたび。そのため、柏や円融は酒の相手をしながら量を監視したりあばれはじめた紅葉をおさえつけたりと春はよけいに紅葉に手がかかった。「せめて桜がおわるまであちらにおられればいいのに・・・」

あまりの平和に柏の本音がぼろり。円融もその発言に「まったく言葉をかえす。梅の時期、桜の時期、藤の時期。この三つの時期でもっともひどいのが、桜の時期だ。やはり春の最強の主役は桜なのだろうか。

「あちらでは紅葉様はまったく頭があがりませんからね」

円融はふたりのまえにいたときの紅葉をおもいだしながらいった。幼い紅葉に酒をおしえたのはもぎれもなく螢蘭だが、酒に飲まれるような飲み方を許すようなことはしない。

螢蘭の持論で“酒は楽しむもので飲まれるものではない”というのがある。酒は楽しく陽気にそして、優雅にのむものだ。けっして自分のしたことを忘れたり酒にのまれたりして分別を失うことはありえないことだ。

「暴走しても叱られておわってしまうのだからあれ以上安心なところはないですし」

柏がそういつてほほ笑む。日ごろ、シワができるのではないかとおもうほど紅葉にふりまわされ胃に穴があくかとおもうほど心配させられている柏にはあのふたりにまかせるほど安心していられる場所はない。

ふたりがまったりとしていると蒼が管狐を肩にのせてあらわれた。沢に釣りにいった蒼は手に釣り道具をもっている。魚もつってきたのだらう。すこし生臭い。

「きてたぜ。お、やめろよ。くすぐったいだらう」

管狐は蒼の耳に鼻をおしつけてじゃれている。そんな管狐に蒼は

おなじようにじやれて首をかいてやっている。蒼は動物になつかれやすいのだ。

「なにをもつてきてくれたんです」

円融は仲むつまじい管狐と蒼にいった。すると管狐は自分の役目をおもいだしたかのように蒼の肩からおりるとコンと咳をして青い石をはきだした。親指と人差し指で円をつくったようなおおきさの球体はころころと床をころがる。

「言霊ですか」

そういった円融にこたえるように管狐はきゅうと鳴く。そして、ふたたび蒼の首に体を巻きつめてしまふ。どうやらお気に入りの場所のようだ。

「あまりいい予感しないなあ。俺」

蒼の言葉に同感しながら円融はその言霊を地面にたたきつけた。言霊は罅がはいりふたつにわれる。とたんに爽やかな耳に心地よい声がかこえる。その声には充分にきき覚えがあつた。声の印象を裏切らない姿がおもいうかんだ。

（菜稚琉様じきじきとなればゆくりというわけにはいきませんね）
声の主がだれだか瞬時に判断した円融はそうおもいながら蒼にじやれている管狐をみる。たぶん、いや確実にあの管狐の能力は駿足だろう。

円融の記憶のなかではあの人のもっている管狐は一二〇匹ほどだったはずだ。しかもその管狐すべての能力を菜稚琉は把握している。管狐は能力者の力によって繁殖するから確実に記憶しているよりは数はふえているだろうが。

管狐はそれぞれがちがった能力をもっている。普通の者ならそうそう繁殖することはむずかしい。よって、一匹もしくは二匹しかもつておらず、その能力にめぐまれればいいがめぐまれなかつたら戦力になることはない。ある意味、賭けのような感じの憑き物だ。もちろん、欲張つて繁殖をさせると使役ができなくなったり異常をきたしたものが産まれたりする。

菜稚琉も螢蘭もすごい人たちなのだが紅葉は昔からこの人たちの力の領域をあたり前だとすりこまれているせいで世間一般の考え方とすこしずれている。

「あいつ、本物のバツカやろうだッ」

螢蘭の叫びにちかい声に菜稚琉はすこし迷惑そうだった。紅葉がなにをもつていったのかを調べるために武器庫にきている。武器庫のなかで減っていたのは“時雨”だけだった。

弓もそのほかの短刀や槍もいっさい手がつけられていない。ここには普通では手にはいらぬ業物がおかれているのに“時雨”一本だけをもつてでていったのだ。そして、螢蘭は激しくそのことを怒っている。

「落ち着きなさい。いちおう管狐一匹と獣笛じふしをもつていつていけるだけましです」

管狐の寢床ごとなくなっていることと獣笛がないことを冷静に螢蘭につたえる。しかし、螢蘭は苛々と頭をかきむしって狂乱寸前というかんじだった。菜稚琉と螢蘭は静と動でまったく正反対の性格だ。「アホか。sonだけどうやって魔界の王族にたちむかうんだよ」

螢蘭の「アホ」という言葉にキツときつい目線をおくる。いつもの朗らかな瞳をしている菜稚琉にそんな目をされて、螢蘭は自分の失言にきづく。

「っ、すつすまん……でも、管狐つかえるのかよ」

素直にあやまった螢蘭に菜稚琉はいつもの朗らかな瞳にもどる。

そして、螢蘭の質問にこたえた。

「大丈夫です。いちばん紅葉に懐いている子をつれているようですし、それにこちらから暴走しないように抑えれば間違いはないですよ」

いまの紅葉は霊力がつかえない。紅葉は体術と魄気、そして、管狐で王子様を助けにいつてしまったのだ。幼いときから策を練り、技をみがいてから戦いには挑めと教えているのにもかかわらず、あ

の子はまた、突発的に喧嘩をしかけにいつてしまった。まったく喧嘩っばやい性格である。

（紅葉なりに管狐と獣笛で策を練ったつもりではないでしょうね？）
そうおもいながらもしものときをかんがえて菜稚琉は螢蘭に提案する。

「螢蘭、紅葉の首の石。無効にしますか？」

「だめだ。それだけではできない」

無駄だとわかっていて菜稚琉は螢蘭にいった。やはり予想どおり螢蘭はきっぱりと否定する。力だけを抑えているわけではないのでしかたないが。

「とりあえず、現場へ先回りしましょう。どうせ、紅葉の足ではまだついてないでしょうし」

菜稚琉は管狐の寢床であるほそい管を一指し指でとん、とん、とたたくと管狐をよびだす。六寸ほどのほそい筒に五匹の管狐をいれと飾りのついた蓋をしてひとつに結われている髪にさした。

「紅葉を確保したらみっちり説教と稽古だ」

螢蘭は外出用の女姿になっているのに言葉がまだ男のままだ。かなり怒っている証拠だ。やることはわかっていたが、まさかこんな軽装備でいくとはおもっていなかった。戦いにいくには重装備でいかなければならない、ということから教えなければならぬのか。
螢蘭は怒りであれくるう胸のなかであきらめにちかい溜息をつくのだった。

紅葉は三日もかけてやっと魔界の門のうちにはいった。魂気つまり霊力がつかえないことでなにをするにもおもった以上に時間がかかってしまう。紅葉はやつとみることができた魔界の姿に眉をひそめる。

気配はわるいものの外観的にあまりかわりがないようにおもった。さすがに可愛い草花は咲いていないが、簡素な森という感じの外観だ。

紅葉がかんがえていた魔界はもつと石や岩がごろごろしていて、暗くおもい空をしているのだとおもっていたけど、実際はぜんぜんちがうようだ。

紅葉は予想外な姿にちよつとがっかりしたが、流れる不穏な雰囲気と肌を感じるどんよりとにごった空気は予想どおりだった。

ある意味、自由な感じもする。清涼な綺麗なものはこまごまとした努力と決まりがあるからこそなりたつ。紅葉たち人間の地上もおなじだった。穢れがこないように綺麗に掃除して、塩をおき、毎日経をあげて心をおさめる。術者と地は互いに影響を受けやすいこともありきをつかうのだ。

（さて、どこにいけばいいのかな・・・）

はじめての魔界観光だ。どこになにがあつてどうなっているのかまったくわからない。いちおう螢蘭や菜稚琉が魔界の地図のようなものをもっていないかちょこつと搜索したが無駄だった。

紅葉はいきあたりばつたりな状態で螢蘭のもとから飛びだしてきたのだ。紅葉らしくないといえばそれで終わりだが、どうしても我慢できなかった。

意外とおもわれるだろうがおもいたつたらすぐ行動。我慢や忍耐という言葉とは無縁なところがすこしあるのだ。

紅葉は懷から竹のほそい筒をとりだす。その筒は菜稚琉の管狐のなかでゆいいつ名のついた管狐の寢床だった。紅葉は寢床ごこの管狐をつれてきたのだが、つかうことをためらっていた。

「芽衣果^{めいか}・・・」

芽衣果という名は紅葉がつけたものである。紅葉にとって芽衣果は幼いときの遊び相手だ。芽衣果は名前を呼ばれて筒からでてきたそして、紅葉の首にまきついてくる。すりすりと頬にほうずりして甘えてくる。紅葉は甘えてきた芽衣果の首をやさしくかいてやる。

「・・・うーん、でもな・・・」

芽衣果は気持ちいいのかくうん、くうん、鳴いている。芽衣果をつれてきたのは単になついているというだけではない。

芽衣果の能力は狩り。つまり獵犬のようなものだ。探し捕らえるにはもっともいい能力なのだが、どうしても使いきれぬ自信がない。いままでよく遊んできたが、使役して使ってきたわけではない。近所の犬や猫と遊んでいたという感じだ。その犬にいざ狩りの相棒になってもらおうとしてもうまくいくのだろうか。不安だった。「十日さがしてなにもつかめなかったら、芽衣果をつかうことにしよう」

紅葉はそう結論づけると、芽衣果を筒のなかにもどそうとした。しかし、芽衣果は筒にはもどらず、紅葉の首にまきついたままだった。そんな芽衣果の態度に紅葉の不安はおおきくなる。

（無理かも・・・）

管狐は繊細で頭がいい。そのため使役できればこれほど便利なものはいない。しかし、術の力だけでは使役できず、管狐が主をきかない場合は主を食い殺すか憑りついて意のままに操ることもある。

これまで紅葉は生き物を使役したことがない。柏や円融は自分の力と両親の亡骸でつくった式だが、やはり根本的なところでは生き物とはちがう。ゆいいつ、ちがったのは昴摩ということになるが、あれは使役しているといえるのだろうか。ううん、なぞだ。

いろいろと悩んでいるとどこからか低俗な物の怪があらわれた。醜い容姿の二人をみて紅葉やつと魔界にきたことを実感する。それとともに自分がこの氣にまだなれていないことへの危機感をいだいた。

（なれるまで隠れておいたほうがいいな）

紅葉は心のなかでそうおもつと二人の物の怪をみた。この程度のやつらが気配を消せるわけがない。ということは自分の感覚がにぶっている証拠だ。もし、もっと上級の者がきていたとしたら何もきづかず殺されていたかもしれない。

「こんなところに迷いこんで、くつくつく、危ないよ」

「そうそう、お姉ちゃんみたいな美味しそうな子がさ」

どうやら、紅葉の首にある戒めのおかげで普通の人間が魔界に迷いこんできたとおもっているらしい。無防備な羊が狼の群れに迷いこみ、自分たちはその上物の獲物をまっさきにみつけた運のいいやつだとおもっているようだ。

「お前たち鬼族の住処をいつているか？」

紅葉はいった。しかし、二人の物の怪は下卑た笑いをうかべてこたえる。それは紅葉の満足するこたえではなかった。

「お嬢ちゃん、俺らと遊んでよ」

「そうそう、きゃあ、きゃあ、いつてさ」

紅葉は頭痛を覚える。青い石の首輪のおかげでまったくはなしにならない。いつもならちよつと靈気をだしておどせばすんなりとはなしがつくというのに。

「そうか」

紅葉はいうがはいか、“時雨”をぬきとり踏みこんでいった。

次の瞬間、二人の物の怪の背後に着地した。物の怪たちはなにが起きたのかわからず後ろをふりむくとそのまま崩れ落ちた。ばらばらになったそれをみて紅葉は半紙をだすと“時雨”を拭いて清めてやる。あいかわらずいい切味だ。

「はあ、さきはながいな」

はやくも疲労困憊という感じがした。紅葉は溜息とともにその場からきえた。

紅葉はみつけた洞窟でまる一日すごした。すると、気も馴染んだのか徐々に他の者の気がわかるようになってきた。そして、やつとのおもいでいつもどおりにまでもどったのだ。

そして、歩きまわりかたつぱしからはなしをしてわかったことはここには低俗な物の怪たちしかないということだ。昨日のような不愉快なおもいをしてすすんでいかなければいけないかとおもうとはやくもめげそうだった。しかも、腹も減っている。

（口にできる食い物があるのか）

不安になりながらも紅葉は洞窟からでて食い物をさがして沢まで

きていた。ここにくるだけで昨日のようなことが六回もあった。そのたびに鬼の住むかをきくがまったくの手がかりなしで、昨日のくりかえしだ。

ここにくるまでに木の実もあったが、なにせ魔界の食べ物だ体に合わないとうなるかわからない。正直いつてかるくかんがえていた。二日や三日でつれもどせるとおもっていた。しかし、なかなかそうはいかないことをこの二日たらずでよくわかった。

沢の水を両手ですくって恐る恐る舌をつける。犬のようだとおもったが、いきなり口にくくむことはためられた。舌にふれた水は地上にある水となんらかわらないようなきがした。おもいきって口にくくもうとしたとき、五名様登場。

「お姉ちゃん、いいケツしてるね。がぶっと食っちゃいたいぐらいだよ」

「なにいつてんだ。あんな上物そく食うにはもったいねえよ。俺の嫁にならない」

「ああ、楽しそう。さんざん泣かせてじわじわ食うの」

着物をみて紅葉が身分の高い者だと判断たんだろう。身分が高い者、高名な術者、美しい者は妖かしや物の怪にとっては美味だという。

紅葉はまたかとおもいながらたちあがると背後にいる胸糞わるいやつらを疲れた顔でふりかえる。これのくりかえしだ、とおもいながら柄に手をかける。

「おお、しかも美人」

物の怪の言葉をきき終わるまえに紅葉はふみこんだ。風がとおりすぎたような紅葉の剣術にやはりなにがおきたかわかる者はいない。亡骸をみて紅葉は鬼のことをきくの忘れていたとおもったが、どうせなにも情報はえられないだろうとおもいなおした。

言霊をきいた三人は使いでよこされた管狐の背中にいた。管狐は音よりはやく移動している。紅葉が魔界にいつてしまったときいた

三人はしんそこおどろいたが、紅葉ならありえるとおもいすぐに冷静さをとりもどした。

「まったくあいかわらず何をしでかすかわかったもんじゃねえな」

蒼はよこになり自分の腕を枕にしていた。本来ならあまり螢蘭のそばにはいきたくないのだが、紅葉が魔界にいったとなればそうもいってられない。

「つきますよ」

円融の言葉に蒼は起きあがると地上をみた。そこには岩と石しかなく、生命あふれる緑や光はなかった。管狐が着陸した場所。それは魔界の門のまえ。

「よくきてくれましたね。螢蘭はもうなかですよ」

菜稚琉が三人をでむかえる。どうして、菜稚琉はいかなかったのか。円融は不思議におもう。言霊をのこすなり管狐をおいとなりしておけば充分のはず。

「では、いきましようか」

柏はそういつて門に手をかけておもいきり押した。しかし、門はびくともしない。「なにしてるんです」といつて今度は円融が門を押ししたがやはりびくともしない。

「どうゆうことだ？」

困惑気味に蒼はいった。三丈以上ある石の門は普通の人間の力ではとうていあくものではない。柏や円融は式で腕力も尋常ではないのだが、あく気配はなかった。

「やはり、だめですか」

そういつて菜稚琉は溜息をつく。菜稚琉自信は門にふれることもできない。それどころかここからさきの侵入は自殺行為だった。

「どういうことですか？菜稚琉様」

円融の言葉に菜稚琉はにっこりわらうといった。

「試したかったですよ。いまの紅葉の両親はどうだったのか？」

意味のつかめない言葉に円融と柏はたがいの顔を見る。しかし、そんな二人をおいて菜稚琉は蒼をみるとうれしそうにいった。

「蒼、まさかあなたがきてくれるなんておもってもいませんでした。放浪の旅からかえってきたんですね」

「ええ、まあ」

この状況に似つかわしくない菜稚琉の表情に蒼はくちごもる。

「あなたなら大丈夫」

菜稚琉はそういつて蒼に紙札の袋をわたした。そして、一匹の管狐をだすとはなしかける。

「紅葉はみつかったかしら？」

すると管狐から言葉がでる。その声に蒼は反射的に背筋がのびる。
「いや、まだよ。なかなかみつからないのよね。ちよつとまってて声は苦戦をしいられているといった感じでこたえた。その後ろから爆音や悲鳴がきこえてきてしまいいには地響きまでもきこえてきた。
(まあ、やつあたりして)

菜稚琉は必要以上の攻撃に心のなかで感想をいう。すると、管狐がはなしはじめた。

「ごめん、菜稚琉。やつとしずかになった」

「螢蘭、そっちに蒼を派遣しますからね。仲良くするんですよ」

蒼は菜稚琉のその言葉に怯えた表情と拒否の表情をうかべる。しかし、容赦ない菜稚琉はつづけてこういった。

「蒼にはあなたがあつかえない物をわたしてあるんですから、傷つけてはいけませんよ」

「はい、はい。わかつてる……蒼、あなた私にふれたら殺すからね」

螢蘭は蒼にむかつていった。ほんとうにわかっているのか、というつつこみが蒼の心に芽生えたがこんなつつこみ許されるのは柏と菜稚琉しかない。基本女性がなにをいっても命の保障はある。

「あ、それとこの子たちもいっしょにつれていってください。螢蘭がつれていくのをわすれていて困っていたんです。あなたがこなかったら螢蘭をよびもどさないといけませんでした」

菜稚琉は髪飾りから二匹の管狐をだした。そして、あるうことが

螢蘭にこんな恐ろしいことをいう。

「螢蘭きちんと蒼にお礼をいっておくんですよ」

螢蘭は「はい、はい」と適当な返事をかえしている。絶対に礼の言葉はこの人からはきけないだろう。

管狐は蒼の懷にもぐりこんでしまった。そして、そのままうごかない。菜稚琉はそれをみとどけると蒼にいそぐようにいった。

「さあ、蒼。門をあけてください」

「えっ、でも、オレには」

「ぐずぐずしない。急いで急いで」

菜稚琉の言葉にとまどいながらも門のまえにいき、手をあてる。

そして、力いっぱい押した。扉はあっけなくひらいた。え？というまぬけな顔をしている蒼に菜稚琉はほほ笑むといった。

「じゃあ、いつてらっしゃい」

「じゃあ、いつてきます」

蒼はつられて返事をかえすと門のなかへとふみこんでいった。その後ろを柏があわてておいかけける。門はゆっくりとしまつていった。円融は門の外にのこったまま。

「いかないんですか？」

菜稚琉の言葉に円融は癖のあるほほ笑みをつかべて「ええ」といった。そして、しばらくすると扉がふたたびひらいた。扉のむこうには柏を肩にかかえた蒼の姿があった。柏は顔を真つ青にして苦しそくに眉をしかめている。その柏をみて円融はおもった。

（やはり）

そして、長年なぞとされてきた菜稚琉と螢蘭の正体がなんとなくわかったきがした。だが、まだ確証はない。

「それはこちらで預かりますから、急いで」

菜稚琉は柏をうけとると蒼にいった。かけだしそうになった蒼の袖を瀕死状態の柏がつかむと蒼にいった。

「紅葉様をたのみますよ」

「わかつてる」

その真剣な眼差しと苦しそうな声をうけて蒼は表情をひきしめるとその門のなかへとはいっていった。蒼のうしろ姿は門のなかにきえていった。

魔界にきてはや四日目。ここにきてから紅葉は水しか口にしていない。空腹と低俗なやつらにからまれて苛々はかなりつのっている。ぶち切れる寸前といったところだった。そこに、睡眠不足もくわりきわどいところまで精神はきていた。

精神的につよい紅葉でもあの低俗なやつらの低俗な頭にはついていけない。やつらの頭には食欲か色欲しかないのだ。醜いっただらありやしない。

「ああ、もう全部殺しちゃおっかな」

危ないことをいいながら紅葉は水をのんでいた。空腹でも物を口にすることはためらわれた。この気のなかで育ったものが口にあるとはおもえなかったのだ。体を壊す可能性がたかい。

すすんでいる紅葉のまえに人の姿をした者があらわれた。ここ四日間、物の怪の醜態をみてきたせいかわれた妖かしがこの世でもっとも美しいものにおもえる。実際はそのへんにいるありきたりな容姿の妖かしなのだ。

「噂どおりの綺麗な子じゃん」

紅葉のことはこの界限ではとうに噂になっていた。類まれな美しい容貌に剣ひとつで一瞬で敵をたおす、となれば噂にならないほうが不思議だ。そして、美しい者ほど美味いというのはあたりまえのこと。

（きっと、はなしがつうじる）

まともな感じのその妖かしにおもわず歓喜の心がめばえる。いつもの紅葉ならこんなふうにはおもわなかったが、なにせいまは精神的にかなりきている。いろんな意味で。

「あのききたいことが」

紅葉は柄に手をかけるのも忘れて無防備に笑みをこぼしている。

その紅葉のすこし儚げな笑みに妖かしの目の色がかわったが紅葉はきづかない。衰弱しすぎである。

「きいてあげてもいいけど・・・」

そういつて間合いをつめあつというまに紅葉のまえにたつた。やはり動きはこれまでも物の怪たちとは桁外れにちがう。紅葉の体をおさえこむようにして抱きついてきたその妖かしに紅葉は落胆の色をかくせない。

（またか・・・）

「味見させてくれたらかんがえてもいいよ」

あろうことが、抵抗もせずにいる紅葉の首筋を舐めてきたのだ。しかも、尻までさわっている。紅葉のなかのなにかが豪快にきれる音がした。紅葉の目の色がかわる。

「ぶち？」

妖かしはへんな音がどこからきこえてきたのかわからず、首をかしげる。紅葉は自由な手をそつと妖かしの背中にまわす。すると妖かしの腕がだらんと落ちた。自分の意志ではもうあがらない。

「な、なにをした」

意味がわからないという感じでいった。その者から紅葉はそつとはなれる。紅葉の顔がかなりいつてしまっている。凶悪という言葉ではいささか控えめなようなきがしたりするのだが。

「地道に探すのはやめだ」

そして、無表情な顔に怒りをうかべながら妖かしの胸に手をおく。そして、どきつとするような妖艶な笑みをうかべた。本人はもちろん意識してやっているわけではない。

「な、なにをする。あつ、はなしを俺ならやくつ」

青白い顔でおびえながらいうその妖かしにかけ言葉は「もういい」という冷たいものだつた。紅葉が手をはなした瞬間、その妖かしはきえていた。後にのこつたのは灰色の塵の山だけ。それも、風にながされてちいさくなっていく。

「芽衣果、昴摩を狩りだせ」

紅菜は“探しだせ”ではなく“狩りだせ”といった。怒りがおさまらない紅菜はもうすでに昴摩にやつあたりする体勢にはいつている。言葉にもそのことがあらわれていた。

きゅう、と鳴いて芽衣果は紅菜のもとからはなれていく。上空で鼻をぴくぴくさせたかとおもうとコンと鳴いて狩りのはじまりを主につたえる。そうして、西へと飛んでいった。

「ただですむとおもうなよ」

とんでいった芽衣果を紅菜はおいかけた。芽衣果も紅菜がついてくるのを確認しながらうごいている。さて、昴摩はほんとうにいまの紅菜に会いたいであろうか。普通の者ならまずさけるであろう。

芽衣果をおつて二刻たらずでそれらしき建物のまえにきた。芽衣果は建物のなかにはいつていく。狩りだせといつてあるから狩りにいつているにきまつている。ここでまつていればつれてくるだろう。たどりついたその城は山の頂上をけずつてつくつたようなところになつてゐる。何段にもなつてゐるその城は地上ではお目にかかれないような建造物だつた。

（ここにゐるのか）

鬼族の王の家。どうじに昴摩の実家ということになる。紅菜は昴摩が夜叉つまり次の王であることをしつていた。はじめて会つたとき昴摩が正直に夜叉だと名のつたのだ。本来なら、時期王であることを名のらないものだが堂々とそうなのり、自分についた名はならなかつた。

そのことも紅菜の興味をひいた原因のひとつだつたかもしれない。興味があつたからこそそばにおいてみようとおもつたのだ。

「しかし、ここでゆつくりともいかないようだ」

自分をとりにくく不穏な動きを感じとつた紅菜はそういつてたちあがる。座つてまつてゐるつもりだったが、なかなかそうもいかない。三大妖族のひとつ、鬼族のお膝元で不審な者をほおつておくわけがないのだ。

紅菜の言葉をあいずに数え切れない妖かしや物の怪があらわれた。

妖かしは妖獣もつれている。地に四本の足をつけたものたちはガルルウと警戒音をたてている。

「地に着がついているな」

妖獣の綱を妖かしがはなした。いつせいに妖獣が紅葉にむかってきた。紅葉はそういうと平べったい円を口にふくんだ。それを歯ではさむとたかだかに音を鳴らす。ピイという音に幼獣の足がいつせいにとまる。

（獣笛もつてきといてよかったな）

紅葉はそうおもつとさらに音をならした。丸い形の中心に穴があいていて口に含んで鳴らすその笛は菜稚琉のものを拝借してきたのだ。

二回目の笛の音に妖獣がむきをかえる。そして、自分たちの主や物の怪を襲いはじめた。

獣笛は地に四本足をつけている獣を操る笛で、神獣、聖獣、妖獣、魔獣に関係なくいうことをきかすことができる。形が奇妙なせいか音を鳴らすことはむずかしいこの笛は紅葉にとって幼いころの遊び道具のひとつだ。だから、なんなくつかいこなすことができる。

一匹の魔獣のもとへかけよるとその背にとびのる。そして、その魔獣の耳に獣笛の音をきかす。紅葉ののった魔獣は一匹だけ岩を駆けあがり山の頂上をめざした。紅葉は風をうけながらその場をあとにする。

（ああ、気持ちいい）

やはり自分の足よりこういう獣に乗っていくほうが楽で風が気持ちよかった。

昴摩はいぜん部屋に閉じこめられていた。部屋のまえにはふたり見張りがたっている。あいつのいった言葉が頭からはなれなかったが、紅葉は螢蘭のそばにいる。不用意に紅葉にちかづけば螢蘭に殺されておわりだろう。

昴摩はそのほうがいいとおもった。手間がはぶける。それが昴摩

の正直な気持ち。ここからでもできないのにそんなことをか
んがえる自分がおかしかった。そばにいないと独占欲で狂いそうに
なるのに母上にしばられて動けない。そんな自分を嘲うしかなか
つた。

紅葉が自分を追いかけてくるとはおもえなかった。いつも追いか
けて必死につかまえているのは昴摩のほうだ。

急に外が騒がしくなった。なにがおきているのか、おもわずき
なるほど外はさわがしい。昴摩は体をおこして、扉をみつめる。す
るとしばらくして物音がきこえなくなった。

（なにがあつたんだ？）

不思議な目で扉をみているとバンつと音をたてて荒々しく扉がひ
らいた。そこにいたのは凶暴な牙をした狐。尻尾は六本だから九尾
の狐ではない。狐系のものの最高級は九本のものだ。九尾の狐とよ
ばれるそれらは人の形に化けることもできるゆいいつの狐の妖かし
だ。

「なんで、こんなもんが」

狐は鼻をくんくんと動かすといきなり昴摩にむかつてきた。昴摩
はあわててそれをよける。壁をつき破った狐は体勢をたてなおすと
さらに昴摩にむかつてきた。

「くっ」

おおきくひらいた口を昴摩は両手でうけとめる。困惑しながらも
冷静にその狐を観察した。

（だれかに使役されている・・・管狐か）

紅葉は生き物を使役してはいない。ではだれが主なのか。使役し
ている者を探つて気を見たが、しらないものだった。

管狐は大きくあけた口に靈気をためるとそれをはなった。昴摩は間
一髪でよける。管狐ははなった靈気とともに昴摩につつこんできた。
腹の真ん中に衝撃をうける。

「がっはッ」

管狐の攻撃は凶暴だが、殺すきはないのだろっ。急所をはずして

いる。そう、たとえるならものすごく優秀な猟犬に獲物として狙われているような気持ちになった。

「だれだ。こんなの送りこんできやがったのは」

昴摩にはまったく心あたりがない。邪気のないその力は身内の者ではないし、かといって紅葉や螢蘭ともまったくちがう。もちろん、柏や円融の可能性も示唆したがちがった。

管狐は吹き飛んだ昴摩のうえにのると昴摩の喉を前足でおさえつける。器官がふさがり昴摩は呼吸をうばわれた。普通ならおかしい行動だ。獣は首を噛みきり殺すようになっていて。

（やっぱり、こいつオレを生かしてとらえるきだ）

身丈ほどあるその管狐に昴摩はなすべをなくしかける。死んだふりをすればはなれるかとおもったが、耳がしきりに動いていることをみて無駄だときづく。こいつは昴摩の心音をきいているのだ。

（いったいだれだよ。こんな調教したやつ）

なかなかこんなふうに調教することはむずかしい。妖王も狩猟用の魔獣をもっているが、こんな微妙な心音のちがいまできいて狩りをするようなことはできないし獲物を無傷で捕らえる努力もしないだろう。しかし、こいつは傷すらつけず獲物を主のもとへつれていくつもりだ。

目がかすんで意識を失くしかけたとき、管狐の顔がちがった。すると一瞬、懐かしくも愛おしい匂いがふわりと鼻孔をくすぐった。だれがこの管狐をしむけてきたのかその香りがおしえてくれた。

それが安心をもたらしたのかそのあといつきに昴摩の意識はなくなった。管狐は獲物が動かなくなったことをたしかめると傷をつけないようにくわえ。その場をあとにした。

城のなかについた紅葉は暴れまわっていた。鬼族全体に喧嘩をうっているのだ。妖かしは力がすべてだ。力の強い者にしたがうのがここでの自然の流れ、規則だ。紅葉は鬼族に喧嘩をうり、鬼族の王つまり黒鬼妖王をひきずりだす予定だ。

今回のようにたびたび口をはさまれて昴摩をつれていかれてはかなわない。しかも、それにじょうじて自分に稽古をさせようとする輩までいるのだから紅葉にとってはたまったものではなかった。

なら、自分のほうが力がうえだと教えこませて金輪際てをだせないようにするのが賢明な判断だといえるだろう。

最初は大人しく芽衣果がもどつてくるのをまっていようとおもったのだが、したで見張りの者にかまれそれを一掃してしまったのだから、喧嘩を売ってしまったもおなじようなものである。

そこで、紅葉はかんがえを改め。全面的に喧嘩をしかけることにした。昴摩の所有権がだれにあるのかはつきりしたほうがいいとおもいなおしたというわけだ。螢蘭にも菜稚琉にもいっさい口だしさせるきはない。妖王にも手だしを許すつもりはない。

（あれの所有者は私だ）

魔獣をしつかりと足ではさみ振り落とされないように自分の体を固定する。“時雨”をかたてに紅葉はむかつてくる者、はむかう者をなぎ倒していく。もともと菜稚琉の修行は一对一の対戦よりも団体をひとりでかたづけることを中心にしている。つまり、戦いなれているのだ。

紅葉は絶好調だ。ついこないだまでびっしり稽古をつけられ、ましてや菜稚琉よりも鈍足な者たちはとまってみえるといってもいいくらいだ。

「むかつてこないなら殺しはしない」

強さをみせつけたあと紅葉はそういつて威嚇する。次々と雪崩のように攻めてきた敵はうそのように動きをとめた。

（芽衣果は昴摩をとらえたかな・・・）

紅葉は尻ごみしはじめた敵をみながらおもった。予定を変更してここまでできてしまったが、芽衣果なら大丈夫だろう。そのときだった人影から高速でなにかがつつこんできた。

ぎゃああああ。

魔獣の咆哮がきこえるまえに紅葉はそこから飛降り着地すると胴

体を守るように“時雨”を盾にした。キイと響く音とともにその者の正体がわかった。どこか雰囲気が昴摩に似ている。昴摩は父親似なのかもしれない。

「さすが夜叉様の惚れていらっしやる方だ。規格外の人ですね」

「何者だ」

刃を交えたまま会話をする二人は大勢の人にかこまれていた。紅葉は質問をしておいてそのまま大人しく返事をまつきはない。まじえた剣の力の流れをそらすと反対に傾いた相手の体を力のむきにあわせて蹴る。おもったとおりに体は横に飛んでいった。

「はははは、やっぱりおもしろい人だ。私は黒鬼妖王の一七番目の王子。鬼柳きりゅうです」

昴摩が何番目の王子かしらないが、つまりこいつは昴摩の兄か弟になるというわけか。

（殺していいのかな）

紅葉はどうしたものか判断しかねていると、鬼柳はふみこんでできた。かんがえるよりさきに体はその攻撃をよけた。そこは風圧でまっふたつになっている。刀で受けてはいけないようなきがしたのだが、正解だったようだ。

（ちっ、妖気か）

それを横目で確認しながら心のなかで舌打ちをうつ。さて、ここからが問題だ。いままでのやつらは鈍足だったおかげで相手が力をつかうまえに始末できたから体術だけで勝てたが今度はそうはいかない。紅葉の武器は体術、剣術と魄気だけだ。魄気をどれだけ駆使できるかが勝負の鍵となるわけだが。

（わるいが、もしかしたら殺すぞ。昴摩）

心のなかで断りをいれると紅葉の目の色が変わる。本気になったその瞳は獲物をとらえるとまとう雰囲気までかわってしまふ。ぞくりとするほどの紅葉の気配にまわりは凍りつく。美しすぎる容貌のせいで真剣な顔になると相手には畏怖しかつたえない。

紅葉は時雨をかまえなおしふみこもうとしたとき、鬼柳は刀を捨

てた。両手をうえにあげて紅葉をみたままいった。

「やめましよう。私は命がおいしいですからね」

そういつて笑いかけてくる鬼柳を紅葉は疑惑の目でみつめる。なにをかんがえているのかわからなかった。しばらく、睨むように観察して紅葉は時雨を鞘におさめた。時雨も紅葉のその判断を拒否することはしない。霊刀や妖刀は主の危機になることに敏感だ。

「で、私をどうするつもりだ？」

外面用の紅葉のほほ笑みに鬼柳は顔を真っ赤にそめた。さきほどとはちがった意味の悪寒が体をはしった。夜叉がすべてを捨ててでも欲しいとおもった気持ちがわかった。

鬼柳は紅葉の手をとる。紅葉の手は驚くほど柔らかくすべすべでそれでいてすこししつとりと肌にすいついてくるようななんともいえない触感だった。そのことにも鬼柳はおどろいた。この手で刃をふりまわしたり人を殴ったりしているとはとても信じがたい。

「私の客人として丁重にあつかわせてもらいますよ」

紅葉は鬼柳の頬にそつと手をあてるとさらに妖艶にほほ笑む。そして、鬼柳にいった。すこし声も艶をふくんでいる。鬼柳はさらに真っ赤な顔になり惚けたように紅葉の瞳をみつめかえしている。

「信じていいんだな？」

「ええ、もちろんです」

最近、菜稚琉や螢蘭にやられてすっかり調子が狂っていたが、ここにきてやっと紅葉は本領発揮という感じだ。

「道をあける。私の客人に無礼をはたらくことは許さない」

鬼柳の言葉を合図にしたように道はひらき、鬼柳は紅葉を保護するように腰に手をまわしてきた。その態度に紅葉はおもわず昇摩とくらべてしまう。

（お、こいつの方がなれている感じだな）

どこかしら大人の男の余裕をかんじるその態度に紅葉は大人しくしたがった。まわりに睨みをきかせて“オレの者だ、手をだすな”という昇摩の態度とはまったくちがう。紅葉はいちいち注意するの

もめんどうなので好きにさせているが。

黒鬼妖王はそのころ部下から報告をうけていた。紅葉がこの城にやってきていることそして、魔獣をあやつり暴れていることに恐怖を覚えていた。もちろん、夜叉が連れ去られたという報告もはいつているが、優先順位はやはり前者である。

「無傷でとらえよ。かすり傷ひとつ、けつしてつけてはならん」

命じられた部下たちはおもいのほか深刻な王の言葉におどろきあわてて部屋をでていった。黒鬼妖王は王座の椅子からたちあがり、身をひるがえして家臣をのこして部屋をあとにした。

「妖王様いかほどにいたしましょう？」

事情をよくしる家臣のひとりが心配げに黒鬼妖王にきいてくる。

黒鬼妖王は奥歯をかみしめた。自体は非常にやばいことになっている。

あの方との約束をやぶってしまったているこの状況は非常にやばかった。自分の命だけのはなしではない。あの方が本気で怒れば鬼族の一つや二つ滅亡することなどたやすいことだ。

「使いをやれ、こちらの不手際があったと詫びをさきにいれるんだ」

「はい、急いで使いにいきます」

家臣自ら使いにいかねばならないほどの人だった。家臣は慌てて走っていく、妖王をのこし走り去るような無礼を働いているが、そんなことをいつている場合でない。

桜雅族があの方々の保護区にあるとしていながらるはずみな欲に負けて殲滅してしまったことがあった。祖父母の代にはなしただけできていたせいもありあまり信じてなかったことも原因のひとつだ。

討伐にたった者たちは螢蘭の手によって惨たらしく殺されている。黒鬼妖王の自分でさえ手も足もせず、虫の息になってしまった。そこを助けてくれたのは菜稚琉であった。いや、助けられたのではない。利用価値があるからいかされたのだ。

螢蘭の正体は詳しくはわかっていない。しかし、三大妖王の者なら

だれもがこの名をしっている。妖王であっても魔界で螢蘭にはむかうことはできない。圧倒的な力を持ち、魔界のすべてを支配する者だと祖父、父からきいている。

（くそ、急いで保護し螢蘭様のもとへおわたししなくては・・・）
螢蘭は紅葉が夜叉と会うことちかづくことさえ許しはしないといった。もし、やぶったときはどうなるかわかっているなともいったのだ。あの方の意向をやぶればそのさきにまっているものは惨たらしい死しかない。

家臣がばたばたと断りもなく部屋にはいつてきた。そして、恐怖に慄いた顔で床にへばりつくように頭をさげると報告をはじめた。

「紅葉様、みつかりました。無傷であらせられます」

その報告に黒鬼妖王はすこしでもほつと安心する。しかし、まだこれから勝負だ。すばやく菜稚琉、螢蘭、ふたりのもとへもどさなければならぬ。

「どこにいる。私じきじきに紅葉様をおつれする」

「そ、それが、鬼柳様のお部屋においかれにされました」

あまりにも動転しているのだろう家臣の言葉がへんだ。しかし、黒鬼妖王はそんなことにならなかった。不用意に自室へいれてしまった息子への苛立ちが先立つ。それだけではない。

「あの馬鹿者たちめッ」

そういつて黒鬼妖王は鬼柳のもとへと急いだ。王の苛立つ雰囲気と自分たちのおかれた立場の危うさに家臣たちは祈るように王の後ろ姿をみおくった。

夜叉が人間の女に現をぬかしていることがただだんに問題なように装ってはいるが本当のところは紅葉に手をだしてしまっているところがいちばんの問題なのだ。

魔界の門のまえ。柏はそわそわと落ち着かないでいた。それは表情だけではなく体までそわそわと動いてしまっている。菜稚琉や円融がどれだけいっても心配で心配でしかたないといったようすだっ

た。

「柏、大丈夫ですよ。蒼にも螢蘭にもいつてもらってるんですから」
六度目の菜稚琉の言葉。しかし、柏の気持ちはおちつくことはない。

「すこし、厠にいつてきますね」

柏や円融たちにそういつてその場をあとにした。かなりはなれた岩陰のところまでいくと菜稚琉は声をかけた。

「黒鬼妖王の使いですね」

その言葉に岩陰から姿をあらわしたのは黒鬼妖王に使いをいいわたされた家臣だ。ひざをつき菜稚琉の顔をみないようにして家臣は「はい」といつて黒鬼妖王の言葉をつたえる。

「こちらに不手際があり、御方の身をあずかっております。速やかにこちらにおもどいたしますので、どうかこのたびのこと穩便に収めてもらいたく、参上しました」

菜稚琉は黒鬼妖王が自分になにを期待しているのかわかった。つまり、暴走した螢蘭をとめてほしいということだ。

「穩便にですか？いいでしょう。そのかわり……」

菜稚琉は交換条件を家臣につげた。内容を説明すると家臣は困惑した顔をしたが承諾しないわけにはいかない。しかし、妖王になにもいわず承諾することはできなかった。

「でわ、妖王におつたえしておきます」

それだけいつと家臣はきえていつた。菜稚琉は自分の背後に声をかけた。

「きいていましたか？」

「いいえ。残念ながらきこえませんでした」

そういつてでてきたのは円融だ。円融は残念そうな顔もせずいつた。いや、表情をよまれないようにしているのだ。

「なにか用があつたから追つてきたのでしょうか？」

「いいえ、遅かつたのでなにかあつたのかと心配になつてみにきただけです」

いけしやあしやあと円融はのべる。いっさいいままでそこにいた男のことをきこうとはしない。菜稚琉はそんな円融にこれまたなにをかんがえているかわからない顔でこたえる。

「心配をかけましたね。私は用ができましたから、あなたは柏についてあげてください」

菜稚琉はそういうと管狐をだし、おおきくなったその背中にのつてそこをあとにした。円融は菜稚琉の姿をみおくりながらやはりこちらにも本心がわからないような顔をして柏のもとへともどった。

（まったく、あの子は昔からあだから困ります）

円融の行動と表情がよめいないあの顔をおもいだしながら菜稚琉はおもった。そして、連絡用の管狐をとりだすと螢蘭に連絡をとる。

「螢蘭、蒼とは合流できましたか」

管狐は螢蘭の声で返事をかえしてきた。

「ええ、合流したわ。なにかあったの？」

「使者がきましたよ。やはりあのとき殺さなくて正解でしたね」

十何年まえのことをいう菜稚琉に螢蘭は「そうね」とかえすしかなかった。螢蘭としてはいまからでも殺しにいききたいのだが、菜稚琉は「殺すな」といつてくる。そうなるかと殺せないのでも今回も見逃すことにする。

「それとあの坊やを保管場所に使おうとおもっているのだけど・・・」

「それは相談じゃないでしょう。決定よね」

菜稚琉の言葉に螢蘭はあきらめたようにいった。そんな螢蘭に満足そうにほほ笑むと「そうよ」といつてはなしをつづける。

「あの坊やが適役でしょう。あなたもそうおもうからあの坊やから血をとり、術をかけたのでしょうか？」

菜稚琉のすべておみとおしですよといういかたに観念したように螢蘭はいった。

「で、これからどう動くつもり？ 私はこのまま手筈どおり動いていいんでしょう？」

「ええ、それでお願いします。ああ、それと火種役を殺してはいけませんよ。彼にはまだまだ働いてもらいなすからね」

「はいはい、わかりましたよ……こうなるのも予定どおり？」
螢蘭の言葉に菜稚琉はくすつとほほ笑むと楽しそうにいった。

「なにごとも臨機応変ですよ」

「はいはい、そうですか。こっちも臨機応変に対応するわ」

そういつて螢蘭は管狐をしまつてしまつたようだ。菜稚琉も管狐を髪飾りにしまつとにつこりわらう。

「いそいで帰りますよ」

管狐にそういつと菜稚琉は昔、紅葉がとりこまれた桜のもとへといそいだ。菜稚琉の衣のなかには螢蘭からあずかつた紅葉の血の結晶がある。昴摩の体からとりのぞかれたその血の結晶は彼には邪魔なものだ。

紅葉はとおされた部屋でくつろいでいた。目のまえには人間界の食べ物ならなられている。しかし、食べていいものか悩んでいた。こついう場合、食べていけないというのが決まりなのだが。

「遠慮しないでください……といつてもそういうわけではないでしょうが」

紅葉はそれに返事をかえさずに長椅子によこになる。衣の裾から細い紅葉の足がのぞいた。そこには真っ赤な血のかたまりがあつた。鬼柳は目がはなせなくなる。血の赤と白い肌の対比は妖かしでなくとも魅力的だ。

「怪我、なさているんですね」

その言葉にはじめて自分が怪我をしていることにきづいた。脹脛のところの線をひいたようなかすり傷がある。

「たいしたことない」

紅葉はそうこたえる。しかし、鬼柳は紅葉のそばに腰をおろして傷のある足にふれた。ふれる手がやはりこなれている。はじめて私にふれた昴摩の手はふるえていて純粹だとおもつたのだ。なんだか

遠い昔のようだ。

「あなたを奪ってもいいですか？」

鬼柳が紅葉の瞳をみつめていつてきた。紅葉は表情を崩すことなく鬼柳の瞳をみつめかえす。男にも女にも口説かれ慣れている紅葉は冷静そのものだった。

（口説き方もしっているんだな）

紅葉は鬼柳に対しての評価を心のなかでする。しかし、本気でないことはわかっている。昴摩にたいしての敵対心を必死に隠そうとしているのを紅葉はみぬいていた。

「くす、本気ならかんがえる余地もあるがな」

紅葉のその言葉に意外そうな顔をしておどろいている鬼柳に紅葉はさらに言葉をかけようと口をひらこうとしたら、とつぜん部屋の扉がひらいた。二人がみるとその人物は真っ青な顔をしてかたまっている。

「黒鬼妖王」

鬼柳の言葉に紅葉はかたまったままの男をよく観察する。

（やっぱり、よく似てる）

黒髪に金の目の黒鬼妖王は渋みがあるいい男、できる男の顔をしていた。しかし、顔立ちの基本は昴摩とおなじようにおもえる。そして、紅葉はすこし夢をはせた。うまく成長すればこんな感じになるのか、と想像すれちよつと楽しい。まあ、五〇年そこそこしかいきられない人間の身である紅葉にはみることが叶わないだろうが。

「な、な、なにをしている！」

黒鬼妖王の怒鳴り声にちかい悲鳴に紅葉は抑揚のない平坦な声でこたえた。

「口説かれていた」

その言葉に黒鬼妖王はさらに真っ青になってたおれてしまった。紅葉のそばにいた鬼柳はあわてて黒鬼妖王のもとへ駆けより人をよんだ。

寢床に運ばれた黒鬼妖王のもとへ家臣がちかよってきた。使いに

だした家臣だった。家臣は妖王の耳元へ報告をいれる。その報告をきいた黒鬼妖王は心労で死んでしまいそうな顔になる。

蒼は螢蘭について鬼族の城のなかに潜伏していた。螢蘭にふれると殺されるので距離をとってはいるがかならずそばについていた。城のなかにはばたきとしていて、乱れている。さっきほど下っ端から女が暴れているときいたが、きっと紅葉だろう。

紅葉なら黒鬼妖王に喧嘩を売ったとしてもなんら不思議なことではない。いや、紅葉なら間違いなくやる。天上天下優雅独尊を地で見ている紅葉のことだ歯むかう者はつぶしにかかるにきまっている。

「おい、あつちに行ったぞ。夜叉様をお助けしろ」

「武器だ。もつと武器をもつてこい」

「人もたらん。応援はまだなのか」

あちこちできこえる言葉に蒼は大変そうだなと同情の念まで浮かぶ。菜稚琉と螢蘭の会話から推測すると二人は、というよりも菜稚琉は鬼族を利用してなにかしようとしている。自分に預けられたものもきになる。

「夜叉様のほうは六尾の狐だ。魔獣が女のほうでもうそれはいい」
もれきこえてくるその言葉に蒼は紅葉のほうはなんらかの解決をえたのかとおもった。紅葉がとらえられたとかんがえるほうが自然だ。

「螢蘭様、いそいだほうが」

「うつさい。だまってついできたらいいのよ。あんたは」

蒼は紅葉の身をあんじていったのだが、螢蘭につめたくあしらわれてしまう。その螢蘭の言葉に蒼は震える声で「はい」と返事をかえすだけで精一杯だった。

（もう、俺やだ）

螢蘭のうしろ姿をみながらおもったが、逃げることは許されない。菜稚琉にたのまれたものはどうやら螢蘭にはあつかえないものらしい。

い。それに菜稚琉が用意したものだ紅葉の役に立つものにきまっている。

（そういえば、紅葉の飼い魔って夜叉だったよな）

盛智のあつめた情報をおもいだして蒼はかすかにきこえてくる会話を頭をはたらかせる。鬼族の時期王が紅葉の相手だときいたときはおどろいた。妖かしが相手だというだけでもきにいらぬのにどうして鬼族なのだ。

螢蘭は廊下の角をまがった。それについていこうと走りだそうとしたとき、とつぜん壁が破裂した。穴があいたそこには大きな六尾の狐がいる。その口には緋色の髪をした鬼がぐったりとしていた。整った綺麗な顔は妖かし独特のものだろう。

（あ、こいつ）

六尾の狐は尻尾をうごかし、耳をぴくぴくさせると首をふってあたりをうかがうような仕草をみせる。それから、一点をみつめるように大人しくなった。

（なんだ？）

不思議におもって蒼がみていると廊下をまがって姿をけした螢蘭がもどってきて、蒼の頭を拳骨で殴った。

「くううう」

蒼は殴られた頭をおさえるとしゃがみこんだまま螢蘭をみつめる。すると苛々というつぶやきで螢蘭は手を拭きながらいった。

「はやくきなさい。あんまりつかいものにならないと殺すわよ、あつさり」

「で、でも、あれ」

蒼はそういつて六尾の狐を指さした。螢蘭はさされた指先をみるとなんでもないようにいった。

「あんなのどうでもいい。いそぐわよ」

そういつて頭をおさえたままの蒼をのこしてさきにいつてしまった。蒼はきにしないように背をむけると螢蘭をおいかけた。これ以上、手間をかけさえるとほんとうに殺されてしまつかもしれない。

5 緊縛

つねに心に抱いていた。私たちの懷に抱かれたあの子をみながら、それほどの罪をおかしてしまったのかと。

父母の愛を証明するようにうまれてきた子は同時に父母の罪を証明するよにうまれてきた。友は打算的なかんがえがまったくなく信じられないほど純粹で汚れがなかった。そんな友を陥れた男の子供を愛せるとはおもってもいなかった。

しかし、うまれてきた赤子は愛らしく利発で愛さずにはいらなかった。そして、なにより子供は友にそっくりだった。そんな子供につらくあたるようなことはできなかった。

その子を腕に抱きその子に愛をそそげばそそぐほど、それが罪だったのかわからなくなる。たとえそれが許されない者同士であってもそれほど罪であったのか。

愛しているいまでも、いやときがたつほどに愛はふかまっていた。悲しませたくない、困難なものをとりのぞいて、真綿にくるむように大切に大切に守ってあげたいとおもいほど愛している。

「この桜もだいぶんとたちましたね」

狂い咲いているこの桜をみながら菜稚琉はいった。これは螢蘭が遠い昔に紅葉がはじめて歩いた記念だといって植えたものだ。この屋敷にあるものはすべて紅葉の記念だといって螢蘭がつくったり植えたりしたものがほとんどだ。

「そろそろですね」

菜稚琉はそういうと空をみあげた。しばらくすると空から六尾の管狐が姿をあらわした。人の二倍はあるその管狐は地に足をつけるとくわえていた者をおろす。そして、小さくなると主である菜稚琉に頬をすりよせる。この子の癖だった。

「紅葉のゆうこともきちんときいてくれたのですね」

ねぎらうように菜稚琉は管狐にいつて髪飾りにもどした。この子

の寢床はいま紅葉がもっているものでゆっくり休ませてやることはできない。

「さて、どうしましょうか？」

いい感じに眠っている（気絶しているのだが）鬼の坊やをみて菜稚琉はいった。螢蘭からいつ連絡がくるかわからないから、いそいだほうがいいのだけれど。

菜稚琉は池に手をむけるとふりあげた。水は菜稚琉の手に反応するように水柱をつくり菜稚琉が手をさがると同時に鬼の坊やに勢いよくふりそそいでいった。その水流はものすごく、あたり一面をのみこんでいってしまう。桜もおなじように被害を受けたが、とつさに飛びたった菜稚琉は被害なしだ。

（やっぱり、たまに力をつかうとろくなことはありませんね）

菜稚琉が螢蘭や紅葉のように力をあまりつかいたがらないのは加減がまったくといっていいほどできないから。このまま力にたよった戦い方をすればよいいな死体がふえてしまう。それを防ぐための苦肉の策が体術、剣術、弓矢だった。

水の勢いにまけて流されていく鬼の坊やをみつけて菜稚琉は「あらあら」とのんきな声でいうと髪飾りから管狐をだした。空中でおきくなった管狐の背中にとると鬼の坊やの腕をつかんでひきあげた。

鬼の坊やはげほげほと水を吐きながらせきこんでいる。それをみて菜稚琉は「きがつきましたか」とおだやかにいった。なぜこんな目にあっているのかわからない昴摩はみたこともないその顔を苦しそうな目でみつめていった。

「ここは？オレどうして・・・」

「溺れていたので助けました」

首謀者の菜稚琉は自分にはまったく被がないというようにいい。そして、水がひいた桜のもとへおりたつた。それから自己紹介をはじめ。

桜は水にのみこまれたというのに花を散らすこともなく咲き誇っ

たままだ。それでも、桜からはぽたぽたと雫がおちる。

「私は紅葉の保護者です。菜稚琉ともうします」

昴摩はどう判断していいのかわからないという声で「保護者」とつぶやいた。そんな昴摩に菜稚琉はさらにわかりやすくいった。

「螢蘭とおなじですよ」

その言葉に昴摩はぎよつとすると急に背筋をのばした。そして、あらたまったような声をだしていった。

「オレになんのですか？」

紅葉がいればおもしろい顔をしてみているに違いないが残念なことにここに紅葉はいない。菜稚琉は親しみやすい笑みをうかべると親愛の情をこめた声で昴摩にいった。

「そうかたくならないで。螢蘭が酷いことをしてしまったのでしょう？あの人はどうもすぐに暴力にうったえる癖があるみたいで」

そして、すこしこまった顔をして「困っているのよ」とほほ笑んだ。昴摩はそんな菜稚琉に「はあ」とあいまいな笑みをかえす。“癖”といった菜稚琉もそうとうなものだが、昴摩はきづかない。

「あなた、紅葉のそばにいたいと本気でおもっていますか？」

不意に真摯な声になった菜稚琉はそういつて昴摩にといかける。

昴摩はきゆうに雰囲気がかわった場の空気に緊張した面持ちになる。この場を支配しているのは菜稚琉だった。

昴摩はしずかに目蓋をとじそこへ紅葉の姿をおもいうかべた。髪の毛の艶、肌の透明さ、唇の形や色、睫毛の長さや曲がりかたまで鮮明に紅葉の姿をおもいだすことができる。

母親の影に支配されて動くこともできず、それでもおもいつづけてしまうほど愛おしい人。それが、紅葉だった。紅葉の支配がなくなったことがこんなにも心を弱くする。紅葉に使役されたままであったなら、母親をふりきることでもできたかもしれない。

昴摩は金色の瞳を菜稚琉にむけるとしずかに誓うように願うようにうなずいた。

（まあ、きれいな目をするのね）

菜稚琉は昴摩を値踏みしていたのだ。家から飛びだすこともできず、ましてや母親の言葉にしばらく身動きがとれなかったこの鬼の坊やにさほどの期待はなかった。紅葉がおもうだけの男なのかともおもっていたくらいだ。

「あなたは紅葉につかえたいとおもっているんですね」

菜稚琉の言葉に昴摩ははつきりとした声でこたえる。しずかにおもく声はおどろくほど自分のなかに響いた。

「はい」

菜稚琉は昴摩の魂魄の素質を冷静にみる。螢蘭がかけた術はあくまで補佐的なもので耐えられるか耐えられないかは昴摩自身の問題になる。菜稚琉は螢蘭から預かってきた紅葉の血の結晶をとりだしてみせた。昴摩の体からとりだされた永久の使役の証。

「これをふたたび体にいれれば紅葉の使役をえることができます。

しかし、これにすぎるようではあなたが紅葉のそばにいるにあたいする男だとは認めません」

昴摩は菜稚琉のその言葉に自然と喉がなる。緊張のせいか喉が渴いてかすれた声がでた。

「なにをすれば認めてもらえますか？」

紅葉を守り育ててきたのがこの二人だということは充分わかつている。紅葉からの言葉も螢蘭が紅葉にむける瞳や態度。そして、いま目のまえにいる菜稚琉さえも紅葉のことを深く愛していることがわかる。

「あなたはあなたのまま紅葉を助けることができたなら認めてあげます。妖かしのままあなたが紅葉のそばにいれるのなら認めてあげます」

そのおかしな言葉に昴摩は困惑の瞳をむける。紅葉は崇高な魂をもっている。それゆえに昴摩を拒絶してそばにいつづけることがかなわないのだ。不浄なものを浄化しようと排除しようと術がかけられているから。力の強い者ならそれでも紅葉を食おうとすることができた。しかし、昴摩は紅葉を食いつくしたいわけではない。そば

にいたいのだ。

「それは無理です」

昴摩は菜稚琉にいった。菜稚琉は昴摩がなにをかんがえているのかわかる。通常ならそうかんがえてもしかないが、菜稚琉は全貌を教えてやるきはない。だって、可愛い紅菜を搔つ攫つていつてしまふであろう男に親切にしてやれるほど心はひろくないのだ。

「では、あきらめなさい」

意地悪しているというのは充分わかっている。でも、意地悪でもしていないと悔しくてしかたないのだ。はじめて紅菜が自分でえらんだ相手だから。

「あなたからそれを奪つてでもオレは紅菜のもとへかえる」

そういつて、昴摩は戦闘的な目をむけた。菜稚琉はふと笑つと昴摩の姿に昴の姿をおもいだす。あのときまで自分たちはどんなことをしてでもとめるつもりでいた。柚羅乃の怒りがかつても、哀しみに暮れる姿をみることになつても、どんなに憎まれてもそれでもいいとおもつたのだ。

そのおもいを打ち碎いたのは昴の姿だった。苦しみながら傷つきながらそれでも二人のおもいをつらぬこうと守ろうとした昴の姿に二人は迷いを感じた。その迷いはおおきな波紋となつてひろがり体の力をうばった。

「この桜は紅菜がはじめて歩いたときに植えたものです。この桜にはあの子の魂の一部が封じこめられている」

菜稚琉は極上の秘密をかたるようにはなしはじめ。昴摩はおとなしくきいていた。

「あの子の魂はいまの体では対応しきれない。だから、私たちはこうして紅菜の魂を別につつして保存しているのです。あなたもこの桜のように紅菜の魂をうけいれてくれますか？」

菜稚琉の言葉に目をまるくすると昴摩は桜をみる。はじめて目にしたときからなにかあるとはおもつたが、まさかそんな秘密があるとはおもわなかった。

「どんなに危険でもオレは紅葉のそばにいたい」

昴摩の言葉にやはりあの男がかさなる。あの男もおなじようなことをいつていた。

「はやくいきなさい。紅葉は黒鬼妖王のもとにいます。紅葉をたすけてあげてください」

黒鬼妖王のもとに紅葉がいることにおどろくとあわててとびだしていった。いくら紅葉といっても黒鬼妖王に勝てるわけがない。もしかしたら死んでしまうかもしれない。妖王なら紅葉を殺して二度と転生できないようにその魂を食べてしまうにきまっている。

「ねえ、柚羅乃。あなたはこれでいいとおもいますか？」

菜稚琉は桜に身をあずけながらいった。まだすこし桜が咲くにははやいが、豪勢に咲き誇る桜は菜稚琉に花びらをふりそそいでいる。空は天高くはれわたり春の風がおだやかに菜稚琉の髪をゆらしている。陽射しは頬をあたたかくすべっていく。

紅葉はひとりぽつんと鬼柳の部屋にのこされていた。黒鬼妖王は気絶してしまいそのまま皆に運ばれてどこかへいつてしまった。鬼柳も「すこしまつていてください」とひとことのこしてきえてしまったのだ。

暇をもてあましているという感じた。いくらなんでも眠っている黒鬼妖王に襲いかかるわけもいかないし、かといってどこにいくわけでもない。

（どうしようかな。芽衣果、もう昴摩つかまえたとおもうんだけど・
・やっぱりだめだったかな）

芽衣果がゆうことをきいてくれたのははじめだけだったということだろう。ほんらいならもうとくに紅葉のもとに昴摩をつれてきてもいいはずだが、こないということは命令を放棄したということだろう。

衣から芽衣果の住処をとりだす。竹の筒であるそれに芽衣果をもどす方法すら紅葉にはわからなかった。菜稚琉は筒をこん、こん、

と爪でならすのだが紅葉がおなじことをしても芽衣果はもどつてはこなかった。

お腹もすいているし、寝不足だし、なにより退屈だった。眠くてもこんなところでは眠れない。安心して眠れるところでない紅葉は安眠できない体質だった。ということのをのぞいても招かれざる客である自分がここで馬鹿みたいに熟睡できるわけがないのだが。

（昴摩、おまえがはやくこないからわるいんだぞ）

紅葉は拗ねた気持ちで心のなかでつぶやくと仰向きになると額に腕をのせた。そして、おおきく溜息をつく。ほんらいなら魔界旅行といきたいところだったがおもったよりも事態はこみいつているようだ。

かた。扉がひらく音がした。それとともに鼻腔に化粧の匂いと焚きつけた香の匂いがする。そして、絹がすれる音も。男ではない女がはいってきたのだ。簪の無機質な音もした。

「いまは女に口説かれるおぼえはないが」

「なっ」

「無礼者っ」

紅葉はそういつてはいってきた女を歓迎する。綺麗な人だけど冷たい感じのする人だった。ひきつれた従者の二人が紅葉の言葉に目をつりあげなにかいおうとしたが片腕でそれを制する。

「おまえのような小娘どこがいいのか」

表情とおなじ感情のない冷たい声だった。小娘よばわりされた紅葉は逆に楽しそうにわらった。その言葉にこの女性が何者なのかわかったのだ。

「さあ、私も一度きいてみたいとおもっているところですよ。お母様」

紅葉の“お母様”という言葉に眉がぴくつと動く。そのことに紅葉は満足した。そして、挑発するように自分がやった名前で昴摩のことをよんだ。

「昴摩のお母様にお会いできるなんて一生ないとおもっていました

から、お会いできて光栄です」

紅葉は注意深く彼女をみた。緋色の目は冷たいまま怒りを潜ましている。妖気はそんなに強くない。昴摩の妖気が強かったので母親もてつきりそれなりのものだとおもっていた。

（昴摩は身分の低い母親から生まれたのか・・・）

昴摩が自分のことをあまりはなしたがらないから、紅葉はほとんど昴摩のことをしらない。正直にいうと紅葉自身、昴摩の過去にあまり興味がなかった。昴摩でしっていることは“夜叉”であること、紅葉の一族を滅ぼした一族であることくらいだった。それ以外しる必要はなかったからだ。

「口をつつしみなさい。夜叉は昴摩などというわけのわからない名ではありません」

夜叉を産んでいつきに奥方の頂点にたった者の維持が言葉をつむぐ声は以外にも冷静なものだ。紅葉は夜叉とよんだことにひっかかりを感じる。そうよぶのが礼節的にもあっているのだが。

「夜叉？それは名前か？なぜ昴摩の名をよばない」

紅葉の言葉に昴摩の母親の瞳がきつく鋭いものになった。そして、おどろくようなことをいった。

「夜叉に名などありません」

楽しそうな余裕を浮かべた紅葉の表情が険しいものになる。きつい表情はおなじ美人でも紅葉のほうがうえだった。しかし、負けないうものをもっているのはたしかだ。

「名がない・・・そう、じゃあ。昴摩は私のものであつて、あなたのものではない」

「あなたのような滅びた一族が使役できるようなものではありません」

ふん、と紅葉は馬鹿にしたように笑うとたちあがる。できることなら昴摩の母親を傷つけるようなことはしたくない。紅葉は時雨に手をかけようとはしない。

「名もあたえないあなたこそ、昴摩のなにがわかっているのか。疑

問におもつぞ」

紅葉は名をやったときのことをおもいだす。あのときはどうしてそんなに新しい名をよろこんだのかわからなかったが、いまわかった。あのあと何度も何度も名をよんでくれとせがんできた昴摩の心のなかがわかる。

「剣をとりなさい。あなたさえ消えれば夜叉は目をさますでしょう」

昴摩の母親の言葉に従者の一人が剣をわたした。それをみて紅葉はしかたなく左手で時雨をつかむ。鞘をぬくと時雨の鍛えられた刃がしずかな、冷たい光をはなった。そこにうつる紅葉の瞳も冷たい光をやどしていた。紅葉はきづいていないが戦えることに体が高揚感を抱きはじめているのだ。

「お母様、私は甘くはないですよ」

紅葉の言葉を合図に切りかかってきた。紅葉は片手でうけとめるとそのまま鐔まで刀を滑らす。

「くっ」

「私の利き手は右なんです」

そういうとあいているほうの右手で昴摩の母親の手を手套ではらいおとす。刀が床におちるそのまま攻撃せず、紅葉はわざと間合いをとった。

「まだしますか？」

余裕の言葉。昴摩の母親だから手加減しているというよりも獲物を追いつめる快樂がないことへの失望感にちかいことにきづいていない。

「その相手、私が引き継ごう」

渋い声がつぜん二人のあいだにわってはいった。黒鬼妖王だつ

た。紅葉はすこし歳のいった渋い顔をみつめる。そして、黒鬼妖王にむきなおるといった。

「いいな。そっちのほうが楽しそうだ」

紅葉はそういうと戦闘的な瞳を輝かせる。獰猛な獣がみせる戦慄。時雨を利き手ににぎりなおすと腰をすえてかまえる。紅葉の興味は

完全に黒鬼妖王にうつってしまっている。上物の獲物をまえに体によるこんでいるのを感じていた。

「いい目をするな。獰猛な獣の目だ」

黒鬼妖王の言葉に不敵に笑うと紅葉は着ている衣を脱ぎ捨てた。肩も腹も足すら露出した稽古用の服は戦いやすさを追求したものだ。衣が床におちきるまえに紅葉はしかける。黒鬼妖王は瞬時に刃を半分ぬきとると時雨をうけとめた。

火花が散り、刃の甲高い音がなる。腕力ではやはり紅葉のほうがおとる。黒鬼妖王は力技でそのまま紅葉を弾き飛ばした。紅葉は身をひるがえし着地すると時雨を左でにぎる。紅葉の武器は身軽さだ。つつこむように飛びつき空中で体勢をかえると黒鬼妖王の肩に手をついた。もちろん振りおろされた刃は左で防御している。そのまま落下するように体をおとして、刀をひるがえし背中をきろうとした。しかし、妖気によって弾き飛ばされる。

瞬時に体勢をたてなおすよりもそのまま衝撃をうけたほうがいいと判断すると壁に背中からぶつかる。そして、いちはやくたちあがると黒鬼妖王に切りかかった。

（妖気はやっかいだな）

言葉とはちがい紅葉の胸のなかは興奮と快樂がうずまいていた。戦えることへの快樂と興奮。紅葉は自分の変化にきづきはじめていた。

紅葉が魔界にきて五日目になろうとしていた。魔界はなんらかの影響をあたえるのかもしれない。

螢蘭と蒼は観客にまじって紅葉と黒鬼妖王の戦いをみていた。黒鬼妖王は螢蘭にきづいているが紅葉はまったくきづいていない。というより、観客にまったく興味がないのだろう。いま、紅葉の神経は黒鬼妖王にそそがれている。

紅葉は黒鬼妖王の横腹をねらってけりあげる。しかし、足は黒鬼妖王の腕に防御されてきまらない。黒鬼妖王の拳が紅葉の腹を殴る。

紅葉は体が吹き飛ばされてしまうまえに左手で黒気妖王の腕をとらえた。吹き飛ばされなかったせいで紅葉の体にはもろに衝撃がくわわる。

「くっ、かはッ」

黒鬼妖王の腕に紅葉のはいた血がおちる。

（なにをかんがえている）

黒鬼妖王は紅葉の行動に疑問を感じながら紅葉をみさげた。すると顔をあげた紅葉と目があう。そのまま紅葉は自分の唇についた血を舐めとった。その姿に黒鬼妖王は眉をしかめる。醜いものにたいしてではなく、恐怖をあらわすものにたいしての己が恐怖をかくすため。

「あれが紅葉の戦い・・・？」

蒼は紅葉の姿に戸惑いの声をあげる。いつもの紅葉の戦い方ではない。冷静で洗礼された無駄のない動きをする紅葉の戦い方がいまはない。どちらかというと血が流れることを楽しみ、獰猛で荒々しい動きをして、敵を傷つけることを楽しむような戦い方だった。

「とめなくていいんですか。紅葉に戦いをやめさせないと」

蒼は紅葉が殺られるということよりも紅葉があんな戦い方をしていることに不安をかんじた。しかし、紅葉をとめられるのは自分じゃない。ここでおなじように観戦している螢蘭しかとめられる者はなかった。

「なんで？これからよ。紅葉はこれからが本番なんだから」

螢蘭はそういうと傍観にてっすることに専念した。紅葉の体はどこもかしこも痣と傷だらけで、白い滑らかな肌に傷ができることで紅葉のなかに眠っていたものがあらわになっていつているようだ。白く純粋な肌をやぶって獰猛な獣が姿をあらわそうとしている。そんな螢蘭を批判的な目でみると紅葉の戦いにわってはいろうつとした。しかし、それを螢蘭にとめられる。腕をねじってふせさせると螢蘭は蒼の髪をつかんでどすのきいた声で静かにいう。

「だまってみろ。紅葉がかわる瞬間を」

紅葉は黒鬼妖王の腕に二秒ふれる。そして、そのままにもしないままはなれた。黒鬼妖王は糸がきれた人形のようにひれふす。紅葉はすかさず踵おとしを頭めがけていれた。鈍い音が部屋にひびく。紅葉の耳にはそれが心地よくきこえていた。

「これは・・・魄気・・・」

黒鬼妖王が魄気をしていたことに紅葉は感心した。いろんな術を体得していた紅葉ですら言葉もしなかった術だ。

「ふーん、しってるんだ。でも、解けないでしょう？・・・たちなよ。」

そういつて紅葉は黒鬼妖王にふれる。紅葉はまだ、相手に二秒以上ふれていないとこの術をかけることはできない。二秒、自分よりも格上の者と戦うときにはあまりにもながすぎる時間。

黒鬼妖王は紅葉に操られるようにたつ。棒のようにつつたたままだった。紅葉は黒鬼妖王の顔にそつとふれると頭から流れている血に指を滑らす。そして、頬に流れたその血を舐めた。口には生臭い血の味がひろがる。

「身分が高いからかな？なかなかいい味してる」

そういつて、突きの稽古のように黒鬼妖王を殴りつける。血が顔や体にふり落ちてもきにもとめず殴りつづけた。普段の紅葉ならそんなことは絶対にしない。

無傷だった黒鬼妖王に傷がふえていく。声を殺すせいでこもった悲鳴しかきこえなかった。そのことに紅葉は不満を覚え、手をとめると黒鬼妖王にいった。子供が無邪気をお願いをするような表情なのに非情さと残酷な声があたりを支配する。

「ねえ、悲鳴ぐらいあげてよ。楽しくないじゃない」

（なんなんだ）

黒鬼妖王は困惑していた。戦いはじめたときはまったくの別人だった。青い首輪に力を封じこまれていることはわかっていた。だから、手加減をして戦っていたのだ。でも、いまは手をぬいて戦っている場合ではない。この魄気をなんとか無効にしなくてはならな

かった。

紅葉はしたからおもいつき蹴りあげる。黒鬼妖王はうしろに弾けとぶとなんの防御もできずたおれこんだ。それでも、体は勝手にたちあがると、おなじようにたったままの姿勢になる。

（これじゃあ、丸太だな）

黒鬼妖王がそうおもったとき、視界に螢蘭がはいった。その目に射抜かれる。その瞬間、体の戒めがとかれ自由になった。そして、黒鬼妖王はとつさに紅葉の二打目の蹴りをかわす。

「ああ、解けちゃった」

紅葉は残念そうにそういうと手から離れていた時雨をひろおうとした。しかし、時雨が紅葉を拒んだ。紅葉の指が拒まれたせいで焼けている。紅葉はそのことにおどろいたが、焼けた皮膚を舐めて心をたてなおす。

「それは霊刀だろう。どうして、拒絶される」

黒鬼妖王は紅葉よりおどろいた顔をしていった。紅葉は「さあ」とこたえると戦いのつづきをはじめた。頭部をねらって蹴りあげてきた紅葉の足をおなじように蹴りで相殺させると、螢蘭をみた。このまま戦いつづけると殺してしまう。殺していいものなのかという迷いが黒鬼妖王の動きをにぶらさていた。

しかし、螢蘭の瞳は“殺せ”とものがたっていた。黒鬼妖王は意をけつした。

紅葉と本気で戦ったらなかったことにしてやると菜稚琉にいわれていた。しかし、本気で戦えば紅葉を殺してしまう。紅葉を殺してしまつてほんとうに無事でいられるのか、という疑問があった。だが、螢蘭までも“殺せ”といっている。どうゆうつもりかわからないがこれ以上手をぬいて戦っていい相手ではなかった。

紅葉がかわってきているのは性格や戦い方だけではない。その実力も確実にのびている。霊力がないぶんを補強するように体の反応が研ぎ澄まされてきている。はじめはついてこれなかった動きにもいまはついてきているのがいい証拠だった。

「さすが、息子がきにいったただけのことはある。私も本気でやらせてもらうよ」

そういつて、黒鬼妖王は妖気を開放させた。威圧されてその場にしゃがみこむ者もいる。昴摩の母親も地にふしていた。この場でたつていられるのは正体をかくすように布をかぶっている螢蘭と闘っている当人だけだった。蒼ももちろんたつていられなかった。

そんな蒼に螢蘭はいった。

「菜稚琉から預かつてる白紙の札を私が指示したら破いて」

菜稚琉からわたされたのはふたつの札。“袋”とかかれたものと白紙のもの。蒼は震える手で白紙の札をだす。それを両手でにぎりしめてうずくまった。上半身を起こしているだけでもつらい。

紅葉も妖王のびりびりくる妖気にあてられて格のちがいをおもいしらされる。しかし、怖気つくこともひれふすこともない。自分のなかのなにかが妖気にあてられて爆発しそうになっているのを感じていた。

（あとちょっと）

紅葉をみて螢蘭はときをまった。昴摩がまだついていないことがきになったがこれ以上は紅葉がもたない。

「その剣をつかいなさい」

黒鬼妖王は昴摩の母がもっていた妖刀をつかうように紅葉にいった。紅葉は楽しそうに笑うと剣をとりほほ笑みながらかまえた。その笑みには死への恐怖もなく、闘えることへの喜びだけがある。まるで妖かしのようだった。

部屋中の壁はくずれさり家具はみる影もない。柱がかすかにあるだけのただ広い部屋になってしまっている。

「はじめてだ。体がぞくぞくしてる。黒鬼妖王、楽しい」

いまの紅葉は妖かしそのものようにみえた。はじめてその姿をみたときはたしかに高名な清らかな術者と目にうつったのだが。黒鬼妖王は自分がどんなものと闘っているのか、というかんがえを捨てて。いや、もうどうでもよかった。これは殺すか殺されるかの闘い

になっているから。

「光荣だよ」

黒鬼妖王と紅葉は同時にふみだす。爆発的な風圧がまじわった刃からうまれる。中心にいる紅葉と黒鬼妖王にはたがいの太刀の重さが直につたわり手がジンジンとしびれる。しかし、紅葉はそれだけではなかった。黒鬼妖王の体は頑丈な妖かし、紅葉の体は弱い人間。とうぜんのように霊力を封じられた紅葉の体はその力の反動に耐えられない。

「・・・ッ」

紅葉の体は内部から破裂するように裂ける。そのまま膝をついた。血はとびちつてぴちゃ、ぴちゃと音をたてて床をぬらした。

（まだ、闘える）

紅葉の体から血がひろがっていく。大量の血液が失われていくことで体がどんどんと冷えていき、それと比例して意識も遠のいていく。それでも、黒鬼妖王の妖気は衰えることなく紅葉の体をゆさぶりつつける。

（闘える・・・）

黒鬼妖王は血の海にしずむ紅葉の姿をみておわったとおもった。心音は微かにきこえるが、殺すのはおしかった。見た目の美しさというよりも黒鬼妖王自身もこの戦いを途中で楽しんでた。妖かしらしい闘いができることへの高揚感无条件に感じていた。妖王という地位についてしまえばなかなかそういう闘いはできないからだ。（殺すのはおいしい）

螢蘭は二人をただみていた。血の海にいる紅葉を助けにいかうともしない。ただ、その場でみているだけだ。黒鬼妖王が妖気をゆるめていく。しかし、螢蘭は黒鬼妖王が闘いをやめてしまうのを制止した。

「まだ、ゆるめちゃだめ」

その言葉に黒鬼妖王は眉をしかめた。指ひとつ動かすこともできず、だんだんとその心音も弱まっていく相手にもうこれ以上なにも

できるはずかなかった。黒鬼妖王が螢蘭をみると螢蘭はおどろくほど冷静でそして、何かをまつような目でみていた。

妖かしのように闘うことを体が魂が渴望する。それでも、この体ではこのままでは限界がある。際限なく闘える魂魄がほしい。

螢蘭はそつと自分の腕を抱える。紅葉を視界にいれたまま紅葉が目覚めるのをまっていた体にビリビリと電流がはしった。胸の谷間にある花凜の印がわざわざとさわぎだす。

「くる」

螢蘭はそういつて魂気をはなつた。黒鬼妖王ははじめて感じる螢蘭の魂気におどろく。

（これは・・・妖気・・・）

これまで彼女は魄気と刃だけでこの魔界を支配してきた。桜雅族を滅ぼした者たちを狩るときでさえ、彼女は魄気と刃しかつかわなかった。魂気はいつさいつかわなかったのだ。

ドン。みじかく重い音が響いた。螢蘭からではない。血の海に沈んでいた紅葉からだ。内側から爆発したように煙は放射状にひろがり舞いあがると中心をのみこむように消えていく。

煙がはれた場所にたっていたのは無傷の紅葉だった。顔、首、胴体、手足に紅い蔦のような紋様がうかんでいる。雰囲気もまるでちがう、人間らしさがまったくといっていいほどなくなった。はなつ魂気は妖気。

「蒼、いまよ。はやくっ」

螢蘭の声にうずくまったらままなんとか白紙の紙を破る。紙は破れると蒼の手から消えていった。

「ああああああ」

紅葉は生まれたての赤子のように叫び声をあげる。その波動に空気が揺れて空間がゆがんだ。黒鬼妖王は変貌をとげた紅葉にいつきに集中する。そして、心のなかでつぶやいた。

（こんな者に獲物にされたらひとたまりもない）

黒鬼妖王は自分の妖気を最高潮にたかめると襲いかかってくるで

あろう紅葉にそなえた。しかし、それは徒労にかわる。

どこからかふりそそいだ五本の竹に紅葉はかこまれる。その竹に嫌悪を感じた紅葉はそこからでようと走りだした。それをおさえたのは螢蘭だ。紅葉を羽交い絞めにすると叫んだ。

「空地魔天、印契を結び。原初み力をとどめたまえ」

蒼に巻きついていた二匹の管狐がそれに反応してそれぞれ赤と青の細い紐になると竹に無作為に巻きついていく。その紐がすべて巻きついたのをみると螢蘭は紅葉の手をはなした。紅葉は忌々しい者を見るような目で螢蘭をみつめる。そして、襲いかかった。螢蘭はまっごうから紅葉をうけとめる。片手をつかまえ首をとらえた。

「おい、黒鬼。合図をするから、私にむけてありったけの妖気をぶつけなさい」

その言葉に黒鬼妖王は戸惑いをみせる。しかし、意をけつして左手をむけるとそれをささえるように右手をそえる。手にぎゅつと力をこめていった。

「準備整いました」

その言葉に螢蘭は紅葉をそのまま放り投げる。紅葉から手が離れる瞬間、管狐たちにいった。

「あける」

螢蘭のうしろだけ紐がきえる。それにあわせて螢蘭は「やれッ」と黒鬼妖王に合図をおくった。黒鬼妖王はいわれたとおり妖気をすべてはなつた。螢蘭はそれをよけるとその竹の結界からでる。はなれた妖気は紅葉に直撃する。管狐たちは紅葉だけをのこして結界をしめた。

黒鬼妖王は膝をつく。全身の力をこの一撃にこめてしまった。きつと跡形もなく紅葉はきえさっているだろう。そうおもいながら顔をあげると驚くことに紅葉が無傷でたっていた。

「蒼、おきろ。仕事よ」

蒼は体をおこそうとしても妖気にあてられて体をおこすことができない。それどころか呼吸すら正常な状態をたもてずにいる。螢蘭

はチツと舌打ちすると自分の着ている衣をぬいで頭からかぶせた。豊満な胸を片腕でかくす。

すると、蒼の呼吸がおさまっていく。正常な呼吸をとりもどした蒼は体をなんとかおこした。

「もうひとつの札あるでしょう。それも破って」

蒼はいわれたとおりにする。すると、白い三寸の棒がでてきた。それとともに一枚の紙が落ちてきた。それをつかむと紙をみる。紙には二重の円のなかにみたこともない文字のようなものがかかっていた。

「いい。それで正確におなじものを竹の結界のまわりに書くのよ」
「おなじものですか？」

「そう。ちよつとでも間違えてみなさい。殺すわ」

螢蘭の言葉に青ざめている顔をさらに青くするとこのろろと紅葉の閉じこめられている結界にちかよった。紅葉が蒼に手をのばしたが、結界にはじかれる。それでも、蒼に手をのばそうとした。

螢蘭は紅葉のようすにもうこれ以上、女のままではいられないと悟り観念して術をとく。螢蘭の本来の姿をみられる者はごくわずかだ。みたとしてすぐに抹殺されるからほとんどいないに等しい。

（紅葉のやつ餌と間違えてやがるな。腹へってるからな、餌がちかくにあると危険だな）

紅葉と蒼をみて螢蘭は冷静に分析する。さつきから螢蘭は力を弱めてはいない。もしものときに備えて紅葉から目をはなせないでいた。

蒼はいわれたとおり紙とおなじものを描くと螢蘭にいう。

「できました」

螢蘭は竹のまわりをまわって蒼がかいたものをたしかめると「よし」ときちんとできていることをつたえた。そして、胸の龍の印にふれると花凜を呼びだした。

「おまえもう菜稚疏のところへいけ」

傍若無人な螢蘭の言葉に反発したように「どうしてです」といっ

た。だいいちこんな状態の紅葉をおいて菜稚琉のもとへかえられるわけがない。

「俺にできることはもうないかもしれませんが、でも、こんな紅葉をおいてっ」

「うるさい。紅葉の餌になりたいのか。空腹の獣のまえに餌があるほど都合がわるいことはないんだよ」

螢蘭の言葉に蒼は愕然とする。人間であるはずのましてや最高峰の霊能者である紅葉をどうして妖かしのようになつかうのか。ましてや自分を紅葉が食べるようにいうのか困惑をかくせない。

「紅葉はどうしたんですか」

「心配するな。すぐにもとの紅葉にもどる」

蒼にそういうと片手をあげた。花凜は主の要望がわかったのか蒼をくわえるとそのまま穴のあいている壁から飛びたていった。それをみおくった後、まわりにたおれている者たちといった。

「おまえたち、動ける者は動けない者つれてさっさとされ。この結果が破れたら皆殺しだぜ」

螢蘭の言葉にまわりはざわつくそして、困惑の色が周囲を支配した。それをやぶったのは黒鬼妖王の言葉だった。

「いうとおりにしる。あれは対処しきれん」

黒鬼妖王はそういうと螢蘭にむきなおっている。あの結界は普通のものではない。魔を封じるだけのもでもなければ、天のものを封じるだけのものでもない。

「あれはあとどれぐらいもちますか？」

「三日だ。それ以上はもたない」

そういうと螢蘭はまだあらわれない昴摩に苛つく。なにせ時間がないのだ。時間に追われているというのにまだやつはあらわれない。つた。

（チッ、予定が狂ってきてやがる）

「三日あれば、私も完全に回復します。協力しますよ。螢蘭様」

螢蘭は鼻でふんとわらうとどかっとなににすわった。しかし、その

笑いは馬鹿にしたようなものではなく勝手にしろというものだ。た。ほかの者たちは王と螢蘭の姿に蜘蛛の子をちらしたようにその場からはなれる。黒鬼妖王はだれもいなくなったその場所で螢蘭に密談するようにいった。

「あの子はもしかして・・・」

「なにも知らないほうが、いいこともあるんだぜ」

それ以上の言葉を許さないというように螢蘭は静かにいった。紅葉は自由を奪う結界がきにいらぬのか暴れまくっている。しかし、結界はびくともしない。

（あの役ただず、まにあわなかったら惨殺してやる）

螢蘭は紅葉をみながら昴摩がやくここにつくことを祈った。

昴摩はやつとのおもいで鬼族の城を眼前にとらえた。管狐の背中から城にとびおりると窓から部屋にはいった。城の上空には異常な妖気がたちこめている。それは三人分で一つは黒鬼妖王のものが、あとふたつに心あたりはなかった。

「夜叉様、妖王様がっ」

家臣が声をかけてきた。昴摩は侍女になにもいわずうえにいくとした。感じるのは妖気だけなのにこのうえに紅葉がいることがわかる。紅葉にちかづいていとおもうだけで心が力にあふれていくような高揚感があつた。

家臣や衛兵たちが囲む階段に目をむける。そのうえには紅葉がいるのだ。はやく助けにいかないと。紅葉がいない世界は昴摩には想像できない。人ごみのなかに突っこもうとした昴摩をとめたのは鬼柳だ。

「夜叉様、紅葉様のところへいくんですか？」

鬼柳に目をやると昴摩は事務的にこたえた。ここにいてどうしても声に感情がはいらなくなる。

「ああ、紅葉をとりもどしにきた」

鬼柳は昴摩の言葉をはげしい感情でうけとめる。そして、こつ

わずにはいらなかった。

「私は紅葉がほしいとおもっています」

自分が生まれたときにはこの人はもう夜叉の地位についていた。自分の低い者から生まれたにもかかわらず、その地位をもぎとった兄におなじように身分の低かった母親は嫉妬の憎悪をもっていた。自分もいつしか母親の嫉妬という憎悪にまきこまれてこの人を疎ましくおもったのだ。

「そうか……」

それだけをいつてさつていこうとするその背中がおまえには無理だといわれているようでよけいに腹がたった。はげしく馬鹿にされたような、相手にならないと真底みくだされたような気持ちになる。「あなたはなにもかももってるじゃないですかッ。ひとつだけくれたっていいじゃないか！私に紅葉ぐらいっ」

おもわず心の底に隠している自分の恥すべき心を口ばしっていた。こんなことを、負け犬がおもうようなことをいつてしまった。しかし、ふりかえった昴摩は情けなくほほ笑みながらいった。

「欲しかったらやるよ」

そして、階段へとむかつていつてしまった。紅葉を口説いたとき、夜叉への対抗心だけで紅葉をおとそうとしていた。弄んでやろうとおもったのだ。しかし、彼女はそれをなんなく見破り挑発的にみつめてかえしてきた。

本気ならかんがえてやる

自分ひとりをみていつた言葉に心が奪われたのを感じた。心が求めるものはほんとうはなんなのだと問われたその言葉に心を奪われたのだ。そして、ほしいとおもった。そばにいて自分だけを見させたいと。その黒い瞳にうつるのは自分だけでいいと。

しかし、自分には夜叉のようにすべてをすてて紅葉だけ手にはいれたいとおもえなかった。紅葉を手にいれても地位や権力もほしいとおもう。欲しいと紅葉だけが欲しいと固執することは自分にはできない。

（あの言葉はほんとうはこういう意味だったんですね）

「邪魔だ。どけ」

昴摩は人の壁をそういつてとおっていく。人々はさつと昴摩のおる道をつくった。階段に足をかけた。すこし、ちかづいただけでこんなにも押しつぶされそうな重い妖気が渦巻いていることが肌につたわる。

「夜叉、どこへいくつもりです」

ききなれた母の声に昴摩の足がとまる。そして、ふりかえってまっすぐに母をみた。いつからだろうこの人の目をみなくなったのは、あいかわらず冷たい目をしていた。その目があたたかく自分をみつめたことはない。

「夜叉、あなたは私とあの小娘とどちらをとるつもりですか」

母の言葉に昴摩ははじめての反応をみせる。こたえはわかっている。心がこんなに求めるのはひとつだけ。その事実には笑みさえこぼれる。穏やかな光につつまれたような笑みが。

ほほ笑んでその腕に抱きしめて名前を呼んでほしい。昴摩と。

「オレは紅葉以外なにもいりません。そのためならあなたすら切り捨てることできる」

そういつて母に背をむけた。はじめてだった。自分が母に背をむけるのは。いつも母親の背をおっていたのは自分だった。

いまでも背中をおっている。走ることをやめればそれは一生手のとどかないところになってしまうけど。でも、紅葉はふりむいて“昴摩”とほほ笑んでよんでくれる。そして、またその背中をおいかけるのだ。

（オレはおまえをどこにもいかせはしない）

あれから一日がすぎた。鬼柳の部屋だったその場所はあとかたもない。鬼柳の部屋だけではなかった。この階すべてが廃墟のような感じた。その場所に紅葉を抱くように竹の結界がはられている。

竹は神聖なものとされている。そこに、螢蘭が育てた管狐の結界

がからみついているのだ。菜稚琉の管狐がうんだ子なのだが、能力が“結”と“封”だったため螢蘭が育てることになった。管狐は育てるものの魂気に左右される。竹はいうまでもない菜稚琉の力がかかっている。螢蘭と菜稚琉の共同の結界なのだ。

菜稚琉がいれば三日以上結界をもたすことは容易いのだが、菜稚琉がこの場所にはいられない。しかし、紅葉にはこの場所が必要だった。

立ち入り禁止になつてはや一日。黒鬼妖王はおおかた復活している。さすが、妖王というべきなのだろう。そして、全快のために気を集中してたかめているところだ。意外な黒鬼妖王の働きに菜稚琉の「生かせておいてよかったでしょう」という言葉がきこえてくる。

大人しくなっていた紅葉がしずかに結界に掌をむけた。螢蘭はなにをしだすんだと腰をうかせると注意深く紅葉を観察する。昔から予想もつかないことをたまにしては驚かされていた。

（なにをするつもりだ？）

紅葉はそのまましばらく制止する。紅葉のむけられている掌が紅く光る。そして、噴火するように妖気をはなった。結界はずうんと音をたててその攻撃を受けとめる。そして、紅葉はそのまま第二打を準備しはじめた。いくらなんでもこんなもの何発もいれられては結界の寿命がちぢむ。

「おい、おい。暴れすぎだ。あける」

螢蘭は困ったようにうとうと結界をあけるようにいった。蒼がかいた結界の印は紅葉以外には作動しない。消さないように注意すると螢蘭は紅葉のとじこめられている檻のなかにはいった。黒鬼妖王は心配そうな目で二人をみていた。

「まったく、おまえは」

そういつて螢蘭は自分の肩をつかむ。そのまま肩の肉をひきはがした。血がぼたぼた落ちて螢蘭の手には自分の肉がつかまれている。それを紅葉にみせながら螢蘭はいった。

「腹へって苛々してんだろ？ 食べよ」

紅葉はその言葉と行動に構えていた手をもどすと肉と血につられてふらふらとちかづいてくる。紅葉にさらにみせつけるように手をあげると螢蘭はつづけていう。

「ほら、食べ。俺様の肉食ったら他の肉は食えないぜ」

紅葉は手をのばす。螢蘭の指についた紅い血を舐める。ぴちゃ、ぴちゃ、と螢蘭の指を舐めて血を舐めとる。螢蘭は肉をもっていないほうの手で紅葉の頭を撫でてやる。

「よしよし、いい子だ。うまいだろう？」

螢蘭の行動に黒鬼妖王は驚愕の目をむける。黒鬼妖王は螢蘭が力づくで紅葉を押さえつけるものだとおもっていた。本能だけでうごいている紅葉に深い傷をあたえれば傷を治そうとじっと動かなくなる。そうするものだとおもっていたのだ。

紅葉は腕まで血を舐めとるとえぐれた肩に手をのばす。螢蘭の手にある肉にはまだ口をつけようとはしない。自分についた螢蘭の血を果汁のようにうっとりとして舐めとっている。螢蘭は頭を撫でながら紅葉を愛おしそうになだめていく。あまり暴れられてはこまる。境界の寿命をちぢめるわけにはいけない。

「肉より血のほうが好きか？ ほら、肉も食べ。血ばつかじゃこつちの身がもたねえ。肉のほうが腹ふくれるんだからよ」

螢蘭は肉を紅葉の口もとへよせる。紅葉はさしだされた肉をぺろと舐めて味をたしかめるとおおきく口をひらいた。螢蘭は「いい子だ」といいながら紅葉をなでてやる。猛獣を手なずけようとしているようにもみえた。紅葉が肉を口にふくもうとしたとき。

「そんなもん紅葉に食わせんじゃねえ」

螢蘭は溜息をつく。「おそいんだよ」といって紅葉から肉を奪いとった。恍惚とした表情で食事をしていた紅葉に不満の色がうかがふ。そして、螢蘭は紅葉の頭を撫でていた手を頬にうつすと魄気をかける。

「紅葉、肉はおあずけだ」

紅葉はその場にしゃがみこんでしまった。螢蘭はそのすきをついて結界のなかからでる。それから、肩に肉をもどして傷をなおしながら乱入してきた男にいった。

「おい、菜稚琉からきいてきたんだろう？」

「ああ」

「紅葉に2秒以上ふれるな」

昴摩はうなずくと紅葉のもとへちかづく。変わり果てた紅葉を苦しそうな目でみつめた。白い肌には紅い蔦がまきついていているような紋様がうかび、強く清らかで天真爛漫な紅葉の美しさは影をひそめている。いまの紅葉は獰猛な獣のもつ恐慌な美しさがあった。

血で紅くそまった唇、獲物を狙う鋭い目はたしかにぞくぞくするものがありそれはそれで魅力だったが、昴摩はやはりいつもの紅葉のほうが数倍も魅力的だともう。

「いいか、紅葉とおまえの両方の掌に傷をつけて手をつなぐんだ。

そして、なにがなんでもはなすな」

螢蘭の言葉に昴摩はうなずくと結界のなかにはいる。そんな息子に黒鬼妖王はいった。

「なにをするんだ」

昴摩はこたえることなく紅葉にちかづくそつと抱きしめた。紅葉から感じるのはまぎれもなく妖気だった。紅葉の片手をつかまえると昴摩は「ごめん」といってその手を傷つけようとした。

「いや、わああああ」

とつぜん紅葉が叫びだした。昴摩ははじきとばされて結界にたたきつけられる。紅葉は体勢をたてなおすことも許さず昴摩につかみかかった。昴摩はとつさに自分の首を腕で守る。その腕に紅葉が噛みついてきたのだ。

「チツ、破りやがった」

螢蘭は紅葉の予想外の動きに焦りをおぼえる。まだ、掌に傷すらできていない。昴摩ではいまの紅葉の相手は役不足にもほどがある。そして、ことの成り行きをみていた黒鬼妖王にいった。

「おい、もうだいぶん動けるだろう。結果のなかはいって二人でおさえつけるぞ」

螢蘭はなるべく無傷で紅葉をとりもだしたかった。この期におよんでそんなことをかんがえている自分を甘いなおもいながらも結界にちかづいていく。黒鬼妖王も従うように結界にちかづいていった。しかし、それを制したのは昴摩だった。

「大丈夫だ。だれも手だすな」

紅葉が肉を引きちぎろうとしたのを感じて昴摩は紅葉の口に自分の腕を押しこむ。牙の構造上こうされるとはなれるのだ。案の定、昴摩の腕は自由になった。そして、昴摩は紅葉にいった。

「大丈夫だ。助けてやる」

そういつて、昴摩はありったけの妖気で矢をつくった。無数の妖気の矢にかこまれた紅葉は高揚した顔をして獲物を狩る楽しさに胸を躍らせている。それはまるで妖かしが獲物を狩るとき心理。

昴摩は自分からは動かない。妖気の矢を操作することに集中する。どうしても体が動くところと気の操作に甘いところがでてしまう。にらめあったまま動かない二人を螢蘭と黒鬼妖王はしばらく見守ることにきめた。

（傷つけたくはないんだ）

昴摩の咽がなる。緊張の糸がきれたように紅葉は昴摩に飛びつく。昴摩は矢を二分すると紅葉の側面を狙うようにすばやく操作する。

矢の動きに紅葉は足をとめると腕をひろげ掌を矢にむけた。そして、にやりと笑う。

「ハッ」

紅葉の気合で矢は効力をうしなう。矢が完全に無効化して破裂していくのを確認しながら紅葉は昴摩に殴りかかった。とっさに昴摩は紅葉の拳をつかむ。ありったけの力ではなさないように紅葉の手をにぎった。しかし、紅葉の拳が顔面にあたった。目のしたの頬骨から鈍い音が耳に響く。それでも、つかまえた左手をはなさなかった。

「ぐッ」

紅葉はそのまま二打目をいれようと弓のように腕をひく。その顔は残酷に笑っていた。昴摩は冷静に紅葉のほうひとつの拳をみていた。弦をはなしたように腕がとんでくる。その軌道を昴摩は完全にとらえていた。そして、拳は紙一枚のすきまでとまる。紅葉の拳を阻止したのは昴摩の掌だった。

「つかまえた」

紅葉の拳が逃げないように左手とおなじように拘束する。紅葉は暴れて拘束をほどこうとする。

（くそ。二秒っ）

昴摩は両手を一瞬、はなすと紅葉の手が逃げきるまえにつかまえて指を交差させてとらえた。はなれていかないように指と指のあいだをしめてとらえる。紅葉は苦痛の表情をうかべたが、すぐに爪をたててにぎりこめてくる。自分の手に血が流れるのをみて昴摩は自分の甘さをつくづく感じた。紅葉のように拳をにぎりしめることができない。爪で傷をつけたくなかったのだ。

（一秒）

紅葉は皮膚が裂け、肉が引きちぎれるほど爪をたてて抵抗している。昴摩は指をできるだけしめつけると紅葉の背後に気を配る。紅葉の背後そこには二本の妖気の矢が狙いをさだめている。側面の攻撃は目くらましでほんとうの目的はこの二本の矢だ。

「あッ」

紅葉の指が昴摩にまける。力比べでは昴摩にぶがあるのは当然のことだ。紅葉は指のしめつけに屈して体をしずめる。へばりこんだ紅葉をみて昴摩は。

（いまだ）

床にかくした矢がはなたれる。その矢は昴摩の手ごと射て貫通した。そのまま、紅葉の手をはなさず、昴摩は痛みにあたえた。耳に紅葉の苦痛の悲鳴がきこえる。

「きゃああああ」

紅葉は悲鳴をあげて気絶する。昴摩につかまれた腕をあげて人形のように力をなくした。その顔には血の気すらない。ほんとうに白い無機質な肌をした人形のようなだった。ながい黒髪はそれでも艶々としている。

つないだ掌から紅葉の血が流れてくるのがわかる。

（いや、血じゃない。もつと・・・）

昴摩の意識が遠のいていく。かわりにどこからか声がした。それは頭のおくのもつと深いところまで侵入してきて、魂ごと深く深く犯されていくそんな感じがした。それでも、それを不快とおもうことはない。それどころか、ずっと愛おしかったものの片鱗を刻みつけられる悦楽すら感じている。

6 懷抱

身をあずけてとけていく安心感。目蓋をあけてなにかを目にうつすということさえ、いや、もしかしたら息をすって吐いての呼吸すら無意味なことのように感じる。それほど満たされているような感覚が体をとらえていた。

なにもかんがえず、なにもみず、なにもしない。これほど満たされたものはないだろうとぼんやりとおもっ。この世界は自分だけのもの。

これ以上ないほどの感覚。煩わしいこともなにもないこの世界にずっと、ずっとひたっていたい。だれもこの世界にふみいつてほしくない。それほどこの世界は自分だけで満たされている。

（なにもいらない）

なにもいらない。なにも求めない。このことが体を心を魂を自由にかるくときはなってくれる。自分が何者かもわからないこのことが満たされていることのすべてだとおもった。

責任も立場も人間関係さえないこの世界は自分だけのもの。自分のおもいどりの世界。

何か求めることはとても疲れること。心がさかれること。叶ってもそのさが保障されないことに心は怯えるのだ。なにもわからず求めていられるほど自分は無知ではないのだ。

ほんとうにいいの？

どこからか声がした。

これだけでいいの？

声がするほうへ目をあける。いや、どこから声が出ているのかわからないけど声の人物をみたいとおもった。その声はなんだかとても欲しかったものに似ていた。

ほら、満足じゃない

こんどは問いかけではなかった。目にうつったのは白い肌に黒い

髪。ながい髪がゆれてこつちをみようとする。黒くつよい魅力を含めた瞳に射抜かれる。

そばにいれば、満足なの？

顔もわからない自分以外の男に少女は手をひかれていく。ほそく白い体になれなれしく腕をまわし抱きしめている。

平気なの？

問いかけてくる。平気なのかと。そばにいてこんなことになって
も平気なのかと。

ほんとうに？

(やめてくれ)

自分はここにいたい。ここでなにかかんがえず、なにも求めず、
ここでただいたいのだ。業の深さにおぼれて苦しむのはもういやだ
った。叶わないのだ。叶ったらもっともっと欲しくなる。

きつと己の欲は彼女を鎖でつないで誰にもふれさせず誰にもみせない
ようにとじこめて、自分だけがいる世界に縛らなければつきない
のだろう。いや、それでも、もし彼女の心に自分がうつっていないな
ったら。

欲しいよね？誰にもわたしたくないよね？

目をおおうように顔をおおっている掌を恐る恐るほどこいていく。
そうだ。これ以上求めてはいけなさと自分にいいきかせてきたの
だ。欲しい者と自分はあまりにもちがうから、それ以上はふみこん
ではいけないから。

(でも、ほんとうはずっと・・・)

美しい鳥をとじこめるように檻のなかにいれてしまいたかった。
だれにもみせず、だれのもふせさせないように檻にとじこめて鍵を
かけてしまう。その心地よい囁きも美しい羽根もすべて自分だけの
ものにしたい。

どうしたらいいか教えてあげようか？

声は姿をあらわした。黒い髪、黒い瞳、白い肌。ほほ笑んで耳元
でささやく。

簡単だよ

首をしめるように鞘で拘束する。力いっぱいしめたまま螢蘭は叫んだ。

「逃げるッ」

黒鬼妖王は気絶したまま動かない紅葉を抱えて逃げていく。外につづくおおきな穴からとびおりて外へと逃げた。安全なところへと逃がさなくてはいけない。

螢蘭のほどこした結界は予想よりはすこしながくもつたが時間切れで壊れてしまった。もともと物凄く複雑な結界だったのだ。そうながくもつわけがない。

（ほんとうに予定どおりいかねえ）

螢蘭たちの予想では三日で充分だったのだ。一日の遅れはあったものの、はじめから一日おおく余裕をもたせていた。しかし、実際やってみれば時間がたりなかった。紅葉のほうは何とかあったが、受けるほうの昴摩は時間切れという結果になってしまった。

「のまれてんじゃねえよ」

砕かれた鞘をみながら螢蘭はつぶやいた。そして、自由になった昴摩をおう。昴摩が追っている獲物はひとつだ。いそがないといけない。

鬼柳は外をみていた。夜叉と紅葉のことをかんがえていたのだ。視界に猛烈な勢いで落下していくものがうつった。それはまぐれもなく黒鬼妖王であった。そして、その腕に抱かれていたのは。

（あれは）

かんがえるよりもさきにそのあとを追いかけていた。追いつくように建物をけり速度をつけながら落下する。そして、着地と同時にしりだした。すぐに追いつくことができた。

「妖王どうしたのですか」

息も絶え絶えに鬼柳はいった。とつぜんあらわれた鬼柳に黒鬼妖王は紅葉をわたすとひきかえそうとする。捨て台詞のように言葉だ

けのこして。

「夜叉にだけはわたすな」

鬼柳はなにがなんだかわからない。困惑と戸惑いで腕のなかの紅葉をみる。

「う、くつ。はあ」

紅葉がきづいた。そして、まだうつろな目のまま「どこ」とつぶやく。鬼柳はどうすべきかかんがえたがとりあえずまだはつきりと意識をとりもどしていない紅葉を抱えると城とは反対の方向にはした。つた。

そのころ、螢蘭はなんなく昴摩においついていた。昴摩を縛りつけるように術をかける。しかし、昴摩はなんどもその術をやぶる。そして、まえに進もうとする。紅葉以外は目にはいらないうえにうように。

「てめえ、紅葉が殺さないでっていわなかったら今頃殺してるんだぞ」

男相手に手加減しなくてはいけないことに苛つきながら螢蘭はしつこく術をかける。縛ってとじこめるだけではいけないのだ。それでいいならとつくの昔に封印してしまっている。それにそれじゃ、紅葉が悲しむだろう。

「くつ」

再度、呪縛すると螢蘭はそのまま術をきつくしていく。もがいていた昴摩の動きがやつとまった。いまは首だけをうごかしている。そこにあらわれたのは黒鬼妖王だ。しかし、紅葉がいない。

「おい、紅葉はどうした？」

「信頼のおけるやつにわたしてきましたよ」

螢蘭には心あたりがないが、この場に紅葉がいないだけでした。黒鬼妖王は昴摩をみながらいった。

「あなたに任せておくと殺しかねませんからね」

そういつて、紐状の妖気をだすと螢蘭の術のうえから縛りつける。そして、螢蘭にいう。

「こちらは任せてください」

螢蘭は術をとくと紅葉のところへとはいっていった。のこされた黒鬼妖王は息子をみながらいった。

「息子よ。厄介な者に惚れたな」

それは想像以上に満足げにひびいた。

「わああああ」

昴摩は妖気をはなつ。黒鬼妖王の拘束はばらばらに千切れてしまった。昴摩は黒鬼妖王に牙をむける。邪魔な者を排除しようとする意志を感じた。黒鬼妖王はそれをよけるとすぐに体勢をたてなおして、蹴りをいれる。

横腹を砕くようにいれられた蹴りに昴摩が血を吐く。しかし、たおれず、そのまま猫のように身をひるがえすと首に研ぎ澄まされた爪を突き刺そうとする。

「まだまだ、負けはしないさ」

黒鬼妖王の腕を貫通して昴摩の爪が数センチのところにとまっている。黒鬼妖王はそのまま貫かれた腕をのぼし昴摩の側面につくと首をしめる。首をしめられた昴摩は指をぬくと両手でその腕をつかんだ。

「っ、食えばおわりだぞ」

息子に父は諭すようにいったが肝心の息子にはとどいていない。つかまれた腕がぎりぎりと言がなる。砕かれるとおもったが、はなすわけにはいかなかった。砕かれるまえに動きをとめる。

黒鬼妖王は穴のあいている腕で昴摩の腹に風穴をあける。昴摩は大量の血をはいて地にひれふした。腕をひきぬけば栓がぬけたように血がふきだしてくる。昴摩はさらに大量に血を吐き動こうとしない。

黒鬼妖王はこれでおわったとおもった。体は動かないだろうが妖かしなら、いや、息子ならこれぐらいでは死なない。

昴摩を拘束していた腕の袖を口でひきはがし、出血している腕をきつくしばりつける。自己治癒には妖力をつかうのだ。この魔界で

は妖力がすべてだ。黒鬼妖王の妖力はまだ完全ではない。それなのに無茶をしてしまった。腕についた手の痕をみながらつぶやく。

「私ももう歳だな」

すわって天をあおぎみている黒鬼妖王の体に衝撃がはしる。とつぜんのことに目を見開きたおれていく。

「ぐはっ」

吐いた血が顎をぬらしていく。ゆらりとたちあがる影は風穴を塞ぐように手をあてている昴摩だった。そして、そのまま螢蘭がむかつたほうへ消えていった。

「かつ、ごほ、ごほッ」

咳きこむように血をはいて昴摩をおいかけようとする。しかし、腸の一部もひきだされていてさらなる激痛で意識が飛びかけた。それでも妖王は息子が幸せ者だとおもう。これほど妖かしらしく、これほど執着できるほどのものをもったことを妖かし冥利につきると喜ばしくも誇りにおもう。

業に溺れ、業にまみれて、汚れながら奪い去っていく。それが妖かしだ。いまの息子の姿はその本来の妖かしらしい姿をしている。

息子をだれよりも誇らしいとおもうのだった。

はじめてみたとき。自分の血をひいていることを汚らわしいとさえおもった。誰よりも小さく細い体、王族としてはあまりにも弱々しく粗末な妖気に目にいれることさえ疎ましさを感じた。だからこそあんな名をつけて自分から遠ざけたのだ。

紅葉をつれたまま鬼柳は川まできていた魔界からだすべきなのだろうかともかんがえたがどこへ帰せばいいのかわからなかった。紅葉にきいても虚ろな瞳をむけるだけでいつこうに返事がない。そして、困り果ててこの川まできたのだ。魔界の門はすぐそこにある。

血で汚れている髪も肌もきれいにしてあげたいとおもったのだ。竹の結界に封じこめられる彼女をみていたのは鬼柳もおなじである。あれはあれで魅力を感じたが彼女ではないことにがっかりしていた。

美しければそれでいい花とは彼女はちがう。紅葉は紅葉らしくあるべきである。

茂みから音がした。鬼柳は紅葉をつつむようにかかえると緊張した面持ちで茂みをにらむ。夜叉にわたすなといった黒鬼妖王の言葉にしたがっての行動だった。

いつさいの説明もなしにそういわれて二人をひきはがすためのものかとおもったが、それにしておかしいとおもう。それならどうしてあんなに慌ててもどっていったのか。疑問はのこった。それにあのいいかた。まるで夜叉が紅葉に危害をくわえるようなそんないいかただったのだ。

かさ、かさ、と音をさせてあらわれたのは半身裸の男だった。紅葉をとじこめた女に似ている。鬼柳は螢蘭の男姿をみるまえにあの部屋をさった。黒鬼妖王の愛刀をわたすようにと家臣にいわれたのだ。

黒鬼妖王の愛刀は許可のある者以外がふれるとその者を食べてしまう。黒鬼妖王の刀に触れることができるのは夜叉、鬼柳そしてあと三人の子供だけだ。

あの場で刀にふられるものは自分しかいなかった。しかし、刀をとりにもどつてくると立ち入り禁止になっていて結局、刀をわたすことはできなかったが。

男は鬼柳を無視して紅葉をみていた。その目があまりにも優しそうに愛おしそうにみつめるので鬼柳は腕の力をゆるめる。

「かせ」

偉そうに男はいうと紅葉をうばいとつてしまう。そして、そのまま川の淵までいくと紅葉をほおりなげてしまった。紅葉の体はバシヤンと音をたてて水のなかにおちた。

「な、なんてことをっ」

おどろいてかけようとする鬼柳を男は制止する。そして、紅葉にいった。

「おい、いつまで寝ぼけてるんだ」

水の冷たさに完全に覚醒した紅葉は前髪をかきあげていう。

「師匠、ひどいです」

子供が拗ねるような表情をわざとしている。螢蘭はにやっと笑うと紅葉にいった。

「体、洗えよ。汚いからな」

その言葉に紅葉は背をむけると着ているものを脱ぐ。腰にはまだ布が巻きついているが水で紅葉の体の線がよくわかった。それを真っ赤な顔をして鬼柳はみていた。

ゴキ。

そんな鬼柳の首を螢蘭はへんな方向へまげる。そして、その顔に極悪な顔をちかづけておどした。

「みてんじゃねえよ」

その目は殺すとかいてある。紅葉にはきこえない特殊な声でいつているので背をむけている紅葉は螢蘭の本性をすることはなかった。

「師匠？着るものは？」

「ああ、用意してある」

紅葉の言葉にすっかり極悪面はなりをひそめ、紅葉を水から引きあげる。紅葉の足が土で汚れないように抱きあげたのだが、自分が濡れてしまうことはかまっていらないようだ。そして、紅葉の首筋に鼻をちかづけるとくんくんと匂いをかく。

「よし、いい匂いだ。いつまでもあんな臭いしてたら魅力が半減しちまう」

螢蘭は腰にまいた帯から袋状に折りたたまれた紙をだすと地面に投げた。すると紙のなかから着物と櫛と化粧台がでてきた。畳まである。そのうえに紅葉をおろすと着物をきせていく。

着替えなどしている場合かと螢蘭は自分につっこんだが、どうしてもこのまま血に汚れている紅葉をみていたくなかった。紅葉の犯した惨劇をすこしでもなかったことにしてやりたかった。

紅葉が自分のしたことに傷ついてるんじゃないだろうか、というおもいからだった。それに今回のことで自分の正体にきづいてしまっ

た紅葉の気持ちをかんがえるところでも。

「師匠？いつからいたのです？」

髪をといでもらっている紅葉はいう。その言葉に螢蘭は首をひねる。

（覚えてねえのか？）

しかし、きをとりなおして紅葉の髪をととのえていく。紅いの紐で髪をむすびながら紅葉にいった。

「今きたところだぞ」

「どうして、あんなに汚れていたんでしょう？」

「いいじゃんか、きにするなよ。たいしたことじゃない」

螢蘭は覚えてないほうがなにかと都合がいいとおもい。紅葉になるべく深くかんがえないようにいった。そのようすをみていた鬼柳も口をつぐむことをきめると自分で首をなおす。

春の菜の花のような紅葉の姿におもわず、目をほそめる。ほとんど肌着同然のところに表衣をきせただけの姿だが、充分美しい。

鬼柳は紅葉に師匠と呼ばれた男にすこしばかり愠気がおきる。

「よし、帰るぞ」

仕度をととのえた紅葉をだきあげて螢蘭はいった。しかも、とうぜんのように紅葉の頬に口づけもしている。これまでにいいなりで大人しくしていた紅葉は抵抗をはじめた。

「だめです。師匠、昇摩をつれもどしにきたのにこのまま帰れない」

「ほう。俺と菜稚琉の約束破ってでてきて。まだ、偉そうに主張するか」

ぴりぴりとした言葉がかえされているというのに紅葉はきにしない。それどころか「約束はまもった」とツーンとしてしまっている。

「師匠、嫌だ。絶対にかえらない」

紅葉は腕を突っぱねできるだけ抵抗する。しかし、そこはしよせん女の力。男の螢蘭にかなうはずなかった。それでも、紅葉は口で攻撃する。

「師匠のけち、はげ、馬鹿たれ……」

「俺ははげてねえし、けちや馬鹿でもない」

紅葉をおさえつけて歩いていく螢蘭に鬼柳はついていく。どうすればいいのかわからなかった。紅葉に加勢するべきなのか、それとも螢蘭に加勢するべきなのか。

「女の敵、変態、痴漢」

「俺はいつも女の味方だ」

「女装趣味、姉様にいいつけてやる」

その言葉に螢蘭はしんそ勝ち誇った声でいう。

「俺はべつにいいけど。こんかい怒られるのは紅葉のほうだろうか？」

その言葉に紅葉はかたまる。菜穂琉の顔がうかんだ。それも、幼いとき一度だけ本気で怒られたときの顔だ。正直、恐怖がさきたってしまう。

「よしよし、いい子だ。大人しく帰るぞ」

そのときだった。昴摩の気配がした。紅葉は螢蘭の顔がきゆうに険しくなったことを不思議にもいながら首をかしげてみあげる。いつもなら、可愛い姿に胸をきゆうんとするところだが、いまはそんな余裕はない。紅葉をしっかりとかがえなおすと走りだす。

門の入り口まできたというのにそこには昴摩がいた。相手はこちらにきづいていない。紅葉の力をおさえる石の副産物のおかげで紅葉を察知しにくいのだ。もちろんのように螢蘭も自分の気配をけている。紅葉が昴摩の姿をみつける。

「あ、こうっ」

螢蘭はあわてて紅葉の口をおさえると声をださないようにする。正直まよった。紅葉の首にある石をとくべきか、とかないべきか。だが、もしものときのことをかんがえたとどうしても解くことができない。

紅葉の首についている石はただたんに紅葉の力を封じているわけではない。でていった紅葉の一部がもどろうとするのを阻止しているのだ。これがいちばんの目的だった。副産物として魂気をつかえない、紅葉を察知しにくいというおまけが多数ついてきたのだ。

（せっかくここまでできたのにな・・・）

よこにいる鬼柳はつかいものになりそうにもないし。

（じゃあない、鬼ごっこでもするか）

そう心のなかでつぶやきながら螢蘭はふりかえると走りだそうとした。そのときだった。招かれざる雑魚がきたのは。あまりの間合いのわるさに目をおおう。それとともにいいいようのない殺意を覚えた。

「あれ、いいのつれてるじゃん。僕らにもちよつとかしてよ」

「なんならずと俺たちがあずかってあげるよ」

下卑た笑いの二人ずれの男たちに殺意のこもった瞳で螢蘭は射る。その瞳に招かれざる客は顔を青くしてあっけなく退散する。おいかけて殺してやりたいとおもったがそんな暢気な状況ではない。背後から枝を折る音がする。紅葉の口からは場違いなほど嬉しそうな声でそのちかづいてきた相手を呼んでいる。

「昴摩」

螢蘭は決断した。紅葉を鬼柳にわたす。紅葉は「師匠？」と不思議そうな目でみている。

（ああ、可愛いなあ）

頭がきれるようどこか天然ボケのある紅葉を条件反射のようにどんなときでも可愛いとおもってしまう。紅葉のおでこに口づけると螢蘭は紅葉にいった。

「紅葉、いいか。なにかあったら、こいつを身代わりにしてでも逃げるんだぞ」

けっこうひどいことをいつているのだが、表情はかぎりなくやさしい。紅葉と菜穂琉限定にむけられる慈愛にみちた表情だった。そして、きびしい表情になると鬼柳にいった。

「いいか、死んでもいいから紅葉を守れ。もし、かすり傷でもつけてみる・・・」

そこからさきは語らなくてもわかる。鬼柳は「はい」とこたえるとちいさな子供を抱くように紅葉をかかえて走りだした。

螢蘭を無視して紅葉をおいかけようとした。螢蘭はその足を鞭でつかまえる。しかし、昴摩はこんどは無様にこけるようなまねはしなかった。器用に体勢をたてなおすと、足をふり螢蘭の拘束をふりほどこうとした。

この鞭は花凜の変化した姿だ。螢蘭の使い魔である龍の花凜はおきにいりの龍である。聡明で賢く、美しい鱗と顔立ちをしている花凜は能力もはんぱではない。

蒼をおろしてすぐ主のもとにかえってきた花凜はずっと螢蘭命をまっていたのだ。紅葉に自分の正体をきづかれたくない螢蘭は魂氣をつかった戦い方を避けている。そして、いまの状況でさえもその戦い方をえらんでしまう。

あつというまに紅葉たちの姿はみえなくなった。そのことに螢蘭は感心する。

（あいつ、逃げ足は速いんだな）

昴摩と力くらべするきのない螢蘭は足の拘束をはずす。そして、鞭をしならせながら戦闘にはいったときの冷たい冷静な目になる。

「今度は甘くないぜ」

そういつて螢蘭は鞭をしならせる。紅葉を守ることは古からの約束だ。二人で守っていかなければいけない約束。しかし、それはもう約束の域をこえた約束だった。

「おろしてくれ・・・鬼柳っ」

紅葉の言葉は無視して走りつづける鬼柳に紅葉はとうとう頭に拳をいれた。その衝撃に鬼柳の足がとまる。傷つけるなといわれているので紅葉をほおりだしてしまうようなことだけはなんとか阻止した。

「なにするんですか」

紅葉を地面におろすと鬼柳は頭をおさえて苦情をいう。しかし、紅葉は深刻な顔をしてひとりごつのようにいう。

「血がながれてた」

紅葉の目が不安げで鬼柳はそれ以上、なにもいえなくなった。しかし、あの異様な雰囲気を持たせただよわせる昴摩に紅葉をあわせるのはためられる。黒鬼妖王が「夜叉にだけはわたすな」といった言葉がいまようやく肌で感じられているのだ。

走りだそうとする紅葉の手をつかまえると鬼柳はいった。不安げな紅葉をほっておけないがやはり賛成できない。

「だめです。このまま」

予想にはんし紅葉は手をふりほどこうとはしなかった。しかし、そのことがよけいに鬼柳の決意をにぶらせた。不安で悲しそうな目をして自分をみつめている。こんな弱い目をするような人だとはおもわなかった。

「・・・・」

しかし、もどろうとはいえなかった。あの昴摩はまちがいに紅葉に危害をくわせる。

「呼んでるんだ」

切なそうな苦しい声にもうこれ以上さからうことはできなかった。手をはなしてしまう。紅葉は裸足のままかけだしていった。鬼柳はやはり、しんそこ昴摩が羨ましくなる。自分にはあれほどおもってくれている人はいない。

螢蘭はおもった以上の苦戦をしいられていた。何百年ぶりに体に傷ができている。数日前におった傷は螢蘭のなかでは数えられない。あれは紅葉のために自分で傷つけたから数えていないし、傷などとはちつともおもっていないのだ。

たしか最後に傷つけられたのは菜稚琉だ。あれは全面的に螢蘭がわるいということで二人のかなではなしがついている。

「厄介だな」

螢蘭はそういいながらいまついたばかりの手の甲の傷をなめる。生暖かく生臭い味が口にひろがる。花凜を鞭の姿から本来の龍の姿にもどす。そして、花凜に正面から昴摩をおそわせた。龍の咆哮が

あたりをふるわせる。

牙を剥きだして迫ってきた龍の口を素手で昴摩はつかむとそのまま力比べをする。螢蘭はそのすきについて、昴摩の足の側面にもぐりこむ。

（まずは右足）

腕を剣のようにして昴摩の太もめがけて突き刺した。しかし、寸前のところでその目標物がなくなる。昴摩は足をおもいつきりまげて飛ぶことにより、螢蘭の攻撃をよけ、花凜の下顎に攻撃をいれたのだ。しかし、花凜はなんとかたえそのまま昴摩を食おうとおしいった。昴摩の体が花凜におされて遠ざかる。

「くそっ、けっこう屈辱！」

螢蘭はおもいのほか動きのよくなった昴摩にそう吐き捨てると花凜がなぎ倒してしまった道をいった。まるでそれは田んぼの稲のなかを猪がとおったあとのようだ。

ももとの素質が紅葉の影響で開花している。そこに、紅葉の力もくわり予想以上の力を発揮していた。どうやら、力だけでなく肉体の質もあがっているのだろう。だんだんと速度があがり、傷の治りもはやい。

しかし、腹にあいた穴はふさがっていかない。どうやらおおきな傷には手がまわらないようだ。ちまちまと傷をつけているようではとめられないということだろう。回復に時間のかかるような大怪我をさせないといけない。そこまでかんがえると螢蘭は半殺しにするのが最良と結論づける。

螢蘭はすばやく花凜においつくと鼻先にのる。そして、昴摩の顔面に蹴りをいれた。

「これで、どうだ！」

二発目をいれる。昴摩はそれでも花凜の口を押さえたままだ。昴摩は腹に力をいれてふんばるとそのままズズと二本の平行な線をかきながら花凜をとめたのだ。そして、花凜を引き裂こうとする。花凜は身をちぢめて首をふった。昴摩をふりはなそうとしている。

「お、おい。花凜ッ」

花凜は昴摩をふりおとしたが、螢蘭もふりおとされてしまう。しかし、花凜はふりおとしてしまった螢蘭を捕まえると空へとにげる。やはり、賢い子だからこちらが命じなくても行動をおこしてくれる。上空で螢蘭も花凜も体勢をたてなおす必要があった。

「よしっ、いくぞ。花凜」

花凜は急降下をする。標的はもちろん昴摩だ。昴摩も大人しくまっただでいるつもりはないのだろう花凜をみあげて下半身を曲げている。そして、間合いをみて飛びたつた。花凜の鼻に手をあてると腕の力だけでさらにとぶ。

「きたな」

螢蘭は不適に笑うと飛びついてくる昴摩の体に触れるか触れないかほどの力ですつと撫でていく。昴摩の体から自由がなくなり、そのまま重力にしたがつておちていこうとした。螢蘭はその体を片手でつかみとる。花凜はそれを見ると上昇していく。

「このへんでいいだろう」

螢蘭はそういつて手をはなした。昴摩は無抵抗のまま落下。その姿はまるで人形のようなだった。この高さから落ちればいくらなんでもただではすまないだろう。螢蘭の希望は全身骨折なのだが、うまくいくだろうか。受身すらできないのはやはりやばいだろうか。

「うん？」

螢蘭が昴摩の落下をみてるとちいさな影がふたつみえた。その影は昴摩が落下するところへちかづいてきている。ふたつの影はなにかいいあっているようだ。背の低いほうが両腕をひろげてうけとめようとしていた。

「紅葉じゃねえか！！」

螢蘭はあせって花凜からとびおりと昴摩をおうように落下する。花凜もおなじように落下をはじめた。術もつかえないただの人間の紅葉にこの高さから落下してくる昴摩をうけとめることは不可能だ。どうかんがえたって紅葉の即死は目にみえている。

「くっそ！とどかねえッ」

せっかく一瞬のすきについて魄気で動きを完全に封じたというのにこのままではいけない。しかたなく、螢蘭は気合をとばして昴摩の体にかかっている魄気をといた。すると、とたんに昴摩は身をまわめてくるくとまわると猫のように着地する。着地と同時に紅葉を乱暴に抱き上げると攫っていこうとする。螢蘭はいまだ空中にいる。

「とめるッ」

螢蘭は叫ぶしかできない自分に苛立ちを覚えながらせまりゆく地面をいまかいまかとみつめる。

昴摩を阻止するようにたちはだかった鬼柳はまったく歯がたたない。昴摩に斬りかかろうとした刹那。鬼柳の腹から大量の血が噴出した。昴摩は鬼柳が地面に完全にはいつくばるまでに紅葉を抱えて姿をけしてしまった。

「花凜、追え」

やっとのおもいで着地した螢蘭はますますあせった声で叫んだが、もうすでにおそかった。昴摩は完全に気配をけしてしまい樹海のなかにきえてしまっている。上空にいる花凜の目でさえ見失っているだろう。

こうなるとたよりは臭いしかない。螢蘭には昴摩の血の臭いしかたどるものがなかった。紅葉からぬきとっておいた獣笛をだすと口にくくみ、その音色を奏でた。このちかくでもっとも鼻のきく獣がいることを願って吹いていく。

しばらくすると草むらから一匹の妖獣がでてきた。妖獣に昴摩がながしていった血をかがせる。螢蘭はその妖獣の背にのると鬼柳をのこしてさっていく。追うのは昴摩だ。

昴摩が紅葉を殺してしまうまえにとりおさえなければならぬ。とことん予定が狂っている事態に螢蘭はあせりと苛立ちしか感じなかった。

「昴摩っ、おろせ。おまえ腹に穴があいてるだろう」

腹からはもう血はでていないようだったが、衣の汚れぐあいから相当の量の出血があつたことは容易に想像できる。なんと、紅葉が腹を応急処置してやるといつても昴摩は無視してはしっていた。力がつかえれば治癒ですぐに治すことができるのにいまはそうはいかない。

「昴摩ッ」

昴摩に荷物を抱えるように運ばれている紅葉にはいったいなにがおきているのかわからない。きがついたときには螢蘭と鬼柳がいて、なにがどうなっているかわからないあいだに昴摩と螢蘭が闘っていた。二人をとめようとあいだにはいつていつたら、拉致されるように昴摩に抱えあげられ今の状態だった。しかも、信じられないのは鬼柳に手をあげたことだ。

（どうなってるのか、さっぱりわからん）

いくらかんがえてもどうしても全貌がみえてこない。紅葉はなんども記憶をたどろうとしたがどうしてもおもいだせない。まだ覚えているのは昴摩の母親と戦って、黒鬼妖王があらわれたところまでだ。そこからさががぼんやりとしていてはつきりしない。

昴摩はなにも語ろうとはしない。川にはいりさかのぼっていた。そして、岸にあがるとそのまま、またどこかへと走っている。そして、木々がしげり光のとおりない場所にきた。そこには人の丈ほどの縦穴があいていて奥はさらに暗くなにもみえない。

奈落の穴のようなその場所に昴摩はとびこむ。紅葉は落とされないうちに昴摩の背中を強くつかんだ。奈落だとおもわれたその穴は意外とあさく、まだ奥につづく通路があるようだった。昴摩はなにもいわず奥へ奥へすすんでいく。

「っ……」

急に光がさし、眩しさに目をつぶる。そんな紅葉を昴摩は豊かな芝生のうえにほうり投げるようにしておろした。芝生のおかげで痛みはないが、昴摩にこれほど手荒にあつかわれたことはない紅葉は

戸惑いを隠せない。いったい昴摩になにがおきているのだろうか。

「昴摩？」

紅葉はみさげてくる昴摩をみあげていった。逆光のせいで表情がわからない。なぜだかわからない恐怖を感じている。ただ、感じるのは昴摩が昴摩ではないことだけ。

のばされた手を反射的によけてしまう。紅葉はふるえる自分の手を押さえるように胸のうえでかさねた。紅葉らしくないあきらかに恐怖が表情にでている。そんな紅葉の手を強引に昴摩はつかみあげるとひきよせた。紅葉の体がたおれるように昴摩の胸におさまる。

「・・・ッ」

しかし、腹の傷にあたり、とまっていた血がふたたび流れだす。緑の芝生に昴摩の血が染みていく。紅葉は自分の手が濡れていることにきづくにあわてて昴摩からはなれようとしたが、昴摩がそれを許さなかった。紅葉にも昴摩の血が染みていった。

花凜と螢蘭はふたてにわかれ昴摩と紅葉の姿をさがしていた。

螢蘭は幼獣にまたがり森をぬけ、川のまえてたちつくしていた。愕然としてしまう。昴摩の血の臭いをたどってきたというのにここで臭いはとぎれている。妖獣は臭いがとぎれていることにいつたりきたりするばかりでまるで役に立ちそうにはなかった。

花凜に期待してもだめだろう。ここにくるまであまり日のはいらないところばかりをつつきってきたのだ。この川ですら左右に木々が茂り、上空からはみえにくいはずだ。

「おちつけ、かんがえるんだ」

もし最悪の場合、紅葉が死んでしまっているとしても紅葉の魂をこのままにはしておけない。紅葉の魂をしかるべき場所に納める必要があったのだ。紅葉の魂を自然ながれのまま輪廻の輪にくわえることはできない。

桜雅族独特の輪廻の輪ではないと紅葉の魂は分解されてしまうことになる。これまで力をつくして守ってきたというのにすべてが無

駄になるのだ。そうすると紅葉がもう二度とこの世にあらわれることはない。

螢蘭はつぶやきながら髪を鷲掴みにする。昴摩をおってきたこの道には迷いが感じられなかった。一直線に移動しているのだ。しかも、木々が茂る暗いところを一直線にむすぶようにだ。とちゅうには木の大きな窪みや洞窟なんかもあったにもかかわらず、それらを無視してここまでできている。百歩ゆずって臭いにきをつかったとかんがえても、もっとちかくに池があった。それに獣笛の存在もしらないのにこんなに臭いをきにするだろうか。

（目的地がはつきりしている）

螢蘭はそう結論づける。いきなれた場所だからこそ、迷いなく速度をおとすこともなく走りつづけていけたのだろう。特定の隠れ場所があるはずだ。だれにきくのがいちばんいい。母親か、黒鬼妖王か。かんがえるよりもさきに螢蘭は獣笛をひびかせていた。妖獣は鬼の城へ全速力ではしる。

数刻もしないうちに螢蘭は荒々しく扉をあけた。そのへんにいるやつをなかば脅迫しながら目的の人物にたどりついていった。

「な、なんなんですかッ。ここをどこだと」

男子禁制のこの場所にいるのは黒鬼妖王の妻たちだ。侍女たちは雑刀を交差してたちはだかる。そのあまりにも無神経な態度に螢蘭は妖気をはなつて威嚇する。殺意のこもった妖気に侍女たちの呼吸が困難になる。

「おまえが夜叉の母親だな」

ぶつきらばうな言葉をかける螢蘭にいつもの姿はなかった。女性第一主義の螢蘭からは想像もつかない行動と言動の数々。それほどに事態は緊迫している。

「いかにも」

そうこたえた女性の目は冷たい色をしている。しかし、美しい人だった。

「昴摩がよくいく場所や隠れ家にしてそうな場所に心あたりねえか」

訝しい目で螢蘭をみると昴摩の母親は「それがどうしました」とこたえた。刻一刻の事態に苛々しながら螢蘭は怒鳴った。女性に怒鳴るなど平常な螢蘭にはかんがえられない。

「つべこべいわず教えろッ！」

昴摩の母親は目をみひらいておどろき、自分には心あたりがないんだと首をふった。その姿に舌打ちすると螢蘭はその場をさる。早足で歩きながら次の策をかんがえていた。

そして、ハツときづく。生き物を探すのにもっとも優秀なものがあるではないか。

二本の指を口にふくむと音をならす。ピーイという音をなんとかならせば花凜が螢蘭のもとへおりたつ。螢蘭は花凜にとびのると「全速でいけ」と命じた。花凜は気合をいれるように吼えると飛びたつ。あたりは花凜のおこした風圧でぐちゃぐちゃになってしまった。妖かしてさえ飛ばされている。

（花凜なら一〇分でつく）

魔界の門のまえにいた柏と円融は門が急にあきそのなかから螢蘭と螢蘭の使い魔がでてきたことにおどろく。

螢蘭はまったくこつちをみようとしなかった。そのことが二人におおきな影をおとす。

「絶対なにかあったんです」

そういつて、不安そうな柏に円融はいった。

「おいかけましょう」

だが、花凜のあの異常な速度はとても追いつけるようなものではない。どこへいくかもこころあたりのない柏は「でも」といいこもる。

「きつと菜稚琉様のところでしょう」

円融はそういつてはしりだした。柏も円融につづく。

花凜は一〇分もかからず屋敷にもどってきていた。舌をだしゼイ、ゼイ、と息のおおい呼吸をしている。螢蘭は花凜の体をいたわるよ

うにたたき声をかける。菜稚琉の指摘にすこし心がおちついていた。紅葉の首にかけたあの石の術の解除にはふたつある。かけた本人が自分の意志で解くこと。そしてもうひとつは術をかけられている者が死んだ場合だ。冷静になれば紅葉の術は健在だった。

「よくやった。あとは休んでろ」

移動中に螢蘭は菜稚琉に状況を説明している。すこしでもはやく目的の物をよこしてもらおうとしたのだが、菜稚琉はそのままもどつてこいといったのだ。そして、あわてて菜稚琉のもとへいく。本堂にいるといっていた。

「菜稚琉！」

螢蘭があわただしくふみいると菜稚琉は体いっぱい汗をながしなから神獣をおさえていた。その神獣は天界でもっとも足の速い生き物だ。神が使いとして古の昔からよき王につかいとしてつかってきた生き物。

「……これは」

予想外の生き物がいることに困惑の瞳をむける。いかに菜稚琉といってもこれほどの大物を使役することは難しいはずだ。しかも、この短期間でかたのつく相手ではない。

「はやく、獣笛をッ」

その声に螢蘭は菜稚琉の思惑を悟ると獣笛をふく。獣笛の音をきいたとたん神獣は大人しくなり菜稚琉を開放した。菜稚琉はあまりの脱力感に膝をおり床にすわりこんでしまう。

「菜稚琉、大丈夫か」

そういつて駆けつけてきた螢蘭にはそい筒をわたすといった。その筒はいつも菜稚琉の髪飾りとして頭にあるものだった。菜稚琉の管狐のなかでゆいいつ名のついた管狐をとじこめた髪飾り。

「冷静にいきましょう。まだまだ対応しきれる範囲内です」

菜稚琉はそこで言葉をきると今度は狩りの仕方を説明する。

「いいですか、道案内をこの子にさせて背にのったまま狩りをするんです。そのほうがこの子が動くよりずっとはよいですから。それ

と・・・」

自分に紅葉にしてあげたように管狐をおさえることはできないことを螢蘭に説明しようとしたが、螢蘭はそれをさえぎって「わかつてる」といった。とてもいまの菜稚琉に管狐を遠隔操作できるだけの力はのこっていないかった。のこっていたとしてもそんな無理はさせたくない。

「たのみましたよ」

菜稚琉の言葉に螢蘭はたちあがると「ああ」といって菜稚琉の用意してくれた神獣にまたがる。菜稚琉のよびだした神獣は麒麟きりんだった。

麒麟は一瞬できえていった。

菜稚琉は仰向けに寝ころがると肩で息をしたまま力の回復をまつ。螢蘭がさつてだいぶんたつたころ柏と円融がきた。疲労感で眠気におそわれていた菜稚琉は無理やり目蓋をあける。

「紅葉様になにがあるんですか？」

円融の言葉に菜稚琉はほほ笑みもせず、遠い目をしていう。

「ときがくればわかります」

まだ、だれも遠い昔にかわした私たちの約束をする必要はない。遙か昔、菜稚琉と螢蘭にたくされたおもいをする必要はないのだ。そして、そのまま菜稚琉は深い眠りにはいる。夢をみるのは楽しかった。あのころを走馬燈のようにきれいな楽しい思い出だけを夢にみる。

昴摩の隠れ家は不思議な光につつまれている。緑にあふれたその場所は岩の壁も地面もすべて緑におおわれている。円柱のその穴は蔦の蓋がされていて明るいのは岩にはえる苔のおかげだ。苔は緑から黄色の光をはなっていてあたりが目で見えるほど明るい。すこし、すきまのあいた屋根からは日の光もさしている。

昴摩の体をきづかうとどうしても強引なことではできず、紅葉はどうしたものかとかんがえる。さきほどまで抱いていた恐怖心より昴

摩の体をおもつ心のほうが勝っていた。

「昴摩」

できるだけやさしく名をよんでやる。昴摩がどんなふうにあの城で生きてきたのかわかったから。だから、あんなに紅葉がつけた名前をよるこんだんだ。紅葉のだれよりもいちばんそばにるようにつけた名前だ。

昴摩のきつく縛るような腕の力がすこしよまる。紅葉はおなじように昴摩の名をよんだ。そつと紅葉は昴摩の体をおしかえすと昴摩の目をみた。離ればなれになってからこうして昴摩の目をみるのはじめてだ。

金色の瞳がさがるようにむけられていて、なんだか辛そうだった。そつと頬にふれて紅葉はいいきかせるようにいう。

「止血しよう」

そして、紅葉は腰紐をほどくと袴も脱いでしまう。袴をちょうどいい大きさに破く。昴摩のきているものもとりあげると傷口に袴をおしあてて、袴の紐で縛った。昴摩は苦痛そうに呻いたが、紅葉は力をよわめず、そのまま胴回りをしっかりと固定するように腰紐でさいど縛る。

止血はおわったが、おもった以上に出血がひどい。大量の血液が失われてしまったことで昴摩の体は死人のようにつめたかった。

「全部脱げ」

紅葉はいうがはいか行動がはいか昴摩から濡れている衣をはぎとる。紅葉は自分の乾いている表衣とそのしたに着ていた襦袢を昴摩にきせる。表衣を昴摩にかけるとその体に自分の身をよせる。体を温めないといけないとおもったからだ。そして、掌を歯で傷つけると昴摩の口元によせた。昴摩は躊躇いもせずその血をすする。

「紅葉」

しばらく血をすすっていた昴摩が紅葉の名をよんだ。血はもうとまっているがまだまだ血液がたりない。紅葉は昴摩が自分の体をきづかってくれているのだとおもい。さらに手を昴摩のまえにだすと

いう。

「いいから、飲め」

しかし、昴摩はそれ以上のもうとはしなかった。さきほどの高圧的な雰囲気はうすれて紅葉の目にはちいさな子供のようにうつる。首に手をまわすと頭をなでていつてやる。

「二人で帰ろうな」

二人で帰ろう。

その言葉に昴摩は穏やかに目をつぶる。二人でいたいのだ。二人でなくては意味がない。

(・・・紅葉・・・)

オレだけのものにしたかった。ずっと、ずっと。自分だけが特別だと生きる実感があるといってくれた。だから、昴摩はよけいにそばにいたいとずっといっしょにいたいとおもったのだ。自分だけが紅葉の特別でありつづけたいと。

(あ、鬼柳。はやく助けてやらないとあいつ餌になるな)

紅葉は不意に鬼柳のことをおもいだす。魔界であんなふうな腹に穴をあけてよこたわっていたら、死んでしまう前に魔獣や妖獣に食われたりする。たぶん、動けたらどこかにかくれているとはおもっただけだ。できるだけなんでもないように紅葉は昴摩にいう。

「なにがあつたかは知らないけど、鬼柳もつれていくぞ」

その言葉に昴摩の表情が変わる。ギリッと奥歯がなり険悪な表情をうかべた。その表情をみたものはあまりの切なさで涙がでるかもしれない。しかし、紅葉がその表情をみることはない。

「・・・オレさえいれば」

ちいさいつぶやきに紅葉は「何？」と問いかける。昴摩はなにがいいたいのか耳をすました。

「・・・」

しかし、なにも返事はなかった。沈黙がながれる。

その沈黙をやぶったのは昴摩だった。紅葉の体を強引にひきはなす。つかまれた腕がきしむほど強く握られていて紅葉は苦痛を昴摩

にうつたえる。しかし、いつもならゆるむはずの力がいまは強く握られたまま。

「昴摩」

紅葉は昴摩をみあげる。その表情はなぜか激怒している。紅葉にはまったくその意味がわからない。なにかきにさわることをいつたのか。それともいつもの恪気なのか。しかし、いままでこんな表情をむけられることはなかった。こんな怒気をはらんだ表情はみたことがない。

昴摩は襟元に手をかけると力まかせに左右にひらいた。紅葉はまさかこんなことをされるとはおもっていらず、目をみひらいて昴摩の次の行動をみているしかなかった。どうして、こんな自分を責めるような目をしているのかわからない。

胸がすべてみえていいるわけではないが首、鎖骨と昴摩の目にさらしてしまっている。いつもならなんともおもわないこと。

「あつ・・・」

紅葉はなぜだが物凄く恥ずかしいことをしているようなきがして手で胸をかくそうとする。いつもなら、目をそらして赤くなるくせにいまはまったくと紅葉をみすえているからかもしれない。

「や、やだ」

隠そうとした手をおさえられて紅葉は抵抗する。しかし、靈力をつかえるのなら勝ち目はあるがいまはなんの力もつかえない普通の女の子なのだ。力では昴摩にまけてしまう。

「昴摩、いやだ。やめてっ」

紅葉にこたえずただそんな紅葉の姿をみているだけだ。

「オレのだ」

昴摩はつぶやいて紅葉のむきだしになった白い肌に顔をよせる。紅葉はなにをされるのかわからず抵抗の言葉も頼りなく弱々しいものになる。

「・・・」

ぴちゃっと濡れた音がしたとおもいと激痛がはしった。痛みの場

所は心臓のうへの皮膚だ。容赦なく昴摩の牙がふかく突き刺さってくる。紅葉は身をそらしてその激痛に悲鳴をあげた。

「きゃああ、ッ」

昴摩は滴る血をなめとる。一滴でも逃がさないようにあふれる血を次々と舐めとっていく。紅葉の強張っていた体から徐々に力がなくなっていく。急速に自分の熱がなくなるのを感じながらぼんやりとしていた。腕にも力がなくなりだらんとたれてしまっている。

そんな紅葉のようすに昴摩は戸惑うことも後悔すらせずに血をすすっていた。このままあますることなく血をすすり、飲み干し、魂ごと心臓を食ってしまったら、紅葉はずっと自分だけのものになる。

「おらああああ」

天井がつきやぶる音と叫び声が響く。昴摩は妖気でふってくる木や葉、蔦をはじきとばした。紅葉と昴摩に日の光がふりそそぐ。

「昴摩、てめえ」

螢蘭はあまりの光景に怒りをあらわにする。そして、昴摩の心臓を背中からひとつきにしようとした。しかし、紅葉が昴摩の心臓を守るように背中に腕をまわす。そして、螢蘭をみつめながら紅葉がいった。

「殺さないで」

声はとぎれとぎれで力がなく、その表情には生気がなかった。白く弱々しい顔は死に顔のようで螢蘭はぞっとする。紅葉を目のまえでうしなってしまう。しかし、螢蘭がかまえたままかたまっていると紅葉はさらに言葉をかける。

「師匠・・・お願い・・・」

螢蘭は鋭くのばした指を拳にかえるとそのままにもいわず背をむけた。苦渋の選択だった。紅葉の腕ごと昴摩の心臓を貫通することもできた。紅葉の腕はすぐに菜稚琉に治療させればいい。菜稚琉なら痕ものこらずきれいに治してくれる。では心はどうやって治すのか。

あの惨劇の日。あの後にみた紅葉の姿はみるに耐えないものだった。

た。黒く艶やかだった髪は老いた年寄りのように白く鈍く光り、目にも光はなく、笑うことも怒ることも泣くこともなかった。人形のように感情がない紅葉の姿は間違いなく自分たちの落ち度の結果だった。

「紅葉ッ」

すがりたいたのは紅葉のはずなのに昴摩は紅葉の名をよぶ。紅葉はそつと頭をつつみこむ。不思議と恐怖心がない。死への恐怖もなかった。

「昴摩、好きなだけ飲め。おまえになら全部やる」

うわごとのような力のない言葉なのにその瞳は強く光をやどしていた。体が冷たくひえて指の動きがにぶってくる。はあ、はあ、とあさい息をくりかえす言葉は体力を消耗していく。

「・・・紅葉・・・」

昴摩が紅葉をみあげてくる。皮膚に食いこんだ牙はひどく惨たらしい痕を白い肌のにこしてしまっている。紅葉は冷たい手で昴摩の頬にふれる。ここにきたときはちがいが昴摩の頬には血色がもどりあたたかかった。紅葉はそのことが無性にうれしくなって、自然と涙があふれてくる。

「昴摩、よかった」

声までふるえている自分が紅葉は不思議だ。声がふるえて涙がでるのにわるくない。

「紅葉、オレのこと好きか？」

昴摩は紅葉をみつめていった。紅葉はそんなあたりまえのことをいわれておかしそうに笑ってこたえる。どうしてそんなわかりきったことをきくんだろう、とおかしくてしかたなかった。

「あたりまえだ」

その声も表情も満足そうで昴摩は目から鱗がおちたように後悔の念がつかぶ。そして、あわてて自分の肩にかかった衣で紅葉をつつむと労わるようにだきしめる。

（ふふふ、いつもの昴摩だ）

うれしそうに心のなかで笑うとそのまま意識をなくした。力がなくなりどつしりと重くなったことで昴摩はよけいに冷静さをうしな
い紅葉を抱えたままおろおろとするばかりだ。

螢蘭の存在をまったく忘れている昴摩の頭に蹴りをいれると螢蘭
は一喝する。

「馬鹿やろう、落ち着け。今すぐ命がどうこの状態じゃねえ」

そして、二人は紅葉を抱えたまま鬼の屋敷にもどる。ここから一
番ちかいのは鬼の屋敷だ。

（チツ、無理してでも麒麟のこしておけばよかったな）

ここについてすぐ麒麟を自由にしたのだ。いつまでも麒麟をおさ
えつけることはむずかしかったからだ。麒麟ほどになるとずっと獣
笛をふきつけていなければならなかった。そこに管狐もいたのだ。
神経をこれでもかと酷使しなければいけなかった。

「あ、黒鬼妖王」

紅葉に負担がかからないようにはしっているとかばかりかけてい
る黒鬼妖王を螢蘭はみつけた。昴摩も黒鬼妖王に大怪我をおわせた
ことをおもいだす。それとともに鬼柳のこともおもいだした。

「螢蘭様、鬼柳も忘れてる」

「しるか。おまえが回収しにいけ」

昴摩の言葉にそうかえす。わざわざ頭のなかで天秤にかけなくて
も優先順位はわかる。こたえをみちびきだすのは呼吸をするよりも
簡単だった。

「鬼柳はあとにしましょう。あいつも妖かしのはしくれですから大
丈夫です」

黒鬼妖王にいま死なれては自分が妖王の座につかなくてはいけなく
なる。せつかく相思相愛の確認もできた昴摩はなるべく煩わしいこ
とは避けたい。

「はなから心配してない」

螢蘭はそういうと昴摩の肩に黒鬼妖王をぶらさげる。そして、紅
菜をひきとろうとしたが昴摩はいやがった。威嚇しても脅してもゆ

ずらないのでしかたなくあきらめる。

（ああ、俺の紅葉がとうとう・・・うううっ）

「親父、つかまつてろ。おちたら拾ってやる暇はねえ」

そついうと昴摩ははしりだした。昴摩がだれよりもなによりも優先するのは紅葉。

「誰か、医者だッ。医者と呼ばっつ」

荒々しく城のなかにはいると黒鬼妖王をおろす。家来たちは黒鬼妖王に群がり手当てだと騒いでいる。紅葉にはとうぜんのようにだれも手をかさないしきづかないようにすぎていく。

昴摩は騒いでいるものたちを無視して自分の部屋にいこうとする。紅葉の体を楽にしてあげたかった。血の気がなく、青白い顔に紫の唇をした紅葉は動こうとはしない。紅葉はまだ気絶したままだ。

「ちよつとまで」

窓をコン、コン、とたたく音にきづいた螢蘭は窓をあける。そこには菜稚琉のよこした管狐がいた。額に×の傷がある管狐と頭に三角巾をまいている管狐だ。螢蘭はその特徴的な管狐を喜んでまねきいれる。

「昴摩、腕のいい救護隊がきたぜ」

言葉をいいきるまえに管狐たちは昴摩の腕のなかにいる紅葉にちかづく。そして、紅葉の傷をまじまじと観察して、手首をつかみ脈をみる。

二匹は互いに顔をあわせるとコンコンと泣きあうとうん、うん、とうなずきあう。それから包帯をとりだし、薬草を調べると患部にぬる。さらに薬草を調合して紙につつむと昴摩にわたした。

「・・・一日三回服用？」

管狐にわたされた袋にかかれた字をよんで昴摩は疑問をうかべる。螢蘭はそうすに三角巾の管狐をしめあげながらすこむ。

「だれが、そんなことしろっつてんだ。ああん？狐料理にして花凜の餌にすんぞっ」

管狐は汗をながしながら首をふる、ふる、ふるとどこからか一通の手紙をだした。そこには菜稚琉の字がかかっている。

「・・・・・・・・なんだ？これ！？」

そういつて螢蘭は手紙を手からおとした。昴摩はその手紙をひろいあげるとよむ。

紅葉へ

死ぬような怪我ではないのなら自力で治しなさい
無理をした罰です

昴摩は二杯目もあることにきづいてぱらりとめくる。

螢蘭へ

人は意外に丈夫にできているものです

くれぐれも管狐を脅しておもいどおりにしようとしなないように

昴摩は螢蘭に二枚目の紙をわたす。いままさに手紙にかかれているように、螢蘭は二匹の管狐に凶悪な顔をむけて握りつぶそうとしているところだった。

「なんだよ」

きがたっているのだろう。そういつて差しだされた二枚目を乱暴につけとるとそこに目をおとした。そして、青ざめてあきらめた表情をうかべ気の毒におもうほど肩をおとした。

螢蘭から解放された管狐は黒鬼妖王にちかよると、風穴のあいた患部に手をあてる。そして、かざした手から黄緑の光をだすとあつとゆうまに傷をふさいでしまう。黒鬼妖王は患部を押さえながらおきあがるといった。

「鬼柳を忘れているだろう」

その言葉に昴摩は「あつ」といつて黒鬼妖王をみるのだった。鬼柳はそのあと家来たちに搜索され城につれもどされると黒鬼妖王と

おなじように管狐たちが跡形もなく傷を治した。

結局、紅葉は一週間も高熱にうなされ意識を朦朧とさせて苦しんだ。やっと一週間たちおきあがれるようになったが、動いたびに傷が痛んで苦痛の表情を浮かべる。

大量にうしなった血をつくるため薬草の食事が四日ほどつづいた。そのときがもつとも苦痛そうな顔をしている。薬草がなかなかの味でしかもかなりの量があるのだ。

昴摩はつきつきりで看病し、自分の部屋をとうぜんのように紅葉に提供している。

紅葉の口にあう消化にいい食事をつくるのも昴摩。

調査された薬を紅葉に飲ませるのも昴摩。

さすがに着替えと体をふくのは螢蘭がやったが、それ以外はなんでも昴摩が率先してやった。そんな夜叉の姿にまわりはただおどろくばかりだった。紅葉のそばにいる昴摩はおどろくほど表情がかわり、子供のようにうつる。

この城での昴摩は冷静、冷徹、けっして笑うことも泣くこともない非情な夜叉。いっさいのすきをみせない優秀な時期王。けっして、笑ったりましてや人にかかわれたりするようなことはない。

昴摩はこんなところでも紅葉が安心して眠れるように紅葉が眠るときは椅子にすわって手をにぎってやる。はじめて夜叉の権力をつかい誰もちがつかないように人払いをしてもいた。それは徹底していて、この部屋にちがづけるのは螢蘭と昴摩だけだ。それがたとえ黒鬼妖王だとしてもおいかえしていたのだ。

そして、二週間がすぎ。血色も完全によく歩けるようになった紅葉を昴摩はつれて自分たちの屋敷にかえった。黒鬼妖王にも母親にも挨拶せすにさっさと帰っていった。安心できるところで一刻もはやく静養させてやりたかった。

ここはしょせん魔界。紅葉が安心して休めるようなところではない。

終章

紅葉は昴摩をもう使役しなくていいことを螢蘭は説明していた。紅葉にかかっていた魔をはらう術をとりのぞいたと説明したのだ。解いた理由を螢蘭はこう説明している。

「もう自分の身は自分で守れる紅葉にそんな術は邪魔なだけだ」

表向きは紅葉の身を守るためにかかっていたとされるその術は実は柚羅乃が遙か昔に紅葉にかけた術だった。本来の効果は紅葉のなかにある昴の血を抑えることにある。しかし、今回のことで昴の血は昴摩の体に封じこめられたのもう紅葉には必要なくなった。

副産物に魔をよせつけないという効果があったただけだ。両親がかけたということになっているがあんな高等な術をかけられるわけがない。形だけの儀式をさせてそうおもいこませていただけのこと。

「昴摩とよんでもいいのか？」

そのことをしった紅葉が昴摩にいちばんにいった言葉だ。昴摩は紅葉の手をにぎると額をつけて紅葉に願うようにいった。

「オレの名前は紅葉からもらった昴摩だけだ」

それをきいた紅葉はうれしそうに何度も何度も昴摩と名をよんだ。そのことを昴摩も喜んでうけいれる。そして、紅葉にいった。

「何度でもよんでくれオレのゆいいつの名を」

螢蘭はそんな昴摩に殺意をむけていたが無邪気に喜ぶ紅葉に免じて半殺しで許してやると心のなかでつぶやいたのだった。

黒鬼妖王の協力もあり、こんなかいあつた紅葉の騒動は他言無用になっっている。紅葉にも教えないということと昴摩、螢蘭、黒鬼妖王のなかではなしがまとまっていた。記憶がないのにわざわざ教えてやる必要はない。

紅葉は何者だ、と疑問をぶつけ事細かな説明を求める者もちらほらいたが、黒鬼妖王、夜叉、螢蘭の圧力にあつてはそれ以上追求する馬鹿はいない。螢蘭などこれ以上とやかくいうやつがいれば抹殺、

という雰囲気をつくすこともなくありありとだしていた。

「一切の他言を禁じ、これを破ったものはじきじきに処罰する。それで異論はないな」

黒鬼妖王のこの言葉でこのことは完全にかたがついた。

紅葉の傷はすっかり完治していた。傷の痕がのこってしまっていたが、螢蘭が首の石をとってくれると紅葉は自分でその傷を跡形もなく治した。べつに紅葉は治すきがなかったのだが、傷をみるたびに昴摩が苦しそうな悲しそうな顔をするので忍びなかったのだ。

「きにするな」

何度いってもそういう顔をするので紅葉はきれいにもとどおりに治すことにしたのだ。治った肌をみたとき昴摩は「ごめん」と何度もいってわらっていた。

「紅葉様、もう桜もほとんど散ってしまっていますね」

しばらくして柏はもう桜が散って桜見酒ができなかったといった。柏の言葉に紅葉はしんそこ悔しがりがつくりと肩をおとした。柏のうれしそうな声での励ましがあつたが紅葉の悔しさはさらにますますかりだ。白暝酒はというと菜稚琉にすべて没収されてしまっている。そのことも紅葉の落胆に拍車をかけたのだった。

そして、だらだらとした日常がもどってきた。菜稚琉にちかじかこちらへいらつしやいといわれているがまだとうぶんはいきたくない、いかなくてもいいだろう。

紅葉は春の名残を一日中寝てすごす。陽射しをあびながら昴摩を枕にして寝ていた。

「・・・うん」

紅葉は目をこすりながら目をさます。まだ、日は高くあたたかい。「おきたのか？」

まだぼーといている紅葉に昴摩がいった。無防備な紅葉の表情に昴摩はあたたかい気持ちになる。髪が頬にかかって邪魔そうだからやさしくはらってやる。

紅葉はそんな昴摩にやわらかくほほ笑んだ。そのあまりにも無邪気

で朗らかな笑みに昴摩は顔を赤くしてしまふ。こうしてこんな笑みをむけてくれる男は自分だけなのだ。紅葉にとつての特別は自分だけ。

ぼーとしていた紅葉はおきあがると昴摩の頬にふれる。

（まだ、寝ぼけてる）

紅葉をみながら昴摩はうれしそうにみている。愛おしい人はこんなにもきらきらしてみえる。それが両想いともなればキラキラはまし、さらにほかほかした気持ちまでくわわって頭に春がきているような感じがした。

不意に紅葉の体がのびあがり、唇が額にふれる。昴摩はそのとつぜんのできごとに一瞬、かたまと顔を真つ赤にして目をみひらいていった。その声は裏返っていてすこしかっこわるい。

「なにっ、く、紅葉ッ」

紅葉は昴摩の膝のうえに横すわりになると頭を昴摩にあずける。

そして、自信ありげにいう。

「また、おかしくなったら私がとめてやるから」

紅葉にはこんかいのことはこう説明してある。

黒鬼妖王と紅葉が闘っているときいた昴摩はあわててその場にあられた。そこで昴摩がみたのは血まみれの紅葉の姿で、きをうしなつてぐったりとしている姿だった。紅葉を傷つけたことに激昂した昴摩は黒鬼妖王と刃をまじえ、戦いのなかで強く頭をうっておかしくなった。

紅葉に教えられている事実はこれである。鬼族の記録帳にもこれとまったくおなじことがかかっている。

「紅葉・・・」

昴摩は感動して紅葉をみつめている。その瞳がだんだんとあついものになり紅葉にそつとちかづいた。

くしゅん。

紅葉がくしゃみをしたわけではない。もちろん昴摩がくしゃみをしたわけでもなかった。

「おあついところわるいですが」

そういったのは鬼柳だ。いつのまにか廊下には鬼柳、黒鬼妖王、螢蘭、菜稚琉が二人をみていた。

「なっ、い、いつからっ」

とんだところをみられた昴摩は狼狽をあらわにする。螢蘭は顔半分をひきつらせながら怒りをあらわにして、紅葉を昴摩からとりあげる。小さい子供のように抵抗しない紅葉はあつというまに螢蘭の腕のなかにおさまる。

「そばにいることは認めてあげたけど、交際は認めてないのよ。昴摩くん」

昴摩くん、といわれること自体がいいよのない恐怖をやどしている。細い肩に手をおいて紅葉は螢蘭にいう。豊満な胸が紅葉の体をすこし圧迫している。

「師匠？私は昴摩と交際してないぞ」

その言葉に昴摩はもちろん、黒鬼妖王、鬼柳、螢蘭もかたまる。四人は「え？」という表情をうかべていた。四人のだいの男（ひとりいまは女装中）がこんなまぬけな表情をならべているとかなりおかしい。

（まあ）

菜稚琉は心のなかで紅葉の言葉にみじかい感想をつける。ひとりだけ平常心のままだ。

しばし沈黙。

「く、紅葉、オレのこと好きだっていったよな？」

昴摩が意を決したように指をぴくぴくさせながらいった。紅葉はきよとした顔でこたえる。

「いったぞ。好きじゃなきゃいつしよに住まないだろう？」

「さつき、オレに口づけたよな？」

昴摩がなにをいいたいのかわからない紅葉は不思議そうな顔をする。

「したぞ？だめだったのか？」

円融や柏にしたときふたりは「そのようなことなさないでください」といったのだ。ふたりとおなじで口づけられるのが昴摩もいやなのだろうか。

さらに勇気をふりしぼって昴摩はいった。やめておけばいいのに。

「なぜ？」

「だって、家族には口づけして愛情表現するだろ？師匠がそういつた」

昴摩のつかのまの幸せは音をくずれて塵になり、さらさらと風に流されてきえていく。逆に螢蘭の勝ち誇った高笑いがあたりにひびく。それに遅れて黒鬼妖王の馬鹿にした高笑いと鬼柳の気の毒そうな哀れみの視線が昴摩にそそがれる。

（こつち方面はやはり紅葉は鈍感なんですネ）

菜稚琉がこれまでの紅葉の姿をおもいうかべながら心のなかでいった。そつち関係の自分の気持ちには疎いようだ。では、昴摩が紅葉によせる好意はどうおもっているのだろう。好奇心にかられて菜稚琉は紅葉にといかける。

「昴摩は紅葉と比翼連理の契りをかわしたいとおもっているとおもっただけど？」

紅葉はさらによくわからない顔を見ると菜稚琉にいった。その言葉は文字どおり傷に塩を芥子を唐辛子を塗るようなことになる。

「昴摩が私に恋しているのはわかってる。だから、私はうけいれて家族としていっしょにいるんだ」

その言葉に高らかに螢蘭の笑いがふたたびあがる。馬鹿にするように笑っていた黒鬼妖王もあまりの惨劇にさすがに同情の目をむける。昴摩は口をあけてもう風化している。

「紅葉にとっては恋も家族もいっしょなのね」

菜稚琉は自分の分析の結果を素直にくちにだした。他が自分にむける好意が恋心だと認識することができるが、紅葉自身が恋心というものを理解することはないということだ。

（紅葉のおもいも恋心だとおもっただけだ）

恋心を感じたことのない者がどうやって恋をよせる者にほんとうの意味でのおもいをかえすことができるだろうか。

「家族と男女ではなにかちがうのか？」

紅葉の無知なというよりも無邪気なといかけに螢蘭は紅葉の頬に口づける。これが、いや、こいつが紅葉の認識のずれをおこさせたすべての原因だ。

「いっしょよ、いっしょ。父と母と子供と友とおなじ愛情よ」

螢蘭はさらにつよくすりこませるように紅葉にいった。菜稚琉はそんな二人をみながらおもう。

（まあまあ、螢蘭たらそんなことばかりいつて）

「それより、そろって何しにきたんだ？」

紅葉の問いに鬼柳はこたえる。昴摩を憐れみながらもまだ自分にもつけないすぎがあることに自然とやるきと喜びがわきあがる。

昴摩はまだしらないが、黒鬼妖王は二人が帰ったあと公的に紅葉を認めている。つまり、鬼族に嫁にくることを認めたのだ。しかも、紅葉の認めた相手を夜叉にすると口ぞえもしている。つまり、紅葉の夫になれば自然とその者が夜叉になることになったのだ。

「藤見酒でもごいっしょにどうかとおもいまして・・・白^{はくめいしゅ}瞑酒ももってきたんですよ」

その言葉に紅葉の顔がぱああと明るくなる。そして、ほんとうにうれしそうにいった。

「ほんとうにもつてきてくれたのか？」

「はい、城中の白瞑酒をもつてきましたからたくさん飲めますよ。馬でのんびりいきましよう」

紅葉の瞳はきらきらかがやいている。そんな紅葉におもわず、手をのばして鬼柳はいった。

「お姫様、どうか私の馬でごいっしょに」

紅葉が返事をするまえに黒鬼妖王はおなじように手をさしのべるという。

「ただ若いだけの男より、私のような味のある男はいかがかな？」

螢蘭は紅葉をおろすと男にもどり二人にたいこうして膝まずいて手をさしのべた。まだまだ可愛い愛児を他のやつにわたすつもりはない。

「やらしいことされるからやめとけ。俺の手をとれよ、紅葉」

三人に手をさしのべられている紅葉にきづいた昴摩は風化から我にかえるとあわてて手をさしのべていった。

「紅葉、オレにつッ」

昴摩がいちばん格好わるく、いちばん必死な感じがした。紅葉はそんな昴摩にくすくすとわらうと昴摩の手をとった。その笑いはけっして馬鹿にしているようなものではなく自然ともれてしまったと類のものだ。

手をとってもらえたことにほっとすると昴摩は紅葉を抱き上げる。いまはこれだけで満足しなければいけないとおもった。間違いなく、鬼柳や親父よりは上位にいるし、螢蘭のことは親兄弟のようにおもっているようだから。

恋心がどんなものかわかっていないということとは他に宿敵があらわれる可能性をはらんでいるがいまはとりあえずこれで納得するしかない。まだ、自分にも機会はあるはずだ。そう結論づけると昴摩は藤見にむかった。

春から梅雨に季節をわたす藤の群生はうつくしく。青空に紫の花をたおやかにゆらしている。吹く風は爽やかに過ぎさっていき、やさしい日との調和を楽しませる。そんな、春の最後の宴の場で六人はそれぞれに楽しんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4761d/>

導乎草子～草子シリーズ2～

2010年10月8日14時17分発行